
学校へ行こう

nao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校へ行こう

【Nコード】

N7901V

【作者名】

nao

【あらすじ】

異端審問局。

己のエゴを貫き通す、それ以上でもそれ以下でもない。
正義のあり方を持ったやつらが集まった場所。

少年、ユヅル・ハイドマンは異端審問局に所属し、その中でも十三人しか名乗ることを許されていない執行官。

それなのに、いきなり日本の学校に通う羽目に。

本当に、どうしてだろう

プロローグ

「えっ」

その声が少女の口から発せられたのは、少女の頭部が宙を舞っている最中。そんなことを気にもせず、黒髪に黒い瞳の少年は、次々と首のない人形を地面に投げ捨てていく。その姿は、童話や伝承に数多く登場する死神そのもの。誰も彼を止めることもできなければ触れることすらできない。ずれた世界に少年がいるかのように。

「本当につまらない、くだらない、仕事じゃなけりや、絶対にこんなことする気になんてなりそうもない」

愚痴を吐き捨てた少年は、懷から取り出したタバコにマッチで火をつけ、深々と煙を吸い込む。この時既に、少年以外に呼吸している人間はこの場所に存在していない。その状況を理解しているのか、少年は今まで右手で握りっぱなしだった刀をようやく鞘へと納める。そして、代わりにズボンのポケットから振動し続けている携帯電話を取り出し、苦虫をつぶしたような表情を浮かべた。

「はいもしもし？」

「貴様、今いったいどこで何やってる」

携帯電話の通話ボタンを押し、とりあえず程度に会話をしようとした少年だったが、いきなり相手に怒号を浴びせられ、どう答えていいものか悩んでしまう。

「できるだけ簡潔に答えることを推奨する。的確に表現をするなら、私の堪忍袋の緒が切れる前に」

「いや、あんたにあるのはそれじゃなくて、爆弾の導火線だから」

「ほう、まだ軽口をたたく余裕があるとは、な。すぐにその場所に行くから、覚悟しておくように」

少年が、自身の迂闊な発言を後悔するよりも、相手のレスポンスのほうが多く、そのまま通話が強制的に終了してしまった。

「はあ、めんどくさ」

タバコの煙と同時に言葉を吐き出し、少年は自身に取れる選択肢を模索。

一、この場からすぐさま離脱。結果、後日フラストレーションがプラスされたお説教を受ける。

二、この場で待機。結果、この場でお説教を受ける。

「選択肢によつて、結果がほとんど変わらないってのが悲しいところだな」

フィルター付近まで燃えたタバコを地面へと投げ捨て、少年はこれから待ち受ける事態を予測して、大きく肩を落とす。

「それで、何か弁解はあるかな？」

十分後、現場に到着した上司の目が笑っていない笑顔を向けられ、少年は何を口にしても起こられるという確信を得てしまう。

「黙っていてはわからないぞ、ユヅル執行官。安心しろ、私もそこまで狭量ではない。事情をきちんと話してくれば、情状酌量の余地は十二分にある」

上司の女性は、笑顔に諭すような口調で語りかけてくるが、その瞳はまったく笑っていない。この状態は、少年が過去経験した中でも、最上級にマズイ。

「ふむ、だんまりを決め込むつもりか。なら、私にも考えがある」
縁なしメガネを軽く左手の指で上げ、ズレを直した女性は、

「ユヅル・ハイドマン執行官、貴様に異端審問局、局長代理であるクロードル・ハイドマンが処分を言い渡す。貴様は、一週間以内に日本へと渡り、学校に通い、集団生活における協調性を学んで来い、以上」

ビジネススーツの懷からタバコを取り出し、マッチで火をつけると、火のついたタバコの先端をユヅルへと向けて、高らかに声を上げる。

「はあ？ あんた何言ってるの？」

「貴様の年齢と今回の処分を考えれば、至極妥当な判断かつ、全うなものだと思うが？」

「いや、だってさ、学校だろ。俺、今まで一度たりとも通ったことなんてないし、そもそも、日本って世界で一番ドンパチがやりにくい国だろ」

少年、ユヅルはどういった考えの下に自分の処分が下されたのか、納得できずにいる。

「ようするに、日常生活からも、多くを学んでこいということだ」
クローデルは、それだけ口にする周囲の状況をもう一度把握しなおし、部下に指示を出してその場所から去ってしまう。

「マジで、勘弁してくれ」

こうして、ユヅル・ハイドマンは生まれて初めて、日本の学校に通う羽目になってしまった。

プロローグ（後書き）

よし、

これから日本に向かおう

日本到着（前書き）

つきました、日本の聖地に

日本到着

「なあ、俺はどうしてこんなところにいるんだ？」

ユヅルは、目の前にある路上喫煙禁止の看板を見ながら、肩を落とし、同行者であるクローデルに話を振ってみる。

「おや、私は確かに日本の学校に貴様を通わせるといったはずだが？」

「ああ、それは聞いてる。間違いない。問題は どうしてこの場所に、今こうしているか、だ」

「ジャパニメーションは、いまや立派な文化であり、日本の輸出産業で一位だと知っていたか？」

「ああ、一週間っていいながら、二週間も日本語と日本の文化に関して、缶詰状態で勉強させられたからな。話をすりかえずに、正直に言え、何でこの場所に来る必要があった？」

二人がいる場所は、東京都千代田区秋葉原。今現在、オタクだけでなく外国人観光客も聖地と表現する場所。

「これから行く場所に必要だからに決まっているからだ」

そう口にしながらか、クローデルの両手はキャラクターのプリントされた紙袋をいくつも抱え、本人が楽しんでいるようにしか見えな

い。
「本当か？ それは、自分が楽しむための言い訳ではないと、神だけでなく、局長に対しても誓えるか？」

日本に飛行機で到着してから、すぐにこの場所に移動したため、日本についてからユヅルは一本もタバコを吸っていない。それだけでなく、彼女と一緒にいることで、好奇の視線に晒されていることが、彼の精神力を削ることを加速させている。

「面白い物はここら辺でいいか」

「目をそらさずに、しっかりと答えろよ」

結局、クローデルはユヅルの問いに答えることなく、そのまま一

人で進んでいく。仕方なく、ユヅルもついていくと、その場所は古い雑居ビル。

「ついてこい」

短く告げ、クローデルが入っていった部屋に、続いてユヅルもノックせずにはいる。

「おや、クローデルの嬢ちゃんか、また珍しい客だな」

「お久しぶりです、田沼さん」

クローデルが頭を下げて挨拶しているのに対し、ユヅルはついに我慢できなくなったのか、ビジネススーツの胸ポケットから、タバコとマツチを取り出し、タバコに火をつけて吸い始める。

「おいおい、兄ちゃん。この場所は火気厳禁だよ、表にもここにも書いてあるだろ？」

田沼と呼ばれていた老人が、壁に張っているポスターを指差して注意するが、

「爆死したら、死体は海にでも流してくれ」

つまらない冗談でユヅルに返され、それ以上何も言えなくなってしまう。

「つか、ジジイ、テメエからもタバコの臭いがプンプンする。この場所の火薬の臭いよりも、それ以上にだ。そんな人間が、」

文句を続けようとしていたユヅルだが、クローデルが頭に拳骨を落としてきたので、一時的に黙らされてしまう。

「すみません、口の減らないやつで」

「いや、その年で、大層な修羅場をくぐってきたみたいだから、しようがないっちゃしょうがないだろ。おまえさんこそ、少しは大目に見てやんなさい」

「重ね重ねすみません」

田沼に対し、クローデルはずっと下手に出ている。それが気になったユヅルだが、あえて口に出そうとはしない。

「さて、これを取りに着たんだろ。遠慮せずに持って行きなさい」
投げ渡されたのは鈍く輝く銀色の塊。

「へえ、オートマグか、いい趣味してるな、ジジイ」

「すみません、次来るときは、もう少し礼儀を学ばせてから来ます」
そう口にしたクロードルは、ユヅルの首根っこを掴み、そのまま引きずるようにして連れて行く。

「息災でな、ジジイ」

受け取った銃をビジネススーツの懷へ収め、ユヅルは、タバコの煙とともに一言だけ吐き出した。

「まったく、貴様のせいで遅くなってしまったではないか」

「誰のせいかな、もう一度言ってくれるか？ 局長に対して報告を上げとくから」

「すまない、私のせいだ」

「最初っから素直にそういえばいいんだよ」

タバコの煙を吐き出しながら、石段を上がっていくユヅルは不機嫌極まりなく、今にも懷から銃を取り出し、クロードルに対して発砲してもおかしくないところまで来ている。それでも、彼がそうしないのは、少しながら理性が残っているためである。

「しかし、メイド喫茶は楽しかっただろう？」

「いつもどおり、英語で答えたら人を色眼鏡で見やがった。誰かに付き添いを頼まれてもあんな場所には二度と行かねえ」

二人は、銃を受け取った後、さらに同人ショップ、アニメショップ、書店と周り、最後にはメイド喫茶にも訪れていた。そのせいで既に日は傾くどころか沈み、街灯すらない石段を暗い中、延々と登る羽目になってしまった。

「だが、これで同年代の友人を作るきっかけ作りはできたと思うが？」

「テメエが楽しみたかっただけだろう。いい加減、その口を閉じねえと、タバコの代わりに鉛玉をくわえさせるぞ」

段々と石段を登る度に、ユヅルの苛立ちもそれに比例して膨れ上がっていく。そんな二人がようやく、石段を登りきると、その場所にあったのは社。

「ようやく着いたな」

「ああ、本当によやく、な」

言葉とほぼ同時、両手が紙袋でふさがっているクローデルの足をユヅルは払う。そして、その場所を通過していく銀色の光。視界が悪いので確認はできないが、木に突き刺さっているところ見れば、何かしらの刃物であることは間違いないだろう。

「おい、日本人ってやつは、闇討ちイコール挨拶ってことなのか？」

ユヅルが視線を向けたのは、社のほぼ入り口。

「日本語、お上手なんですね」

「二週間、みっちり勉強させられたからな」

巫女装束に身を包んだ少女が口を開き、それを待っていたかのように、周囲に配置されていたであろう松明に火が灯っていく。

「っで、まだ俺は質問に答えてもらってないんだが？」

「そんな汚らわしいものを、御仏の午前に持ち込むような人間には、当然の礼節と私は考えます」

「さいですか」

巫女に答えてもらい、いまだ尻餅をついた体制のままのクローデルに冷ややかな視線を注ぎ、タバコの煙と一緒に、ユヅルはため息をつく。

「おい、その馬鹿。命救ってやった代わりに状況説明しろ」

「私の扱いが徐々に酷くなっていないかな？」

「事務を中心とした管理職が長くて、実戦での感覚が鈍ってるみたいだな。おい、もう一度投げれば、確実にやれるぞ」

冗談ではなく、ほとんど本気でとんでもないことを口にするユヅル。それに対して、巫女も若干答えに悩んでいるかのように見える。「おおつ、クローデルの嬢ちゃん、よくきたのお」

そんな殺伐とした空気の中、現れたのは、アロハシャツにサング

ラスの小柄な老人。はつきり言って、センスを疑うような格好である。

「ユヅル、これが答えだ。貴様は、これからこの方の世話になり、学校へと通ってもらう」

「やっぱり、鉛玉が欲しいみたいだな」

「おじいさま、いったいどういことですか？　きちんと説明してください」

ユヅルと巫女の二人は、同じ言葉を聴いて、互いに相手へと視線を移動させる。もっとも、ユヅルのほうは、既に右手に銃を持ち、安全装置を外していた。

日本到着（後書き）

次回より、学校生活に突入

昔の知り合い？（前書き）

高校生活開始！！！！

昔の知り合い？

「本当にどうして、こういうことになったんだろうな」

ユヅルは、校舎の屋上、本来施錠されている場所の鍵を持つてはいない。だが、彼はこの場所でタバコの煙を燻らせている。理由は簡単、日本では未成年の喫煙は許されておらず、学校側の関係者にばれると、面倒なので、わざわざピッキングして屋上へときているのだ。

「それはまともに授業に出ていないからですよ」

一人でタバコを吸っていたはずの彼に声をかけてきたのは、現在、半ば強引に同棲する羽目になった女生徒、神宮寺カナミ。

「確か、カナミであつてたよな？」

「合つてます。つとに、いい加減、まともに授業を受けてくれないと、私の立場というものもあるんですから」

自信なさそうに聞いてきたユヅルに対して、カナミはため息交じりに答える。

彼が、この私立天禅寺高校に転入してから、今日で約二週間の時間が経過している。それにもかかわらず、彼には友人の一人もできていない。まあ、タバコを吸うために、休み時間が訪れるたびに姿を消していれば、当然の結果といえなくもない。くわえて、異端審問局で、大学受験レベルまでの知識を取得させられた彼にとって、授業は退屈以外のなにものでもなく、たいてい眠っているか、授業に出席せずにこの屋上でタバコを吸っている。

「それにしても、この国って本当に平和だなあ。今まで生きてきた中で、こんな国一度も経験したことねえよ」

「それは、アフガンやカリで少年兵やって、それ経由で異端審問局に入った人なら、当然じゃないんですか？」

カナミは、二週間前、ユヅルとクロードルが尋ねてきた日、祖父を撲殺一步手前まで追い詰めた後、クロードルから大方の事情は聞

いている。

「そうだ、まだ授業時間中なのに、何でお前、ここにいるんだ？」

「あなたを探してくるように、先生に懇願されたんですよ」

「マジで？」

「おおマジです。今の時間、担当されている刈谷先生、本当に首吊り自殺でもしそうなぐらい落ち込んでました」

ユヅルの記憶によれば、今の時間は英語。この授業を受け持っている刈谷という教師は、この春からこの高校で教鞭をとっている、いわゆる新任教師。

「あれって、そんな精神脆いの？」

「先生をあれって言わない。むしろ、あなたにこそ原因があるんですから」

カナミの言っていることは、確かに事実である。

ユヅルの転入初日、彼、刈谷が担当する英語の授業があつたのだが、授業中、すべての会話を英語でスラスラと話すユヅルが、刈谷の教師としての自信を完膚なきまでに粉碎し、それによって奮起した彼から未だに逃げ続けているからだ。

「俺に非があるとは、とてもじゃないが思えないんだが」

「日本は白黒の二択よりも、グレーゾーンが広い国なんですから、少しくらい自覚してください。これから、最低でも二年半は、日本にいないといけないんですから」

「そうなんだよなあ」

ユヅルが転入したのは、カナミと同じ一年三組。定時制ではなく、普通科の高校なので、卒業までは最短で三年かかる計算。夏休みが終わって少し経ってから転入したので、ユヅルは、最低でも二年半この場所に滞在しなくてはならない。それも、異端審問局執行官の仕事をこなしながら。

ため息交じり彼が空を見上げ、煙を吐き出していると、タイミングを見計らったように授業終了のタイムが校舎全体に鳴り響く。

「さて、昼にするか」

タバコの火を手すりに押し付けて消し、携帯灰皿に吸殻を入れたユヅルは、そのままその場を去ろうとするが、その右肩をありえない速度と力で捕まれ、振り向かされてしまう。

「まさか、また学食で、なんていわないでしょうね？」

「そのまさかだ」

カナミは、食費の節約と言って、学校のある日は毎日、弁当を二人分作って、ユヅルにも強引に持たせている。だが、彼がその弁当に箸をつけたことは一度足りともない。

「お弁当が、ありますよね？」

顔には笑みが浮かんでいるが、カナミの瞳はまったく笑っていない。しかし、それに屈するほど、ユヅルは精神的に弱くない。

「あれは、嫌がらせだろ。きちんと、さしすせそを勉強してから作り直せ」

「そういうことを言いますか」

それと同時に手を離すカナミ、逃げるユヅル、追うカナミ。もはや恒例行事となりかけた追いかっこがまた始まるのだった。

「ふう、勘弁してくれよ、まったく」

カナミから逃げ伸びたユヅルが飛び込んだ場所は、図書室。転入初日、カナミに案内されてから一度たりとも踏み込んだことのない部屋。ただ、その場でユヅルは息を整えることができず、代わりに呼吸を押し殺し、懷に忍ばせておいたオートマグに右手を伸ばす。

探ってる？ いや、こちらの出方を伺ってる？

この図書室は、学校の中にありながら明らかに異質な場所だと、ユヅルは判断する。人の気配が複数存在しているはずなのに、次元がずれているかのように、誰の存在も知覚できず、視認もできない。いつ以来だろうな、こんな感覚

異端審問局の中でも、執行官は危険度だけで言えばトップクラス。

その最前線に立ち、任務をこなしてきた彼だが、このように、命のやり取りを強要させられる場面に出くわしたことはあまりない。あるとすれば、少年兵でゲリラをやっていたとき。

殺し、殺される場所。

それが、学校という日常の一部の中に存在していること自体、異常ではないのだが、この状態を楽しんでいる自分がいることを、ユヅルはしっかりと認識している。

一步間違えば、死。

一秒判断が遅れば、死。

一瞬反応が鈍れば、死。

間違えれば、遅れれば、鈍れば、いずれも即座に死を意味する状況だというのに、彼の顔には笑みが張り付いてしまっている。命のやり取りを楽しむという、異常性。自他共に、執行官の間で知られていはいるものの、それをあえて直そうとはしない。

狂ってる。俺は今、確かに狂ってる

思考するよりも早く、完全に反射の動きで、ユヅルは銃を引き抜き、向けられていた殺意へと銃口を向ける。それと同時に、彼の喉元にはナイフの切っ先が突きつけられていた。

こうでなくっちゃいけない。殺し合いつてのは、互いに命を賭けられる力量の相手じゃないと、意味がない

だが、気持ちが高揚するのと反比例して、彼の脳内では理性が冷静に判断を下していた。

「レイン？」

「バリスタ？　なぜ、君がここにいる？」

レイン、そうユヅルが呼んだ女生徒に、彼は見覚えがあった。同時に、彼女が口にした、自分の昔の名前が、それを裏付ける証拠になる。

顔立ちは、若干大人びていて、背丈も多少変化しているものの、間違いない。目の前の、黒縁めがねをかけ、長めの黒髪をポニーテールでひとつにまとめている少女は、ユヅルと同じ存在。

「それは俺が聞きたい。つゝか、そのなりはいつたい何？」

「失礼なことを口にするところは変わっていないな。後、今の僕は、雨竜カズキという立派な名前をもらっている。もう、昔の名前で呼ばないでほしい」

互いを互いに、敵であると判断を下しながらも、そうではないという判断も同時に下し、二人同時に獲物を懐へとしまう。

「なら、俺も、ユヅル・ハイドマンって立派な名前がある。次からは、きちんとユヅル様と呼べ」

「わかったよ、ユヅル様」

彼のいうとおりの呼び方で呼んだカズキは、そのまま、一服しよとタバコとマッチを取り出したユヅルの手から、マッチを一瞬でひったくる。

「ここは禁煙。つと、いうよりも、学校内で喫煙を許されているのは、教職員だけだ。ついでに言うと、本にタバコの臭いがつくと非常に困る」

「さいですか」

久方ぶりの再会だが、彼女がほとんど変わっていないと、自分勝手な判断を下したユヅルは、苦笑いを浮かべながらも、まんざらではなかった。

「ん？ どうしたよ、昼飯食ってねえから、顔には特に何もついてないはずだけど？」

窓辺に腰掛けたユヅルだが、パイプ椅子に座ったカズキに見つめられ、若干落ち着かない。ちなみに、先ほどまでカズキが張っていた、人避けの結界は解除され、二人は今、準備室に鍵をかけ、誰も入ってこないようにしている。

「いや、何も聞かないのだなと、思ってた」

「なんか聞くことってあったっけ？」

「普通あるだろう、こうして再会できたこと自体、天文学的確率なんだ。あれからどうした？とか、今どうしてる？とか、聞きたいこ

とは山ほどあるのではないか？」

「いや、特にない」

カズキは、どうにかこうにか、会話を広げようと努力してみるものの、ユヅルに一蹴され、会話は強制的に終了してしまう。

「そういえばさあ」

「なっなんだ」

会話を終わらせたはずのユヅルから、話を振られ、パプロフの犬みたいな反応を示すカズキ。

「あいつら、生きてると思うか？」

「ウインドにレイブン、後は、確かバイソンだったな。少なくとも僕は、死んでいるとは思っていない」

「まあ、確かに殺したって死なねえような馬鹿共だしな」

そう口にしたユヅルは、窓辺から準備室の出入り口へと移動。そのままドアノブをまわし、室外へと出て行くこうとするが、

「それ以外に聞きたいことは特にないのか？」

「別に。それに、聞きたくなったら、ここにくれば当分の間は、お前、いそっだし」

振り返ることなくカズキの問いに答え、そのままユヅルは出て行ってしまう。そんな、彼が出て行った場所に視線を固定しながら、彼女は大きくため息をつく。

「まったく、戦場ではあれほど鋭いのに、どうしてこうも鈍いものか」

「そういえば、決めましたか？」

「いや、こんな中から決めろって、くじ引きじゃねえんだぞ」

放課後、教室でユヅルは部活と委員会の名前が記載されているプリントの束を片手に、カナミに拘束されていた。

「でも、校則は校則です」

「校則が拘束とかかかってるとは、上手いこと言ったもんだ」

茶化しながらも、ユヅルの顔は若干引きつっている。それもその

はず、この天禅寺高校に委員会は全部で二十、部活は八十を超える数ほどあり、生徒はその中のどれかに所属しなければならない。彼が、日本に来る前に得た知識の中には、帰宅部という、非常に存在意義のあるものが存在したはずなのだが、この高校には存在していない。

「お前は何部に所属してんの？」

「私ですか、私は料理部です。まさか、一緒に部活もしたいって言いつ出すんですか？」

それは、言葉とは裏腹にとっても喜んでるように彼の耳に響いたが、別の意味でユヅルは驚きを隠せなかった。

「指導者に問題があるのか、それとも、ただ本人のせいだ。確かめたいような、確かめたくないような」

彼女の料理の腕前を知っているユヅルは、頭を切り替え思考するが、そこから言葉が少し漏れてしまっている。まあ、カナミの耳には届いていないが。

「失礼、ユヅル様はいるか？」

そんな中、昼休みに指定した呼び名で教室に入ってきた人物、カズキに視線が集まる。それを見て、ユヅルは諦めた表情を、カナミは敵意の表情を浮かべていた。

こいつら、面識あるのかな？

構内新聞で、彼女にしたいランキングに、確か二人とも載っていたことまでは、ユヅルの記憶にあるのだが、二人が何位だったか、そこまでは覚えていない。だが、内容的には、カナミは、家庭的なイメージが先行し、カズキは知的なイメージが先行していたはず。どっちもどっちだけだな

残念ながら二人のイメージではなく、中身を知っているユヅルは、二人のやり取りをとりあえず、観戦することを決めたのだった。

昔の知り合い？（後書き）

残念ながら、主人公は鈍感君です

定評があります（前書き）

巻き込まれることに対してですけど

定評があります

「いや、時間の無駄だな」

火花が散るエフェクトが、きつと漫画であれば表現されるカナミとカズキの二人。その二人の視界の死角について、教室から離脱。通学用のバッグを取ってくることを忘れてはしまったものの、中に対したものは入っていないので、そのままユヅルは教室を振り返ることなく猛ダッシュ。

「人間はぶつかって、初めて他者を理解しようとする。って、誰の言葉だったかな？」

時刻は午後五時をようやく回ったところ。今から帰宅してもいいのだが、普段の行動範囲から出なければ、二人に自分がないことを気づかれたとき、見つかってしまう可能性が高い。

「きやああああ」

商店街の入り口につくかつかないか、微妙な距離。そんな場所で、彼は、ドラマですら今は聞いたことのない、悲鳴を聞きつけ、歩きながら視線を移動させる。すると、ゲームセンターの入り口で、一人の女生徒が、複数の男に絡まれている。だが、ユヅルはそれを見て、当然のごとく無視をする。

「現代社会において、正義の味方は存在しないし、存在してはいけない。もし、存在したなら、その存在に人々が依存してしまうから」昔、異端審問局に入ったばかりの頃、クロードルから教えられた言葉。故に、執行官は正義の味方ではなく、エゴイストでなければならぬ。どうして、そんな言葉を思い出してしまったのか、ユヅル自身、不思議だったが、気にせずにタバコを吸おうとして、固まってしまう。なぜなら、彼の右手に伝わってきたのは、そう、ソフトケースがつぶれる感触。

「マジか」

視線の先で起きている事件よりも、彼にとってはタバコが吸えな

いことのほうが大事件である。残念ながら、この商店街にタバコの自販機はなく、売っているのは、ゲームセンターの隣にあるおばさんのやつている小さな店だけ。

「じゃあないか」

それだけ口にしたユヅルは、タバコを買うために移動。そのとき、なぜ女生徒と目が合ってしまったのかは、彼自身不思議でならない。だが、それもあえて無視。周囲に人だかりもできてきているのに、誰一人として警察に電話をかけようとしていない。そんな無関心さが、日本で生きていくためには必要なのだ。

タバコを無事、購入し、マッチで火をつけ、吸い始めたユヅルだが、今度は男と視線がかみ合ってしまう。

「なんか、文句でもあるんかい、にいちゃん」

「いや、別に。俺は空気だと思って続けて」

男に凄まれ、普通の人間なら逃げ出してもおかしくない状況なのに、ユヅルは電信柱に背中を預け、状況を見守っている。繰り返しになってしまいが、彼は、この状況に手出しをするつもりがまったくない。

「いやつ、ちよつと、その制服、同じ高校でしょ、助けてよ」

「お前馬鹿だろ？ 知りもしない、かわりたくもない状況で話し振ってくる他人の為に、何かしようって思うのは、ジャンキーぐらい、頭のイカレタやつだけだ」

女生徒に助けを求められるが、ユヅルは一蹴。彼としては、時間つぶしの余興、テレビを見ている感覚なのだから、自分を出演者にされては困るのだ。

時計に視線を移動させれば、先ほどから十分も経っていない。だが、そこでユヅルはあることを思い出した。

今朝、学校に出かけるとき、カナミの母である神宮寺カナコから、スーパ―の特売を頼まれていたことを。料理上手な彼女から、どうしてカナミのような子供が育ったのか、そして、どうして自分の弁当を彼女が作ってくれないのか、疑問は多々あったが、今はそれを

封殺。この場所からスーパーまでの距離は、およそ五分。特売の開
始時間は、三十分から。

「じゃあ、がんばって」

気のない声援を送り、その場を離れようとしたユヅルだが、不意
にその左肩を男に掴まれてしまう。そして、そこからは殆ど反応と
いうよりも、反射に近い。カナミのように、殺意を持っていない相
手ならまだしも、男は確実に殺意に似た敵意を持っていた。それが、
災いしてしまったのだ。

左肩を掴まれたユヅルは、振り返ることなく、目だけ動かし、相
手の足の位置を確認し、左足で相手の足を払い、体制を崩す。そこ
までにかかった時間はほとんどない。そのせいで、男には何が起こ
ったか、理解できていないだろう。そして、振り返ったユヅルは、
落ちてきた男の頭を右手で掴み、電信柱に勢いよくたたきつける。

当然の結果として、男は気絶し、その場で流血しながら崩れ落ちた。

「ああ、やつちまった」

諦めの言葉を口にして、ユヅルはその場にいる男全員の、相手を
する羽目になった現実を恨めしく思った。

「さて、どうして俺はこんな場所にいるんだろうな？」

自問自答している割に、ユヅルの口調は完全に他人事である。

先ほど、何人かの男を病院送りしておきながら、いる場所は、
警察ではなく大きな屋敷。結果として、女生徒を助けた彼は、なぜ
だか、客間に通され、畳の上で胡坐をかきながら、日本茶の入った
湯飲みを傾け、お茶を味わっている。

「待たせたな、客人」

大声上げながら襖を開け、現れたのは、左目に刀傷がある、着流
しを着た筋骨隆々とした男性。そして、先ほど助けた形になる女生
徒。ただし、制服から彼女も和服に着替えている。

「まずは、娘を助けてくれたことに対して礼を言わせてくれ、ありがとう」

ユヅルの対面に腰を下ろし、頭を下げる男性。正直、彼は、相手の名前も知らず、職業も予測はついているもののしらない。

「いや、助けるつもりなかったし。結果的にそうなたただけ。ついでに言っと、礼を言われるよりは、自己紹介のほうがほしい」

「おお、そいつは失礼した。俺は、秋刀魚組六代目、春日野ヒサト、そんで、こいつが娘のヒサノだ。そっぴや、お前、ちゃんと礼言ったのかよ」

大方予想できていた答えをもらい、ユヅルはため息をついてしまう。原因は、説明されなくても、予想できてしまうのが悲しいところ。彼は完全に組同士の抗争に巻き込まれてしまっている。それも、秋刀魚組の人間として相手側から。

「それはちゃんと言いました」

「そうか。そんで客人、あっちの平目組の若いのを、確か七、八人を一人でシメちまったって言うのも、本当かい？」

「それは想像にお任せします」

ユヅルは必要以上に口を開くことなく答える。彼にとっては、こんなことよりもスーパ―の特売にいけないかったことのほうが問題。カナコに連絡し、事情を説明したところ、許してもらえたのだが、カナミに対しては、そうはいかない。なぜか、一緒に行くことになっっていたからだ。

「話がそれだけなら、ここらでおいとまさせてもらいます」

とりあえず、相手が目上であることを考慮し、敬語で断りを入れてこの場所から去ろうとするユヅルだが、

「まあ、待ちなっつて、寿司ぐらい食っつてけっつて。感謝の気持ちなんだから」

ヒサトの言葉に心が揺らいでしまう。善意を断ることは、仕事上得意分野に入るのだが、彼の耳に入ってきた寿司という言葉。これが、彼の行動を鈍らせる。

寿司。日本文化をみっちり叩き込まれたユヅルだが、まだ、口に
したことはない。食生活に関して、カナコの料理の腕がいいので、
特に学校にいる間以外は問題を抱えてはいないが、そこは男の子、
空腹と高級料理には意思が勝てない。

「まあ、食事ぐらいなら」

自分自身に言い訳しながら、わくてかしながら、寿司が運ばれて
くるのを待つユヅル。その心情が、表情にも出てしまって、座敷犬
のように二人の瞳に移り、笑っている。しかし、今の彼には、そん
な問題は些細なこと。

カナコへ携帯でメールし、彼は寿司が運ばれている瞬間を心待ち
にしていた。

「ふう、いいもんだな」

寿司を堪能し、泊まっていけというヒサトの提案を、丁寧に断り、
屋敷から出たユヅルは、なれた動作でタバコに火をつけて、煙を吸
い込む。

「まあ、寿司食わしてもらったし、一宿一飯の恩は返すべしって、
確か習ったはずだし」

そんなことを口にしながら、彼が向かった場所は平目組の屋敷。
食事をし終わった後、仕事仲間に連絡し、調べてもらった住所。

木造の門が彼の行く手を遮っているが、それも些細な問題でしか
ない。ノックや、インターホンを鳴らすようなまねもしない。彼は、
門を一撃で蹴り壊し、敷地内へと足を踏み入れる。当然、騒ぎを聞
きつけた者たちがいつせいに集まってくる。それを確認して、彼は
とても満足そうに、とても楽しそうに口の端を吊り上げる。

「テメエ、どこの組の鉄砲玉だ」

「俺？俺は、自分のエゴを貫く為に来た野良犬だよ、飯の礼もある
けどな」

ユヅルは、とても楽しげに、歌うように口にし、右腕で引き抜い
た銃の引き金を問答無用で、集まってきた男に向かって引く。

響く銃声、飛び散る脳漿。

命のやり取りを普段からしているような人間は、たとえヤクザであつても、少ない。それは、日本という国の性質上、仕方のないこと。しかし、男たちの目の前に立っている一人の少年は、それが、呼吸するのと同じぐらい普通な場所で生活し、生きてきた存在。

「さあ、一方的な虐殺の始まりだ。短い夜を、せいぜい楽しめ」

そして、自分より強いもの、弱いもの、女、子ども、老人。区別なく、躊躇することなく、殺してしまう、壊れた存在。

お仕事事情1（前書き）

決してやりすぎてしまったわけではありません

お仕事事情 1

「おはようございます、カナコさん」

「あら、ユヅル君、いつも早いわねえ」

神宮寺邸、台所に姿を現したユヅルは開口と同時に頭を下げる。

彼の目の前にいる恰幅のいい、笑顔の非常に似合う女性こそ、この神宮司家の台所を唯一任されている女性、神宮寺カナコその人である。

正直、親子でありながら、カナコとカナミはあまり外見的に似ていない。しかし、そんなことよりも、彼はどうして料理の腕が似てくれなかったのか、悔やみきれない。

「すぐご飯にしてあげるから、居間でテレビでも見てて待っててくれる？」

「はい」

現金といわれてしまえばそれまでだが、ユヅルは食事を作ってくれる人、それが美味しい料理であるなら、その人には敬意を払い、滅多に逆らうことはない。彼の中で、もっとも偉大な職業ランキングでは、常に調理部門がトップテンを占有しているからだ。

居間に移動し、テレビをつけると、昨夜、隣町である屋敷が全焼したことが報道されており、それを見たユヅルは暗い笑みを浮かべる。テレビの中では、放火の疑いで警察が調査に乗り出したことを報道しているが、それはフェイク。実際は、ユヅル自身、死体処理が面倒なことに、敷地内の人間全員を殺し終えてから気づき、屋敷に火を放ったのである。

「物騒な世の中になったのう」

「そうっすね」

家主であり、天禅寺高校理事長でもある神宮寺勲が居間に現れ、彼から少し距離を置いてソファに腰を下ろす。それに対して、ユヅルは適当に相槌を打つ。

「昨日は、帰りが遅かったようじゃな」

「そうっすね」

「どこぞでナンパでもしておったんか？」

面倒になり、ユヅルは言葉を返すことにためらいを感じ、

「ごはんですよ」

カナコの声を聞いて、これ幸いと、リビングへとさっさと移動する。

本日の朝食は、ご飯に味噌汁、焼き海苔に秋刀魚、きんぴらごぼう。いいにおいを漂わせており、席に着くなりユヅルは、食事に取り掛かりたかったが、そこはじつと我慢。

この家には、決して破ることのできないルールがひとつだけ存在している。

食事は家族全員そろってとること。

昼や夜、ばらばらに行動しているとき、例外は存在するものの、

朝だけは、この例外は適用されない。

「おはようございます、おかあさんにおじいさま」

その場所に残る一人、カナミが制服姿で現れ、席に着く。ちなみに、彼女の父親は、彼女が幼いときに亡くなっているが、詳しい事情は聞いていない。

「それでは、いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

そんなわけで、現在の家長カナコの声に続き、皆食事を開始する。そんな中、

「昨日は、どこに行ってたんですか？ 私を置いて」

私を置いて、その部分を強調し、どす黒いオーラを背中にカナミが口を開く。巫女でありながら、これいかに。そう思いながらも、ユヅルは決して口にしない。

「人助け」

事実間違っではない。けっして、やりすぎとか、結果的にそう転んだとか、そんなことをいう必要もないので、箸で秋刀魚の骨をきれいに取り除きながら、ユヅルは視線を合わせずに口を開く。

「人助け？ あなたがですか？」

驚きを隠せず、カナミを箸をおいて固まってしまっている。

「ああ、春日野さんだろ、昨日、電話いただいてるから、覚えてるわよ」

「おかあさん？」

そして、カナコが知っていて自分が知らないという事実、そのことがさらにカナミの機嫌を悪化させていく。

「ちよつと、それってどういうことですか」

「どういうことも何も、春日野さんとこのお嬢さんをユヅル君が助けた。そのお礼をかねて、夕食をご馳走する。そう聞いてるけど、違うのかい？」

「違います、そのとおりです」

声を荒げるカナミをよそに、ユヅルは空になった茶碗を差し出して、おかわりをよそってもらう。よそっているカナコは、とてもうれしそうだ。

「また女性ですかっ」

「おや、またって、どういうことだい？」

「昨日の放課後、教室に来たんですよ。ユヅルさんの古い知り合いだっけ言う女の子が」

カナコとカナミは二人で女性同士の会話をし始める。それに割り込むのは、無粋。そう判断したユヅルは、黙々と食事を続けていたが、

「ハーレムとは羨ましいのう」

「カナミに聞かれたら、半殺しにされるぞ、エロジジイ」

勲の言葉に軽く突っ込みをいれ、食事を終了する。

「ご馳走様でした」

両手を合わせ、頭を下げたユヅルはそのまま食器を片付けるべく

台所へ移動。

「お粗末さまでした。本当、ユヅル君は綺麗に食べてくれて、おばさんうれしいわぁ」

カナコの言葉通り、彼の皿には秋刀魚の骨ぐらいしか残っておらず、ほかはすべて彼の異の中に収まっている。

「作ってもらった人への感謝の気持ちは、食事を平らげることですしかない。それが、美味しい食事なら、尚更。そう思ってますから」「なら、どうして私が作ったお弁当は食べてくれないんですか？」

カナコへの賛辞のつもりで、ユヅルは口を開いたのだが、自分の迂闊さで頭が痛くなってくる。料理の話、イコール、カナミの弁当それを連想するのは容易かったというのに。

「昨日も言ったが、おまえ、試しにさしすせそを言ってみろ」

「さが、砂糖、しが、塩、すが、酢、背が、背油で、そが、ソースです」

「及第点すらやれねえよ」

これ以上は無駄と思い、食器を片付けたユヅルはそのまま玄関へと向かい、学校へと向かう。それに続くように、あわてて食事を終えたカナミが玄関についてくる。

「じゃあ、気をつけていっておいで」

「はい」

「いってきます」

カナコの言葉に答え、二人は神宮寺邸を後にする。そして、次の瞬間、大きく後悔してしまう。

お仕事事情1（後書き）

続きます。

ちなみにさ〓砂糖、し〓塩、す〓酢、せ〓しょうゆ、そ〓味噌が正しいのです。

お仕事事情 2 (前書き)

さあ、哲学の時間？です

お仕事事情 2

「おはようございます」

「……おはようございます」「……」

神社の石段を降りたユヅルとカナミの二人は、突然目の前に飛び込んできた光景と、野太い声の挨拶で一瞬、かたまってしまった。

なぜか、石段を降りてすぐの場所にはリムジンが停まっており、そのリムジンから弧を描くように石段まで、男たちが直立不動の状態で並んでいる。まあ、最初に二人、主にユヅルに声をかけてきた人物に見覚えがあったので、ユヅルには予想がついていた。彼女、春日野ヒサノがいるのだから、まあ、当然、その人物もいるわけで「おう、おはようさん」

当然といわんばかりに、リムジンから降りてきたのは、秋刀魚組六代目、春日野ヒサト。昨日と違うのは、服装が着流しから黒のスーツに変わっているというだけ。

「ああ、突然の訪問すまんね、学校まで乗せてあげるから、はよ、乗って、乗って」

「学校って、車に乗っていくほど距離ありませんけど」

ヒサトの提案に、遠慮がちにカナミが言うが、隣にいたはずのユヅルがさっさとリムジンに乗り込んだのを見て、勢いで彼女も乗ってしまう。続いてヒサト、ヒサノの順に乗り、車は走り出す。

「早速で悪いけど、あれ、きみがやったんか？」

「ああ、やっぱりその件で。答えは、肯定」

敵対組織の壊滅情報を知りえたヒサト。確信はなかったものの、確率が少しでもありそうなところには、今日、出向いていく予定だった。しかし、一軒目、一番確率の低い場所であたりを引いてしまふとは、予想していなかった。

「何でそんなに驚いてんの？ そう思ったから、ここまで来たんじゃないの？」

「ああ、そうだったんだが」

すんなりと信じられるような内容ではない。平目組の構成員はおよそ二百名。多少、出払っていたとしても、屋敷には百名ぐらいの人間はいたはず。それを、たった一人の少年が。否定している自分と、肯定してる自分。そのどちらもいて、ヒサトは判断をつけられずにいる。

しかし、時間は経過し、四人を乗せた車は学校へついてしまう。

「じゃあ、行ってきます。おとうさん」

「乗せてくれてありがとうございました」

ヒサノとカナミはそれぞれ口にし、車を降りるが、ユヅルは、二人が降りたことを確認したのと同時に、車のドアを引き、内側からロックをかけてしまう。その行為に対して、カナミは文句を口にするものの、チャイムが鳴ってしまったため、しぶしぶ校舎へと入っていく。

「なあ、問答ついでに俺の質問にも答えてくれよ、おっさん」

懷からタバコを取り出し、ヒサトの了承も得ずにタバコを吸い始めるユヅル。

「人が人を殺す理由ってなんだ？」

言っている意味がわからない。そう、ヒサトは思ったが口には出さない。ユヅルは、冗談ではなく、本当に質問してきていたから。

「相手を憎いと感じる。それによって行動するからだろう」

妥当だと、考えた答えをヒサトは口にするが、それを聞いたユヅルは、声を上げて笑い始めた。本当におかしそうに。何も、理解できていないと、答えが間違っていると言わんばかりに。

「ああ、悪い、気分を悪くしないでくれよ」

そう口にしながらも、ユヅルはまだ笑いを堪えている。

「別に、おっさんの答えが間違ってるってわけで笑ったわけじゃない。ちつとばっか、前に同じ答えを聞いたことがあって、そいつの面を思い出してただけだから」

そう口にし、ユヅルは備え付けの灰皿に、灰を落とす。

「動物は、食うため、守るため、そのために他のものを殺す。植物もかり。平たく言えば生きる為に殺す。でも、人間は生きるため以外にも人を殺す。けっして、人を殺さなきゃ、自分が死ぬってわけでもない状況で」

タバコの煙を吐き出したユヅルの瞳は、とても暗い光を宿している。

「俺の中には、決して破らないルールが二つだけ存在している。そのうちの一つ、それを奴らは破った。だから殺した。勿論、本部に確認も取ったから、安心して俺は殺し尽くした」

その口元は、確かに笑っている。その表情を見て、ヒサトは目の前の人物が、敵対組織を壊滅させたのだと、確信を持ってしまう。

そう、不覚にも、目の前の少年が怖い存在だと思ってしまうていた。

「人だけが、感情でも、本能でもなく、計算で、人を殺す。間違っちゃいないさ、戦争やテロ、そういったもんが、俺の言葉を事実だと認めてる。ああ、そうだった、俺の答えを聞かせ忘れてた。俺は、人が人を殺すのに理由なんてないと思ってる。理由なんて後付で、殺した後を考えてる。しいて理由に近いものを挙げるなら、邪魔と感じたからだろ。言いたいことは、sonだけ。乗せてくれてありがとな」

言いたいことだけ口にしたユヅルは、タバコの火を灰皿に押し付けて消し、車から出て校舎へと向かって歩いていく。

残されたヒサトは、自分の掌が汗まみれになっていることに気づき、大きく息を吐いた後、上を見上げる。

「あれ、どこまで壊れてる。いや、どうしたら、あそこまで壊れることができる」

お仕事事情2（後書き）

まだ、続きます

お仕事事情3（前書き）

この話が終わって、ようやく次へ

お仕事事情 3

所変わって教皇庁。

その敷地内でも特に目立つのが、全体を黒に染め上げられた建物。異端審問局本部であり、別名、『黒金の檻』。

その局長室で、二メートルを超えた筋骨隆々の巨躯を無理やり机に詰め込んだ初老の男性は、手元の資料を見ながら、とても嬉しうに目を細めていた。

「どうかなさったんですか、局長？」

「いや、やっぱりわかつちまうかい？」

秘書の持ってきたコーヒーを左手で受け取り、ソーサーは机に置いたまま、カップを傾ける。

隻腕隻眼、それでいて温和で、豪快な笑顔。彼をこの場所で知らない人間など存在しない。

アレグリオ・ハイドマン枢機卿。

教皇に次ぐ地位を持ち、一癖も二癖もある執行官たちが唯一、逆らわない存在。

「日本に行った、馬鹿息子。あいつのことなんだけどな」

「ユヅル執行官ですね」

アレグリオは、異端審問局に所属するすべての人間を家族だと思い、自分より年下の人物を息子、娘と呼んでしまう癖がある。

対して秘書の女性は、ユヅルのことを思い浮かべ、気分が沈んでしまう。

最年少で執行官の資格を得た少年、人として壊れた存在、綱渡りをする馬鹿、様々な風評が飛び交っている中、彼には外せない。むしろ、その一言ですべてを表現してしまえる言葉がある。

単独破壊者。

単独で以外、仕事をするのがなく、仕事をすれば必ず死者や、不必要なはずの破壊が生まれてしまう、はた迷惑な執行官。彼のお

かげで、何回、彼女が政府に手回したのか、既に数えることを彼女は諦めている。

「そうそう、あの馬鹿息子、昨日、日本で初仕事をしたらしい。しかも、自発的に」

「自発的に、ですか」

若干、信じられないといった感じで、秘書はアレグリオの言葉を反芻する。彼女の知っている中でのユヅルは、完全に受身。与えられた仕事はこなすものの、自分から決して動くとはしない、面倒くさがりのはず。

「いやあ、クローデルのやつが、いきなり、ユヅルを日本の学校に通わせる。って、言って来たときにはどうなることかと思ったが、意外といいほうに転んでるみたいだ」

「それで、被害は？」

「ああ、被害。人的、物的あわせると、ふむ。この報告書を見たほうが早い」

コーヒーカップを置き、代わりに机の上の報告書を掴んで、アレグリオは秘書に渡す。数秒、目だけを動かし、報告書を読んでいた秘書だが、途中で頭が痛くなってきたのか、軽く右手で頭を支えてしまう。

「日本でも、やっていることに変わりはないみたいですね」

その報告書には、敷地面積は詳しく記載されていないものの、死者数、百二十名。そう記載されている。

「日本政府、主に警察機構は、話の通じる方たちでしょうか」

ため息をついて、秘書はこれから起こるであろう被害を予想し、大きく肩を落とす。

「こうなるとあれだな、あいつがどんな風にな変わってきているのか、見てみたいもんだ」

「だめですよ、局長。日本に行かれている間の仕事はどうするんですか？」

アレグリオの行動を先読みし、秘書は釘を刺す。案の定、彼は、

その巨軀が少しだけ小さく見えるぐらいに落ち込んでいる。

「なら、クローデルでも」

「それもダメです。以前、ユヅル執行官と共に局長代理を向かわせたとき、経費が馬鹿みたいにかかっています。それとも、局長のポケットマネーから、出していただけますか？」

「だめだな」

ユヅルを日本に置いて帰ってきたクローデルが、経理に見せた経費請求書。それを見たとき、彼女は羞恥で顔が赤くなったのと、その金額で顔が青くなったことを覚えている。しかも、まだそれは記憶に新しいのだ。

「なら、やはり君に行ってもらうしかなくなってもらうぞ、エカテリーナ執行官」

秘書であり執行官、エカテリーナ・フォルダンとは、大きくため息をつくものの、

「了解しました。今回、私が抱えている案件に、めどが立ち次第、日本まで様子を見てきます」

彼の決定に逆らうことはしない。

「それでは、失礼いたします」

彼女は、報告書を机の上に戻し、敬礼をした後、室内を出て行く。
「それにしても、あの馬鹿息子が学校生活とは、俺も年を食ったもんだ」

彼が肩口から右腕を、同時に右目を失った事件は、異端審問局で知らないものはいない。同時に、その原因、奪った相手がユヅルであることも。

「日本、行きたかったなあ」

冷めたコーヒーで喉を潤し、アレグリオは一人愚痴るのだった。

お仕事事情3（後書き）

第三の執行人登場！！！！

部活動に参加しよう1（前書き）

ラブコメに突入。

筆者はベタな展開が大好きです。

部活動に参加しよう1

「そんで結局、こうなると」

ユヅルはため息をつきながら、机に突っ伏す。

現在は放課後、大半の生徒は部活動へ行き、他の生徒も当番の委員会へと移動。故に、教室には、生徒の数が殆どいないことが普通なのだが、一年三組の教室だけは違っていた。なぜか、大半の生徒が教室に残ったまま。

彼の目の前には、もはや当然といえるカナミ、そして昨日会ってしまったカズキ、加えてヒサノの三名がなぜか立っている。どうしてもこんな事態になってしまったのか、彼には皆目見当がつかないのだが、クラスメートたちは、紛れもなく、この状況を楽しんでいる。「それで、どうするんですか、ユヅルさん」

決して逃がさない。捕食者の瞳をしたカナミに声をかけられ、ユヅルは面倒くさそうに上半身を起こし、机の中からプリントの束を取り出す。

「ちなみに私は、昨日も教えたとおり、料理部です」

「僕は、図書委員兼創作部に所属している」

「私は、手芸部です」

カナミ、カズキ、ヒサノの順に聞いてもいないのに、答えてくれたので、とりあえず、ユヅルはプリントの束をめくる振りだけはしておく。

「そこに書いてあるとおり、本人のやる気さえあれば、複数の部活に入ったり、雨竜さんのように、委員会と兼任することもできます」まず、それはない

その言葉を、三人に聞かれないように、心の中だけで毒づくユヅル。

プリントには、委員会、運動部、文化部の順に記載されているが、人に決められたルールを守ること、上下関係の厳しさ、この二つが

嫌いな彼は、必然的に入ろうとすれば、文化部になってしまふ。しかし、目の前に力ナミという前例がある以上、文化部で大丈夫なのかという、非常に不安な材料がある。そんなわけで、彼はすんなりと答えを出せずにいる。

「やっぱり見てから決めるしかないか」

「それが一番いいかもしれませんね」

なぜか、この場で進行役を担当している力ナミは、その言葉を待っていましたといわんばかりに嬉しそうな声を上げる。

「それでは早速、料理部に」

「神宮持さん、それはどういう理由だろうか？」

急ぎユヅルの手を取り、教室を出ようとする力ナミだが、その手を横からはたかれ、張本人である力ズキに怒りの視線を向ける。

「何をするんですか、雨竜さん？」

「僕こそ理由を聞いているのだけれど、それとも神宮寺は耳の不自由な人なのかな？」

「理由ならいっぱいあります。ユヅルさんのことを、保護者の方から頼まれていますし、一緒に住んでいるんですから、一緒に帰れたほうが何かと都合がいいです」

「あまり束縛すると嫌われてしまふよ。それに、連絡さえ取れば、一緒に帰る必要なんてないと思うよ、子どもじゃあるまいし」

なぜか、言い争いを始めてしまった二人を見たクラスメートたちは、歓声を上げている。正直、ユヅルとしては、視線だけで殺し合いを開始している二人を止めてほしいのだが、自分に火の粉がかかると面倒なので、それをしない。

「えっと、ヒサノだっけ？」

「はい、なんでしょう、えっと」

「ああ、別に好きに呼んでくれていい」

人とあまりかわる生活をしてこなかった彼は、人の名前を覚えることが少し苦手で、間違えないように、とりあえず確認を取ってみる。

「それでしたら、ゆー君で」

「手芸部って、何やる部活？」

「手芸部はですね。刺繍をしたり、服を作ったり、ぬいぐるみを作ったり、まあ、自分の作りたいものを作る部活ですね」

「ふーん」

二人ではなく、自分に話を振ってくれたのがよほど嬉しかったのか、ヒサノのテンションは結構高くなっている。そんな彼女と、言い争いをしている二人を見比べ、音を立てずに立ち上がったユヅル。そのままヒサノの手を引いて、教室を後にした。

「あの、どこに行くんですか？」

「どこって、手芸部だよ。順番ぐらいでもめてるからな、あの二人。そんなのに付き合ってたら、時間の無駄だ」

「じゃあ、案内します」

手をつないだままなのを、あえて指摘しないのは、鈍感な割りに空気を讀んだユヅルだから。ヒサノは、嬉しそうに、ユヅルの手を引っ張りながら、部活塔へと移動を開始した。

天禅寺高校は、部活動が盛んであり、私立ということもあり、運動部、文化部のそれぞれに部活塔が設けられている。二人が向かうのは文化部の部室塔。一年生の教室が五階にあるので、若干距離ある。

そんな中、ユヅルとヒサノ、二人の進路を塞ぐように一人の男子生徒が現れた。

「お前、ヒサノさんと手をつないでいるなんて、うらまやまし、っじゃなくって、どういう関係だっ」

大声を上げる男子生徒。よく見てみれば、彼の額のハチマキにはヒサノLOVEと太い黒とピンクのマジックでかかれており、はっぴに似たのまで着ている。

「お前の知り合いか？」

「いえ、まったく知りません」

とりあえず、相手は彼女を知っているようなので、ユヅルはヒサノに聞いてみるが、どうやら彼女も知らないらしい。

「って、言ってるけど、あんた誰？」

「俺は、春日野ヒサノさん、非公式ファンクラブ『ほんとに、ほんとに、ヒサノさん』。通称HHH、会員ナンバー五十三」

「ファンクラブ？ 何、それも部活動の一つだったりするのか？」

「いえ、本人で非公式って言ってますし、そういった活動に顧問の先生がつくとも思えません」

相手に自己紹介を求めておきながら、相手の言葉を聴かないユヅル。とことんマイペースにして、わが道を行く人間である。

「って、聞けよ」

「ああ、悪い。それで、用件は？」

「お前を肅清する」

いきなり背中から木刀を取り出して構える男子生徒。ユヅルから見れば、構えは隙だらけで、力も入りすぎ。おまけに、相手に攻撃を宣言してから、襲い掛かるなど、反撃してくださいとお願いしているようなもの。つまり、返り討ちにするのは非常に簡単なのである。だが、ここで一つ問題がある。それは、何かしら暴力沙汰を起こしてしまえば、保護者を呼ばれてしまう。それだけは、彼としては避けたかった。常識人として執行官内で知られているエカテリーナ、形式上の保護者であるクロードル、局長にして、身元引受人になっているアレグリオ。この三名が来るなら、まだ、言い訳の使用がある。しかし、この三人は、多忙を極めており、来る確率は非常に低い。そうになると、他の執行官がくる。それは、できるだけ、彼としては避けたい。

「しかたねえな。舌、噛むなよ」

「えっ？」

ヒサノが気づいたときには既に遅い。彼は、手を離して行動を開始している。男子生徒は、ユヅルに対して襲い掛かってくるが、彼はそれに背を向け、両手でヒサノを抱き上げる。俗に言うお姫様だ

っこ。それだけなら、まだ、ヒサノの精神も耐えることができた
らう。だが、ユヅルはあろうつことか、開いている窓から、外に向か
って跳躍した。

部活動に参加しよう1（後書き）

決してよい子はまねしちゃいけません。

続きます。

部活動に参加しよう2（前書き）

好き〃得意、嫌い〃苦手

これは常に当てはまる方程式とは限らない。

部活動に参加しよう2

とりあえず、文化部の部室塔に着いたユヅルは、入り口で、ヒサノの状態を確認。彼女は、放心しているのか、うつとりしているのか、どちらにしてもここでおろすわけには行かないと判断。そのままの状態で、彼は手芸部の部室を目指す。

手芸部、そう、簡易的な看板がある部屋を見つけたユヅルは、両手がふさがっているのも、いつものようにドアを足で蹴り飛ばす。当然、ドアは外れ、中にいた部員たちが驚いて、出入り口に視線が集中する。

「ああ、なんていえばいいんだ、こういうとき。悪い、ヒサノ、説明してくれ」

ヒサノを下ろし、ゆつくりと彼女を立たせようとするユヅルだが、彼女は腰が抜けてしまっていたので、体制を崩してしまう。そんな彼女を放って置くわけにも行かず、もう一度彼女をユヅルは抱き上げ、今度は椅子の上にゆつくりとおろす。

「おい、しっかりしろ。悪い酔いしたか？」

「だつ大丈夫です。はい」

顔をユヅルに覗き込まれ、二人の顔は吐息がかかるぐらいの距離にある。こういった彼の、鈍すぎる態度が、彼女の鼓動のスピードを飛躍的に上げてしまっているのだが、本人は無意識でやっているため、まったく気づかない。

「えつとですね、彼は、その、部活見学に来たゆゑ君です」

「いや、春日野、呼び方はともかくとして、その紹介の仕方はどうかと思うぞ」

ヒサノがどうかこうにか、口に出せたのはその言葉だけ。それに対して、部員の一人が野次っぽく言うが、

「部活見学、なるほど、噂の転校生くんだね」

そんな中で一人の女子生徒が、ユヅルを値踏みするように見なが

ら、軽く手をたたいた。ちなみに、ユヅルが女子と判断できたのは服装と、胸の大きな二つの風船のおかげだ、

「ああ、自己紹介がまだだったね、あたしは、手芸部部长、二年の釧路岬。気軽にみゝたんって呼んでくれるとうれしい」

随分と奇抜な自己紹介をしてくれる

口には出さないものの、ユヅルは彼女の外見から見て、率直に変人という判断を下す。髪は茶色のショートカット、それに加えて猫耳力チューシャ。これだけでも、町で見かけたら声をかけたくないそして、そんな彼女の服装といえば、下は制服のスカート、だが、上はなぜか男同士が上半身裸で絡んでいるイラストが描かれているTシャツ。

「俺は、」

「ゆゑ君でしょ。大丈夫、覚えてから」

いや、呼び名じゃなくて、正式な名前を覚えろよ

心の中で突っ込みを入れつつも、それ以上追求しようとはしない。この手の手合いは、受け流すことに専念しながら、会話をしなくては会話が成立しない。むしろ、自分の世界に相手を引っ張り込んでいく。

「それで、釧路先輩」

「みゝたん」

「いや、釧路先輩」

「みゝたんです。そんな可愛くない呼び方は認めません」
勘弁してくれ

助けを求めようと、ユヅルはヒサノへ視線を送るが、残念ながら、彼女は首を振っている。どうやら、彼女もお手上げらしい。

「みゝたん先輩、見学に来たんで、作品とか、部活の作業しているところとか、見せてほしいんですが」

「ちよいと待つがよろしい」

岬は満足げに口にする、ロッカーをこそごとと漁り始める。

「話し方に統一性の無い人だな。おまけに、こうと決めたら譲らな

い」

「恥ずかしながら、おっしゃるとおりです」

小声でユヅルが口になると、恥ずかしそうに顔を赤らめながらヒサノが代わりに謝罪してきた。どうやら、ヒサノも彼女に振り回されている犠牲者の一人らしい。

「これが、我が手芸部、主に私の作品だ。とくにご覧あれ」

机に広げられたものを見て、ユヅルはどう答えればいいのか、困ってしまう。おおそ見当はつくだが、確信は持てない。

「これは？」

「見ればわかるだろう、犬だ」

「じゃあ、これは？」

「ゆゝ君はダメダメさんだな。猫に決まっているだろう」

自信満々に岬は答えるが、ユヅルには、色が違うだけで同じもののようにしか見えない。他の部員はどうなのだろうと思い、周囲に視線を配るが、皆、苦笑いを浮かべている。

「どうだ、すばらしいだろう。そんなわけで、これにクラスと名前を書きたまえ」

彼女が机の上に置いたのは、入部願いの紙。ここで、促されるままに書いてしまえば、詐欺に引かかる力モでしかない。

「その前に、針含めた裁縫道具一式、貸してください」

ユヅルの言葉に、快く裁縫道具を渡す岬。部員たちは、これから何が起こるのか、固唾を吞んで成り行きを見守っている。

だが、次の瞬間、部室にいた全員が言葉を失ってしまう。なぜか、それは、ユヅルが器用に、針と糸を使いこなし、ぬいぐるみを二体ほど、十分もしないうちに完成させていたからだ。その動きは、一朝一夕でものにできるものではなく、とてもじゃないが、体に染み付いていなければ、できるものではない。

「みゝたん先輩、これが犬と猫です」

そう、彼が作った二体のぬいぐるみは、十人が十人認める犬と猫。しかもそのできはかなりのもの。あまりの手際よさに、部員全員、

状況が飲み込めていない。だが、そんな部員をよそに、入部届けに名前を英語で記入したユヅルは、ぬいぐるみを椅子に座ったままのヒサノに対して放り投げる。

「それは、お前にやる。ああ、そうだ、活動日とかは、明日にでも教えてくれ」

そう言っで、ユヅルは部室から出て行ってしまう。

「すっ素晴らしい。ハラシヨ」

奇声を上げながら喜ぶ岬に、ユヅルお手製のぬいぐるみを抱きしめ、完全に乙女モードに入ってしまったヒサノ。

部員たちは、この状況、どう收拾をつけたらいいものか、腕組みをしてうなっていた。

部活動に参加しよう2（後書き）

部活は決まりましたが、まだ続きます。

次はどちらのターン？

部活動に参加しよう3 (前書き)

答えはカズキのターン

ドロー

部活動に参加しよう3

「それで、お前は姿かくして、気配かくさずか。いるのバレバレだぞ」

手芸部の部室を出たユヅルはため息をつきながら、気配のある方向に視線を固定。

「ふむ、僕としてはうまく隠れたと思ったのだが、甘かったか。次からは気をつけることにするよ」

謝罪と取れなくもない言葉を口にして、姿を現したのはカズキ。

もつとも、彼女の気配を感じたので、彼は部室から出てきたのだが。

「それで、今から行くのか？」

「どこに？」

「どこにつて、お前。部活見学に俺を誘いに着たんじゃねえのかよ」

腕時計を見れば、時刻は午後五時三十分を回ったところ。部活の活動時間がどのくらいまでなのか、ユヅルは知らないが、この時間はまだ活動していてもおかしくない。

「うん、そうだよ。すごいこう、今行こう」

そう言ってユヅルの隣まで来て、右腕に両腕を絡めてくるカズキ。

「歩きづらいんだが」

「おやつ、お姫様抱っこは歩きづらくはないと？」

さらに何か言おうと、ユヅルは口を開こうとするが、口では彼女に勝てないことを過去の経験から学習済みなので、諦める。そんな彼を見て、カズキは満足そうに、ユヅルの腕を取りながら、抱きつくような体制で部室へと彼を連れて行く。その瞬間も、当然のようにシャッターを切られているのだが、もう、彼にとってはどうでもいいことになっていた。

カズキに連れてこられた部屋の看板を見て、ユヅルは一瞬、顔をしかめる。その場所には確かに、創作部と書かれているが、その隣

には軽音楽部の看板も一緒にかけられている。

「さあ、行くぞ」

彼女に促され、抵抗することもなく、ユヅルは部室へと足を踏み入れる。それと同時に、彼の耳に響いてきたのは轟音。そう、まさに轟音。それもそのはず、部室内に防音設備を施してあるのだろう。外には音が一切漏れていなかったが、中では四人組のバンドが演奏真っ最中。だが、肝心の歌が聞こえてこない。

「彼らは、創作部の有志で結成したバンドだね。最近、部に昇格したため、部室がまだない。そんなわけで、部室を兼用しているんだ」

「説明ありがとう」

二人が会話をしていると、ようやく二人の存在に気づいた四人組が演奏を中止し、

「雨竜さんの彼氏かな？ はじめまして、軽音楽部部長の一年五組、真田アキタカです」

ギターを演奏してきた小柄な少年が頭を下げた後、右手を差し出してきた。だが、ユヅルの右腕は、カズキに取られてしまっているため、握手ができない。それを察してくれたのか、アキタカは代わりに左手を差し出してくる。

「一年三組のユヅル・ハイドマン。ちなみに彼氏じゃない」

さりげない親切を快く受け入れ、ユヅルは彼の手を握り返す。

「そうですか、それは失礼。そうそう、創作部の部長は今、生徒会室に行つて、席をはずしています。代わりといつては何ですが、副部長の僕が説明しても？」

「それは助かるな、是非そうしてくれ」

待たされるよりも、時間を無駄にせず済む。そう考えたユヅルは、アキタカの提案をのみ、先を促す。

「創作部の主な活動としては、やはり、執筆活動ですね。主な発表の場である文化祭では、各部員が書いてきた作品を一冊にまとめ、無料配布しています。ちなみに、軽音楽部に詩も提供してくれて助かります」

「なるほどね、ジャンルとしてはどんなの書いてるんだ？」

「それは、僕が持っていてこよう。確か、去年度の作品が保管されていたはずだ」

ようやくユヅルの右腕を解放し、作品を取りに移動するカズキ。そんな彼女を見て、アキタカはユヅルに耳打ちしてくる。

「本当に彼女と付き合っていないんですか？」

「さっきも言ったが、違う。昔の知り合いなだけだ。あいつも、久しぶりに会えたんで、舞い上がってるだけだろ」

意外と食い下がってきたアキタカに対し、こちらも小さな声で答えるユヅル。だが、彼の言葉をアキタカが信じていないことは、笑みを浮かべている彼の顔を見れば一目瞭然だった。

「あつた、これだ」

目的のものが見つかり、一冊の本をユヅルに手渡すカズキ。受け取ったユヅルは、その重量に若干驚きながら、ページをめくっている。

「なるほどねえ」

本を閉じ、近くにあった机に置き、室内を見渡すユヅルは、先ほどまで持っていた疑問をぶつけてみることにした。

「そっぴや気になったんだが、バンドにボーカルはいないのか？ 作詞はしてもらってるんだろ」

だが、その質問はどうやら地雷だったらしい。その質問をした瞬間、バンドメンバーは遠目でも分かる位に肩を落とし、落ち込んでいる。

「ぼくら、音痴なんです」

「音痴？」

「はい、楽器の演奏はそれなりにできるんですが、歌うとなるとやっぱり、四人ともダメみたいで」

「なら、他のやつに歌ってもらえばいいだろ？」

「そっぴやなんですけど、僕らの知り合いに歌の上手い人っていないくつて」

どうやら、彼らなりに手を尽くした結果、ボーカルがいらないらしい。それで納得しようとしたユヅルだが、カズキが不用意な一言を口にしてしまう。

「ならユヅル、君が歌えばいい」

「はっ？」

「ここまで来たんだ、もう、創作部にも軽音楽部にも入ることは決定だろう？」

「話を勝手に進めるなよ」

「本当ですか？」

講義を続けようとするユヅルだが、アキタカのあまりの嬉しそうな顔を見て、若干決意が揺らいでしまう。そこに、カズキはつけ込んでいく。

「あんしろ、真田。彼はこう見えて、歌も上手いし、なんだかなだ言つて、面倒見がいい。懇切丁寧に頼めば、断るような男ではない」

「勝手に他人のキャラを作るな」

「是非、お願いします」

ユヅルは抗議するが、とき既に遅し。既に、彼が両方の部に入部し、ボーカルとして軽音楽部に参加することが確定して、話が動くとしている。

「それで、何を演奏しましょう」

「俺、日本の歌、あんまり聴いた覚えがないから、適当でいいよ」

そして、抵抗の無意味さを悟り、ユヅルは諦めてしまう。

「それじゃ、リベロの『Don't you say』は？」

「それなら知ってる。でもあれって、ギター二本必要だろ？」

アキタカが提案してきた曲は、去年、全米で大ヒットを記録した映画のテーマ曲。しかし、そのバンドは五人組だと、ユヅルは記憶している。ボーカル&ギター、ギター、ベース、ドラム、キーボードの五人組。改めてみても、ここには、ギター、ベース、ドラム、キーボードの四人しかない。そう、一人分足りない。

「はい、それじゃお願いします」

そう言つて、アキタカは予備のギターを取り出してきて、ユヅルへと手渡す。どうやら、彼が ボーカル＆ギターをやることは、変更のきかない決定事項らしい。

「はあ」

ため息をつきつつも、受け取ったギターのチューニングをしたユヅルは、アンプにつないで、軽く音を出してみる。

「準備はいいですか？」

「もう、どうにでもしてくれ」

ユヅルの返答を、了解と取り、五人での演奏が開始される。もつとも、観客はこの場にいるカズキ一人なのだが。

始まるまで、やる気が完全になかったユヅルだが、演奏が始まると、それは一変した。

そう、彼は誰に恥じることなく、堂々とした態度で歌い始めたのだ。勿論、そうでなくては困るのだが、ギターもきちんと弾けている。初心者であれば、どちらかに偏ってしまい、片方でミスをしがちなのだが、彼にはそれがない。おまけに、英詩の歌詞は、長年英語圏で生活してきた彼にとっては母国語のようなもの。発音も完璧である。

演奏が終わり、カズキから拍手を受け取りながらギターを置こうとしたユヅルだが、その瞬間、後ろから四人がかりで抱きしめられてしまう。そこで、倒れなかったのはさすがとしか言いようがない。「やばいっす、ユヅル君、メチャクチャ上手いじゃないですか」

「ギターも歌も、マジパネエ」

「逃がしはしない」

「これからよろしく、お願いします」

振り返れば、四人同時に口を開くものだから、ユヅルは戸惑ってしまう。

「俺は、聖徳太子じゃねえ。一人ずつにしろ」

なんだかんだ文句を口にしつつも、流れには逆らえないユヅルだった。

部活動に参加しよう3（後書き）

彼は、いったいいくつかの部活に参加するのでしょうか？

答えは、ノリだけが知っている

幕間 闇の中（前書き）

本当の彼はどこに。

複線を一つ回収

幕間 闇の中

横浜倉庫街。

時刻は、深夜二時を回り、周囲の光は闇に飲み込まれ、騒音は海の音にかき消されていく。

そんな場所で一人、ベンチに座り、タバコの煙を燻らせているのは、天禅寺高校の制服ではなく、私服姿のユヅル・ハイドマン。両手をジーンズのポケットに突っ込み、思考をまとめる為に両目すら閉じている。

「失礼、少し遅くなってしまったようだな」

深夜だというのにサングラスをかけたスーツ姿の男。英語で話しかけてきたところを考えれば、間違いなく、この男がユヅルの待ち人。

「そうだな、本当に、少し遅かった」

タバコを吐き捨て、靴の裏で火を踏み消して立ち上がったユヅルは、男の持っているスーツケースに視線を注ぐ。

「それが、例のブツで間違いなののか？」

「ああ、確認してもらいたいのだが、そちらの持ち物は？」

ユヅルは男の問いに、顎でベンチの横においてあるスーツケースを示す。

「尊大な態度だな。交渉相手の機嫌を損ねて、得でもあるのか？」

「別に。気に入らないなら取引なんてしなければいいだろう」

「違うない」

男がサングラスを取ると同時、何かに牽きつけられるようにスーツケースが持ち上がり、男の前まで移動してくる。決して手品などではない。

超能力。

人は度々、この言葉を口にする割に、科学という言葉を盾にして、事実を否定し続けている。しかし、存在し続けているのも確か。完

全に否定することなど、誰ができようものか。

男はなれた動作で、しゃがみこんでスツケースを開けるが、彼は顔をしかめる。勿論、それは中身が彼の予想していたものではなかったから。代わりに、その中身は、一枚の紙切れ。

「求めるならば、奪い取れ。それが、唯一無二の答えだ」

紙切れに書かれている言葉を、高らかに口にするユヅル。瞬間、飛んでくる空のスツケース。それを右足で蹴り飛ばし、彼は、左手で新しいタバコに火をつける。

「まさかとは思っていたが、そうか、それが答えか」

「当たり前だ。もしかしてあんた、異端審問局が、人殺しが、エゴイストが、羊の振りしただけの狼が、取引なんて。そんな、いつぱしの人間みたいな、常識持ったやつらみたいな真似をするとても、本気で思ってたのか？」

彼は、顔に邪悪な笑みを貼り付け、男の言葉を真つ向から肯定する。

「この世に正義なんて存在しない。あるのは力と欲、そして意思のみ。他者の価値観で変化してしまうようなもの、俺たちは信じない。この世に悪も存在しない。わかったなら、とつとと帰れ。伝書鳩の真似事させられる俺の身になって」

男に対して、帰るよう態度で促すものの、男がそのまま引き下がることは、微塵も思っていない。

「そうか、ならば、貴様らの流儀に習い、そうさせてもらおうとしよう」

男の言葉と同時に、瞬時に移動しようとしたユヅルだが、その体が動かない。当然、無防備なまま、男のこぶしを腹に受けるが、男はユヅルが倒れることすら許そうとはしない。そのまま右膝を鼻に、肘を右目に叩き込む。声すら出せず、痛みに耐えながら、ユヅルは思考をフルスピードで回転させていく。

「つまらんな、異端審問局とは、所詮この程度のものか」

吐き捨てるように男は口にし、ユヅルに対して背を向ける。そう

して、ようやく彼は倒れることができた。だが、のんきに眠っているわけにもいかない。男は、その気になれば、いつでもユヅルを殺すことができたはず。それでも、その行動に移らないのは、自分の力に、優位性に絶対の自信があるからに他ならない。

「これなら、こんなやつらを収めている長、アレグリオといったか、奴の器もたかが知れている」

「おい、お前、今、なんて言った？」

男の侮蔑に対し、痛む体に鞭打ち立ち上がったユヅルは問いかける。それは、この場にそぐわぬ、純粹すぎる声。

「貴様ら、異端審問局もその長もたいしたことがないといったのだ、小僧」

振り向きざま、ユヅルの反応できない速度で、右のつま先を鳩尾に叩き込む。能力を使う必要は既にある。それだけで、目の前の少年は意識を失う。そう、男は踏んでいた。それは、間違いなく、長年の経験からくるものであったが、結果は違っていた。

男の蹴りを受けたまま、ユヅルはその場から動いていない。倒れてもいなければ、うめき声も上げていない。完全に意識を失っているわけでもない。なら、男が気になって仕方がない、違和感の正体はいったい。

「そうか、俺の聞き間違えじゃ、なかったわけだな」

口から血を吐き出し、男の攻撃で落としてしまったタバコの代わりに、又、新しいタバコに火をつけながら、ユヅルは、男の顔を見ずに口にする。そして、ゆっくりと、タバコの煙を吐き出しながら、顔を上げた彼の顔に、先ほどの笑みはない。かといって、苦痛の表情があるわけでもない。怒りがあるわけでもない。普段どおりの表情を浮かべ、

「俺の中には、破らないと決めたルールが二つだけある。それを特別に教えてやる。一つ、己の生き方を己では変えないこと。一つ、オヤジのことを馬鹿にした奴だけは、誰であっても殺すこと。お前は今、局長、オヤジのことを馬鹿にしたな」

何気なく、そう、雑談でも口にする口調で歌い上げる。

「お前は、殺す」

そして、宣言する。

だが、男とて、ただその場において、殺されるはずがない。相手を殺す。その口にしたものの、その場から動こうとしないユヅルへ、こぶしを、蹴りを、肘を、膝を急所へと叩き込んでいく。彼は動かない。男が能力を使っているため動けない。

「もう、終わりか？」

タバコの煙を燻らせ、唇にタバコをはさんだ状態で、ユヅルは口にする。

男は既にやけになってしまっている。手ごたえがないわけではない。そのこぶしには、骨を砕いた感覚、足にも同様の感覚が伝わってきている。男の見立てであれば、全身骨折に加え、骨折した骨が臓器に突き刺さり、言葉を口にするなど、到底できるはずのない常態。なのに、目の前の少年は、それが当たり前のように口を開く。

「終わりみたいだな」

次は、こっちの番。その言葉そう告げている。だが、男の能力に拘束されているユヅルは、動くことができない。そう、男は自分の能力に対して、絶対の自信を持っていた。その瞬間を見てしまうまでは。

ユヅルは、いつの間にか、左手の指にタバコを挟み、空いた指で刀の柄を握っている。先ほどまで持っていなかったはずの刀。彼はそのまま右手で抜刀。距離的には、男を袈裟切りにできるが、男はその攻撃に対して、能力で対抗。

男の能力は、引力と斥力であり、超能力の中でも、サイコキネシスと類似されることが多い。対して、ユヅルの獲物は刀。磁力の影響を大きく受ける金属でできた武器は、男の能力に逆らうことができない。男は、そう、確信していた。しかし、男の体に伝わってきたは、異物が体に進入してくる不快感、次いで、肌を切り裂かれる

痛み、そして、地面の冷たさの順。ユヅルの刀は見事なまでの軌跡を描き、男を袈裟切りにし、鞘へと収められている。

「なっ、なぜだ」

男は、途切れ途切れに、信じられないといった表情で、ユヅルを見上げる。対して、彼は、タバコを投げ捨て、再び刀を抜き放つと、今度は男の右腕に突き刺し、地面に縫いつけ、刀に体重をかけて固定させる。

「確か、殴られた数は、十一発だったな」

男の問いに答えず。懷から銃を取り出したユヅルは、その引き金をためらうことなく、男の右手に向かって引く。引く、引き続ける。指が千切れ飛び、爪が宙を舞おうが、血が周囲に飛び散ろうがお構いなしに。ちょうど、十一発撃ち終えたとき、彼は懷に銃を戻し、刀を男の右腕から引き剥がし、男の首へと移動させる。男は既に、痛みと出血で意識が途切れかかっている。それを、無理やり髪を掴んで、上半身だけ起き上がらせるユヅル。

「お前は、俺を殺せていた。だが、殺せなかった。それが事実であり結果。それがすべてだ。自分に自信を持つことは否定しないが、殺せるときに殺しておかないから、自分が殺されることになる。しつかり、勉強しておくんだっとな」

嘲るのではなく、淡々と口にしたユヅルは、男の髪から手を離し、そのまま刀で喉を切り裂く。既に、致命傷の男に、さらに傷を与え、彼はようやく刀を鞘へと戻す。

「こちら、ユヅル・ハイドマン。対象の殲滅を確認、処理を頼む」
「了解しました」

携帯電話を取り出し、着信履歴からコールした彼は、返事だけを聞いて、すぐに通話をきって、携帯をジーンズのポケットに戻す。腕時計で時刻を確認すれば、午前二時二十三分。

「約五時間後には学校に行かないといけないのか。ズル休みは可能か？」

先ほどまでとは打って変わり、ため息をつきながらも彼はいつも

のように、その場所を後にする。

幕間 闇の中（後書き）

次からは再び日常に戻ります。

デートにレッシュゴー1（前書き）

ようやくカナミのターン。

そして続きます。

デートにレッツゴー1

それは、ある日の出来事。

いつものように高校へ行き、帰りに商店街で夕食の材料を買い終えたユヅルとカナミの二人は、小さなテントの前にいた。そこには大々的に商店街福引大会。この文字が横断幕に書かれ、風に舞っている。

「福引ってなんだ？」

そんなことをユヅルが口にしたのがきっかけ。偶然にも、本日の買い物で、一回福引をするほどの福引券を二人は手に入れている。

「そうですね、口で説明するとどうも上手く言えないので、実際に一度やってみましょう」

カナミに言われ、二人して列に並び、いよいよ二人の番。ユヅルにしてみれば、初体験である。

「ここを握って、回せばいいと」

「はい、出てきた玉の色に応じて、その景品がもらえるんです」

説明を受け、視線を移動させてみれば、一等、二泊三日、ペアでの温泉旅行。二等、米一俵。三等、フルーツ詰め合わせ。まあ、商店街の福引なので、商品としては順当なところなのだろう。とりあえず程度に納得し、ユヅルが回すと出てきた玉の色は、白。見事に外れであり、ポケットティッシュを一つ受け取り、彼の福引は敗北で終わる。

「なるほどなあ、こういうもんか」

受け取ったポケットティッシュをユヅルは、ポケットに押し込み、家路へと着こうとするが、二人が横断歩道に差し掛かったところ、車が赤信号で飛び込んできた。ユヅルが瞬時に、カナミの腕を取り、体ごと引き寄せ、車は通過していく。

「怪我は？」

「だっ大丈夫です」

非常事態だったとはいえ、正面からユヅルに抱きしめられるような体制になり、カナミの頬は赤みを帯びている。

そんなとき、続けて今度はバイクが、ハンドル操作を誤って突っ込んできた。二人には関係ない距離だが、その先には、杖を使っている老婆の姿が。

「おばあさん」

考えるよりも先に体が動いたカナミは、老婆をかばうようにその場にしゃがみこむ。

馬鹿が

心の中で毒づきなら、移動したユヅルは、ドライバーを殴り飛ばし、それより少し遅れて、バイクを上蹴り飛ばす。

「本当に、世話が焼ける」

腰を抜かしたドライバーと、落下してフロント部分が変形したバイクを見た後、ユヅルはカナミに手を差し伸べ、

「卵割れちまったから、もっかい、買いに行くぞ」

仏頂面のまま、言葉を口にする。そんなユヅルの手を握り、立ち上がったカナミは、それからすぐに老婆の無事を確認。

「無事で、よかったです」

「ほんに、ありがとうなあ」

「さっさと行くぞ」

既に、興味のなくしているユヅルが先に行ってしまったので、カナミをあわてて後を追う。

そして、善行は善行となって帰ってくるのである。

翌日、土曜の夜。

学校から帰ってきたユヅルとカナミの二人。二人の視線は、石段より少し先に停まっている黒塗りの車に注がれる。以前、ヒサノの父がリムジンで訪れてきたことがあるので、少し警戒しながら、二人は石段へと近づいていく。

すると、車から一人の男性と、見覚えのある老婆の姿が出てきた。

「かあさん、この人たちで間違いないのかな？」

「ええ、合ってますよ」

一言二言交わし、老婆を車へと戻らせた男性は、二人の下へと歩いてきて頭を下げる。

「初めまして、先日は母を助けていただいたそうで。お礼に伺わせていただきました。お二人がいなければ、母は今頃、よくて病院のベッドの上、悪ければ、この世にいなかったでしょう。本当にありがとうございます」

男性は、礼を口にして再び深く頭を下げた。

「そなた、頭を上げてください。おばあさんが無事で、私たちも怪我はしてないですから。お礼を言われるようなことじゃありませんよ」

あわてて男性に対してカナミは声をかける。ユヅルはといえば、無関心を装い、完全に関わる気がない。

「それですね、よろしければなんですが、こちらを受け取っていただけませんか？」

口ではそういいながら、カナミに男性は半ば強引に封筒を握らせる。中に入っていたのは、最近、近所にできた遊園地のフリーパスチケットが二枚。

「私、この遊園地の支配人をやっていました。こんなお礼しかできなくて申し訳ありません」

そう口にして、男は頭をもう一度下げると、今度はそのまま車に戻り、去っていつてしまふ。どうやら、返却は受け付けてもらえないらしい。

「何もらったんだ？」

話に興味はなくとも、もらったものには興味があるらしく、ユヅルがカナミの手元を覗き込む。

「ふうん、明日日曜だし、誰か友達誘って行って来れば？」

そんなことを口にして、ユヅルは石段を登っていこうとするが、
「じゃあ、一緒に行きませんか？ 遊園地」

「俺と？」

「えつとですね、深い意味はないんですけど。ほら、ユヅルさんって、日本の遊園地に行った事ないんじゃないかなって、思いましてそつその、突然なんで、予定があれば、別にかまわないんですけど」
自分でも何を言っているのか分かっていないのか、彼女の声は裏返っていて、そして、断られることが怖いのか、弱々しい。

「何時にここ、出ればいいんだ？」

「えっ？」

「だから、行くんだろ、遊園地。行く前に声かけろよ」

「はいっ」

まさか、一緒に行ってもらえると思っていた力ナミは、彼の言葉に対して満面の笑みで答えるのであった。

デートにレッツゴー1（後書き）

ちなみに、ユヅルの予定は、
月、火に手芸部。水、木が創作兼軽音楽部となっております。

デートにレッツゴー2（前書き）

久しぶりにカナミと二人。

そして、筆者も絶叫系は苦手

デートにレッツゴー2

待ちに待った日曜日。

二人きりのデートということもあり、カナミのテンションは相当なもの。もつとも、時刻はまだ午前六時を回ったばかりで、ユヅルに声をかけていない。

「よし、今日は絶対大丈夫なはずです」

普段、いや、最近一週間で、二人の周囲、主にユヅルの周囲は大きく変化している。彼が着てから二週間の間は、二人でいることが多かったというのに。なぜか、彼はいろいろな場所で、自分勝手にフラグを立ててしまう。おまけに、それが女性がらみなものだから、尚更性質が悪い。

「でも、今日は二人つきりです」

最近、部活に参加し始めたせいか、ユヅルは学校生活が忙しくなってきた。もつとも、そうさせたくて、クローデルは彼を日本の学校に入れたのだが。彼女のにしてみれば、そういった大人の事情は関係ないのだ。

昨日一日悩んで、決めた服装に、普段はあまり念入りにはしない化粧もしている。これで、お弁当も持っていければ最高だったのだが、それは、昨日、母親に台所で大目玉を食らい、できなくなってしまった。それでも、今日は、二人つきりなのだ。

「さてと、それじゃ」

そう言っ、自室を後にしたカナミは、ユヅルの部屋の前まで移動。一つ深呼吸をして、ドアを開ける。なぜだか、彼女自身は知らないが、彼はドアに鍵というものをかけない。トイレは例外だが、彼が自分の部屋に鍵をかけたところを、カナミは一度もみたことがない。

薄暗い室内、足元に気をつけることなく、カナミは室内に足を踏み入れる。彼の部屋には、ものがあまりない。いや、生活に必要な

もの以外、殆どものがなく、味気ない。あるとすれば、灰皿ぐらいのもの。後、小さな写真たてが一つ。そこには、今と同じ仏頂面を浮かべたユヅルと、隻腕隻眼男性が笑みを浮かべて写っている。

そんな室内で、ユヅルはベッドの中、静かに寝息を立てている。彼を知らない人間が見れば、特に驚くことはないが、知っている人間からしてみれば、結構驚いてしまう。そう、彼、寝顔だけは年相応の少年で、むしろそれよりも幼く見えて、可愛く見えるのだ。無論、この事実を知っているのは、この家でカナコとカナミの二人だけ。そう、最近現れた二人の女の子は、この秘密を知らない。そんな小さな優越感に浸りながら、カナミはベッドの前で膝をつき、彼の前髪に手を伸ばす。

「ユヅルさん、朝ですよ」

耳元でカナミはささやくが、ユヅルからの反応はない。彼、自分で起きる時は、目覚ましを必要とせず、決まった時間に起きる。だが、特に、誰かに起こされるときに限っては、ちよつとやさつとは目を覚まさない。

そのことを知っていながら、あえて確認したカナミは、頬を軽く指でつつく。それでも、反応は返ってこない。完全に熟睡している。そして、彼女自身、この時間を完全に楽しんでいた。しかし、楽しい時間は長くは続かない。壁の時計を確認すると、時刻は午前七時を回ったところ。遊園地までの移動時間を考えれば、八時半に家を出れば十分間に合う。なら、もう少しこの時間を楽しめると、カナミは思ったのだが、

「何やってんだよ、お前」

残念なことにユヅルが目を覚ましてしまふ。少しだけがっかりしながら、カナミは立ち上がり、

「起こしに来たんです」

少し頬を膨らませ、腰に手を当て、前かがみになって、寝ぼけているユヅルに声をかける。

「わかったよ、着替えたらすぐ行くから。待ってる」

「はい」

やはり、今日はテンションが相当高い。そのことを自覚しながら、返事をしたカナミは部屋から出て行く。

「ったく、がきじゃねえんだから、もう少し落ち着けよ」

「そうですけど、一日を楽しむためには、時間は無駄にできないんです」

チケットを入場ゲートで渡し、代わりにリストバンドを受けとった二人は、それぞれ右手につけ、遊園地に足を踏み入れたのだった。

「お前が乗りたいうて、言っただよな？」

「そうです、そのとおりです」

ユヅルの問いに答えるカナミの言葉は、非常に弱い。まあ、テンションだけで苦手な絶叫マシンに乗れるわけもなく、乗った後の考えていなかったのである。当然の結果、体調を悪くしたカナミはベンチにもたれかかっている。

「はあ、飲み物でも買ってくるから、おとなしく待ってるよ」

そう口にして、ユヅルは売店のほうへと歩いていってしまう。彼がいなくなったことを確認して、

「本当、何やってるんでしょうね、私」

大きくため息をついてしまうカナミ。楽しみでしようがなく、はしゃいでしまったことが原因なのは、自分でも分かっている。後先考えないで行動してしまった自分が悪いのだ。

「ねえ、彼女、一人？」

「良ければ、俺たちと一緒に遊ばない？」

顔を上げてみれば、カナミに声をかけているのだろう。何人かの男性が近くによって着ている。まあ、ナンパである。普段であれば、すぐに断ることができるのだが、現在、彼女は体調不良。すぐに言葉の口をすることができない。

「あんたら、何やってんだ？」

そんな場所に、まったく空気を読まずに戻ってきたのはユヅル。

両手には、売店で買ってきたドリンクが握られており、本当に、疑問をただ口にしただけらしい。

「なに、あんたこの子の知りあい？」

「ちよっと引ッ込んでくれる？」

だが、男たちはユヅルの存在を好ましく思っていない。睨みながら、彼にここを立ち去るように、手で指示するのだが、残念。彼らが相手にしている男、ユヅルは、マイペース。男たちの言葉を見殺して、ベンチに腰掛けて、両方のドリンクをベンチの上に置く。

「とりあえず、紅茶とコーヒー買ってきたから好きなほうを選んでいいぞ」

「あれ、優しいんですね？」

「お前が普段、どんな目で俺を見てるのか、少し分かった気がするよ」

そう口にして、苦笑したユヅルはそのままタバコを取り出し、火をつけようとして、やめる。

「タバコ、吸わないんですか？」

「いや、さすがに体調崩してるやつの隣で吸うのはどうかと思った」
そんな彼の言葉を聴いて、少し気分がよくなってきたカナミは笑みを浮かべる。

「おい、何完全に無視してくれちゃってんの」

「やっちまうぞ、テメエ」

その存在を完全にユヅルは忘れていた。そう、服をつかまれ、強引に立たせられてようやく、思い出した。

「あのさあ、一つ質問、俺の握力はいったいどれくらいでしょう？」

「はあ？ そんなの知るかよ」

「こちらら、格闘技やってんだぞ」

まともに質問に答えてもらえると置いていなかったが、想像以上の答えが返ってきたので、とりあえず、自分の服を握っている男の手を右手で軽く握る。

「まあ、測った覚えなんてないんだけどさ」

それだけで、男は苦しげなうめきを上げながら、ユヅルから手を離し、掴まれている手にもう片方の手を持ってきて、どうにか彼の手を引き剥がそうとする。

「今なら、俺のお願い聞いてくれるかな。消えろ、俺の視界から」

ユヅルが右手を離すと、男の手にはきっちりと青あざが手の形を残し、そこにどれほどの力がこめられていたかを、雄弁に語っている。それが効果があったらしく、男たちはその場からすぐに去っていく。

「つたく、面倒くせえ」

再びベンチに腰を下ろしたユヅルは、空を見上げながら毒づく。

「さてと、それじゃ、次はあれに乗りましょう」

そんなユヅルの右腕を取り、立ち上がったカナミは、メリーゴーランドを指差し、歩き出す。

「体調はもういいのかよ」

「大丈夫です」

ため息をつきつつも、ユヅルは逆らうことなく、彼女に歩幅を合わせて歩き出す。それが、カナミにとっては嬉しかった。

データにレッツゴー2（後書き）

次で、複線を少し回収する予定。

カナミのターンはまだ続きます。

デートレッシュコー3（前書き）

お弁当は恩返し。

デートにレッツゴー3

夕暮れ時、二人は帰る前に観覧車に乗っていた。

「ふう、意外と疲れるもんだな、だが、楽しかった」

今日一日を振り返り、外の景色に視線を固定しながら、ユヅルは口にする。

「なぜ、あの時、我を殺さなかった。答えろ、小僧」

しかし、帰ってきたのは、無粋な言葉。それは、紛れもなくカナミの口から放たれているのに、彼女の言葉ではない。

「お前、誰だっけ？」

「はぐらかすな、小僧」

対面に座っている彼女に視線を移動させたユヅルは、いきなり怒鳴られ、どう言葉を返していいものか、少しだけ悩む。

「それで、何を答えるって、『クシミタマの巫女』。もう一度言ってくれ」

「なぜ、あの時、我を殺さなかった」

「いや、殺したと思ってたよ。今、お前がここに、カナミの表層意識を乗っ取って、出てくるまでは」

「だから、はぐらかすなと言っている」

彼女は立ち上がり、ユヅルの首元を両手で掴み、服をひねりあげる。

「何をそう、カリカリしてるんだ？ 生きてたんなら、それが結果だろ？」

「生かされている屈辱を、知らぬ貴様ではあるまい。答えろ」

「まったく、面倒なやつだな。とりあえず、座れ」

ユヅルは、彼女を座らせ、服装を正すと、大きくため息をつき、
「殺さなかった理由だっけ？ そんなの、お前もカナミの一部だったからに決まってるだろ」

「我が、この器の一部だと？」

「俺はそう感じたんだが？」

「馬鹿なことを言う。我に捧げられた供物であるこやつ、一部だと」

納得がいかないといった表情で、彼女は怒りをあらわにする。

『クシミタマの巫女』

それは、神宮寺の家に古くから伝わっている、神の名前。神宮寺の家に生まれた女子は、代々、この神の器になることを義務付けられ、生贄になる。そして、三代において生まれてくることのなかった神宮寺家が、ようやく授かった女子がカナミである。

彼女の為、カナミは生贄になるはずだった。そう、義務付けられていた。だが、カナミの祖父である勲は、この儀式を憎み、どうか、この儀式を阻止しようと計画を練り、ユヅルが現れた晩に、その計画を実行した。計画は単純明快、カナミを生贄にする振りをして差し出し、それに食いついた神を殺すこと。神を祀る家系として、実行することも、思考することすらも禁じられているはずなのに、勲は孫娘を守る為に、禁忌を犯した。もっとも、実行したのはユヅルなのだが。

「俺がお前を殺そうとしたとき、お前は既にカナミの中にいた。そしたらもう、お前は、カナミの一部と考えてもおかしくはない。俺はそう思うが？」

「ほう、ならば問おう。我が、この娘の体を奪い、現世に顕現した場合、貴様はどう動く？」

「そんな当たり前の、分かりきってる答えを聞いて、どうするんだ？」

「いいから答えろ」

なんか、ため息ついてばかりだな

激昂する彼女の問いに対する答えは、既にユヅルの中で決まっている。

「お前を殺して、カナミを取り返す」

「できるのか、貴様に？ 我をこうして見逃している貴様に」

「お前こそ何を勘違いしてるんだ？　それとも、力の差すら理解できないほど耄碌したか。俺は、お前がカナミの一部だと判断したから、お前を殺さなかった。それが逆になったら、簡単に殺せるに決まってるだろ。現に、お前は一度俺に負けてるんだよ」

「口先だけでは何とでも言える」

「なら、試してみるか？」

平然と、日常会話でも口にするようにユヅルが口になると、彼女は、笑みを浮かべて、いきなり、ユヅルの唇を奪ってきた。それは、ほんの一瞬の出来事だった為、彼は驚愕に目を見開き、瞳を閉じていた彼女は、次の瞬間、顔を茹蛸のように赤くしている。

「なっ、なんで、こんなことになってるんですか」

いきなりの事態に、カナミはどうすればいいのかわからない、引っ込みやがったな、あいつ

既に、カナミに体の支配権が戻ったのだろう。ユヅルは、このことをどうやって説明しようかと悩む。すると、ちょうど観覧車は役目を終えて、地面へと戻ってしまう。

「悪い、係員さん、もう一回乗せてくれ」

そう口にして、ユヅルは降りることを拒否。再び観覧車は地面から、ゆっくりと離れていく。隣には、オーバーヒート状態のカナミ。事情を素直に説明することは簡単だが、それは、カナミのために行動した勲のことを考え、なるべくしたくない。

「さて、どうしたもんかね、まったく」

問題は積み上げられたまま。だが、このわずかな時間だけは、満喫しようと、ユヅルはオレンジ色に彩られた町に、視線を送った。

デートにレッツゴー3（後書き）

次回は、ちょっとシリアス。

エロジジイがシリアスなのです。

生贄と夜1（前書き）

複線回収開始。

生贄と夜1

それは、ユヅルが日本についた日。

屋敷の離れに、クローデルを伴わず、勲に呼び出されたユヅルは、彼の対面に腰を下ろし、胡坐をかく。

「そんで、こんなところに呼び出して、何のようだ？」

「本題に入る前に聞いておきたい、主は、神の存在を信じるか？」

先ほど、クローデルから受け取ったものをみた時の緩んだ表情はどこへやら、そこには厳しい表情を浮かべた老人がいる。

「俺自身は、信じちゃいない。でもまあ、いるかもな」

神に祈ることの無意味さ。そのことを、少年兵として戦場で戦っていたユヅルは知っている。

神はただ、そこにいるだけ。

「まあ、信じる信じないは、個人に自由じゃ。勝手にするがよい」

そう口にして、勲が懷から取り出し、見せてきたのは、小さな金属片。

「本題はここからじゃ、この、神宮寺の家は、代々、神に生贄を捧げている。馬鹿げていると思うかもしれないが、これは、紛れもない事実じゃ。現に、わしの母も生贄に捧げられている」

瞳を閉じ、静かに語りだす勲。ユヅルは、茶化すことなく、その言葉に耳を傾ける。

「だが、それから、女子はこの家に生まれなかった。わしは、嬉しかったよ。だが、カナミが十五年前、生まれた」

「なるほど、次は、カナミの番ってわけだ」

順当に考えれば、間違いない。だが、その言葉を口にした瞬間、勲はユヅルに対して殺気を露にし、どうにか、押し殺す。

「そう、主の言うとおり。カナミの番、しかも、儀式は今晚、執り行われる」

「へえ」

ユヅルは、他人事のように言葉を返すが、

「そこで、主には、その場で神を殺してほしい」

勲はとんでもないことを口にした。

「ジジイ、正気か？」

それは、神仏を祭る側の人間としては、思考することすら禁止されているはず。だが、勲はその言葉を、考えを口に出してきた。

「まあ、それは置いといて、どうして、今日？ やるなら、早いうちに終わらせておけばよかっただろ？」

「確かに、主の言うことはもっともじゃ、しかし、それはできんかった」

「どうして？」

「儀式は、二年おきに行われ、八回で完成する。先ほど見せた金属片は、その儀式の際、生贄となるものが、飲み込む代物じゃ。神は、そのときようやく姿を現す。それまでは、いかなる手段も、神を殺すには至らない」

「試したのかよ」

「試したに決まっておろう。でなければ、いきなりこのタイミングで現れた主なんぞに、頼むと思うかつ」

その怒号があまりに大きく、ユヅルは両手で耳を塞ぐ。

「誰が好き好んで、大切な孫娘を生贄に差し出したりするものかよ」「そうかい」

ため息を一つつき、ユヅルは懷からタバコを取り出し、マッチで火をつける。

「質問、かまわないか？」

「なんじゃ？」

「あんたの母親も生贄に捧げられたって言ってたな。でも、あんたは生まれてる。二年おきで、八回だから、計十六年。計算が合わないだろ？」

「わしは、母親が十五のときの子どもじゃ」

「そんじゃ次、生贄に捧げるって言うけど、具体的には？」

「その体を差し出し、神の器にする。つまり、肉体は生きているものの、精神的には死ぬことを意味する」

タバコの煙を吐き出し、ユヅルは腕組みしてしまう。

「それって、要するに同化するってことだろ？ あんた、どうやって神を殺すつもりなんだ？」

「これを飲み込んでから、半刻、つまり、三十分ほど、神は、完全に無防備となる。そこを狙う」

「いや、だって、肉体ないわけだろ？ 作戦自体破綻してる」

「煩い。それでも、やらねばならんのだ」

「メチャクチャ言いやがる」

背中を床に預け、天井に視線を向けながら、ユヅルは思考する。

「ガキのために、行動してくれる肉親、か。俺もこういう国に生まれてれば、少しは、人生変わってたんだろうな」

口にタバコをくわえたまま、独り言を口にし、瞳を閉じる。

「ジジイ、最後に一つだけ聞かせろ。俺が来なければ、どうするつもりだった？」

「どうするもこうするも、わし自身の手で終わらせるつもりじゃったよ」

その言葉は、自分がカナミの命を奪い、己の命も絶つ覚悟がこめられており、ユヅルが現れなければ、本当に実行していたことだろう。

「そうか。はあ、俺は、エクソシストじゃねえんだけどな」

体を起こし、真っ向から勲の視線を受けながら、

「いいぜ、やってやるよ。神様に喧嘩売るのは大得意だからな。ただし、条件がある」

「条件？」

「俺がタバコ吸っても文句言わないように家族に言っとけ」

立ち上がったユヅルは、入り口まで移動し、振り返ることなく、
「期待はすんなよ」

吐き捨てるように口にして、その場所から去っていく。

時刻は午後十時を回ったところ。
神に生贄が捧げられるまで、残り二時間をきったところ。

生賢と夜1（後書き）

次回、VS神様

生賢と夜2（前書き）

熱い言葉が響きます。

生贄と夜2

儀式まで残り、二十分。

体を清め、白の着物に身を包んだカナミは、本堂の中で、金属片を見つめながら、一人立ち尽くしていた。自分は、あと、二十分で、自分でなくなる。十六の誕生日に、死を迎える。それも、他ならぬ神の手によって。縋る神すらいないとは、まさにこのこと。自然と彼女の体は震えている。どうにか体を抱きしめ、震えを収めようとするが、逆に震えは大きくなり、ついに彼女は、その場で膝を着いてしまう。

「みつともねえ姿だな、まったく。クローデルに刃物投げつけてきたときと、完全に別物じゃねえか」

タバコを口にくわえたまま、本堂に足を踏み入れたユヅルは、後ろ手に障子を閉め、つまらなそうにカナミに視線を注ぐ。

「あなたに、今日、突然現れたあなたに一体何が分かるというんですか」

瞳に涙を浮かべながら、声を荒立たせるカナミ。しかし、彼が彼女に向けてくる視線は、侮蔑へと変化している。

「わかるわけねえだろ。それとも何か、お前は俺に理解されたいのか？」

つまらなそうに柱に背中を預けるユヅル。

「第一、もうすぐ大事な儀式を執り行うんです。部外者はお引取りを」

「大事な儀式、ね。自殺の間違いだろ？」

声を張り上げるカナミに対する答えは嘲笑。それをきいて、彼女の頭にも少し血が上ってくる。

「自殺。何を言ってるんですか、これから執り行つのは神聖なる儀式。代々、神宮寺家が行ってきたことです」

「要するに馬鹿な家系ってことだろ」

タバコの煙を吐き出し、さらに火に油を注ぐユヅル。

「テメエ勝手に、そうするしかないって。結論を決め付けて、それ以外の答えを求めようとするな。正しさの奴隷。いいよな、誰かが決めたルールに、これまた誰かが決めたルール。そんなものに縋れば、何でも正しいって言い切れるんだから。まるで免罪符振りかざす聖者。かつこよすぎて、反吐が出る」

「それは、神宮寺家に対する侮辱ですか」

金属片を握る手が、先ほどとは別の感情で震えている。彼女は、すぐにその感情が何であるか理解できる。これは、怒りだ。

「ああ、それぐらいの理解はできたか」

「なんですって」

それ以上カナミは我慢することができず、ユヅルに対して怒りに身を任せて、掴みかかる。彼は、それを避けることもせず、その場に立ったまま。避けようとすれば、簡単にできるのに。

「私のことはともかくとして、いえ、それも許せませんが。あなたの言葉は、命を賭してきた、先祖に対する侮辱です。それは、決して許せません。訂正してください」

「嫌だね」

カナミの怒りを受け流し、短い言葉を吐き捨てるユヅル。そして、改めて確認してみれば、彼の表情は、嘲笑から怒りへと変わっていた。

「一つきくが、おまえの言う神宮寺家ってなんだ？」

「それは、私が生を受けた家で、代々神を祀っている」

「それだけか？」

その言葉は、怒りを押し殺したものだ。だが、次の瞬間、ユヅルは彼女を突き飛ばし、

「テメエは、本当に馬鹿みてえだな。テメエの言う家ってやつには、テメエの家族は含まれちゃいないってのか」

「そつ、そんなこと」

彼の怒りに、言葉に言い返すことができずに、カナミは言葉をつ

むぐことができない。

「自分の腹痛めて生んだ娘に、死なれる気分は。可愛がつてる孫娘に、死なれる気分は。理解できてんのか？ 正しさの奴隷に成り下がり、自分の母親、祖父の気持ちを本当に理解できてんのかって、聞いてんだよ」

ユヅルは、感情に任せて言葉を吐き出していく。そして、その言葉の一つ一つが、彼女の心に深く、深く突き刺さっていく。

「でも、二人とも納得してくれて」

「そんなん、形だけに決まってるだろうがっ」

ここで彼の怒りは頂点に達する。

「さっき見てきたら、お前の母親は机で、顔隠して泣いてたよ。それで、ジジイは、お前を救ってくれるようにって、俺に頼み込んできた。わかるか？ あの二人は、テメエと違って、ルールなんかじやねえ、自分の心と向き合って生きてんだよ。誰かの決めたルールじゃ納得できねえんだよ。相手が神だろうとなんだだろうと、自分の大切なものを、手放したくねえんだよ。わかるか？ そんなだけ、お前はあの二人に愛されてんだよ」

それは、今、カナミが最も聞きたくて、同時に聞きたくなかった言葉。彼女だって、自分が死んだ後のことを考えなかったわけではない。ただ、そのたびに悲しみに負けて、考えることを諦めていた。「でも、だったらどうしろって言うんですか。私には力もないし、選ぶ選択肢も、もう残っていない。二人の気持ちだって本当は、痛いほどわかってますよ。でも、私には、これしか選べなかったんです」

涙があふれ、頬を伝い、それが床へと落ちるまで、殆ど時間はかからなかった。

「なら、選択肢が増えたら、お前は どうしたい？」

「生きたいですよ。お母さんと一緒に笑って、おじいちゃんと一緒に散歩して、普段どおり、二人と一緒に暮らして生きて、恩返しして私が生まれたことを、成長したことを、二人に喜んでもらえる。そ

んな生活に戻りたいですよ」

心から、零れた雫のように、彼女の言葉は口から出てくる。

「最初っから、そういえばいいんだよ、馬鹿」

そんな彼女を見て、先ほどの怒りはどこへやら、ユヅルは呆れていた。

「はなっから、諦めて、受け入れた振りしてるやつなら、どうしようかと思っただが。まあ、今のお前なら、及第点ギリギリってところ」

ユヅルの言葉をカナミは理解できていない。それがわかったユヅルは、その場でしゃがみ、彼女に視線の高さを合わせ、

「俺が救ってやるよ。神が相手だろうが、どこの誰が相手だろうが、関係ない。俺は、テメエの代わりになるために、この場所に来たわけじゃねえんだよ」

「えっ、一体何を言っただ」

「神を、テメエをくつちまおうってやつを、テメエから、日常を奪おうって奴を、俺が殺す。そう言ってるんだよ」

「無茶ですよ。気持ち嬉しいですけど」

彼女は、一条の光明が射したように思えた。だが、ユヅルの言葉を完全に信じられずにいる。

「俺の予想が正しければ、不可能じゃない。もっとも、リスクとリターンを天秤にかければ、リスクのほうに大きく傾くだろうけどな」
「それじゃ、やっぱり」

「何、弱気になってる。お前は、ようやく、自分の心と向き合ったんだろ。だったら、そんなくだらない言葉よりも先に、もっと大事な言葉を口にするべきだろ」

タバコの煙を吐き出しながら、彼は何気なく口にする。口にして
いる内容が、途方もないことだというのに。

「助けてください」

「聞こえねえよ」

「私を、助けてください」

大きな声で、彼女が口にすると、頭を軽くユツルにたたかれた。
そして、頭をたたいた張本人、ユツルは立ち上がり、
「任せろ」

短く、それでいて、優しい声で彼女に答えた。

時刻は午後十一時五十五分。

儀式の開始まで、残り五分を切っていた。

生賢と夜2（後書き）

次こそ、VS神様のはず

生賢と夜3（前書き）

神との対面

生贄と夜3

「そんじゃ、始めるか」

「はい」

ユヅルに返事をした後、金属片を飲み込む力ナミ。するとすぐに、彼女は苦しみだし、その額に、金属片が集まり、橙色の勾玉を形成する。

「ほう、我が前に現れる不遜なやからがいると思ってみれば、貴様か」

「俺のこと知ってんのか？」

「この小娘の目を通じ、見ておったからな。勿論、先ほどの茶番も見ておったぞ」

力ナミの口を通じてでてきた言葉は、既に彼女の言葉ではない。

神、彼女の中にいた存在の言葉となつてしまっていた。

「なるほどね、余計な手間が省けて結構。そんじゃ、悪いが、いくつか俺の質問に答えてくれ」

「よかるう。だが、良いのか、我がこの娘を食べ終わるまでの時間は、およそ半刻。小僧、貴様に、そんな余裕はあるまい」

「別にそんな心配いらねえよ。むしろ、あんたとしては、好都合だろう？」

「食えぬ奴め」

自分を殺す算段をしていたものが、目の前で貴重な時間を無駄にしている。それをいぶかしげに思う彼女だが、ひと時だけ、ユヅルに付き合うことにする。

「一つ目、あんたの名前は？ 別に名乗りたくなきやいいけど、こっちとしては呼称ぐらい聞いとくのが、礼儀だろ？」

「我は、『クシミタマの巫女』。そう、貴様ら人間には呼ばれている」

あっさりと答えてくれたので、拍子抜けしてしまうユヅルだが、

彼の記憶に、そんな名前の神は存在していない。

「聞いたことねえな。二つ目、あんたが食事を終えた後、生贄はどうなる？」

「むろん、半刻で死ぬ。すぐに殺してやつてもいいのだが、生贄が我に食われたことを、周囲の人間に知らせるには、その程度の時間は必要だろう？」

「なるほど、見せ付けてから殺すわけか」

随分と悪趣味な神様だな

「そんじゃ、三つ目、あんたが生贄を要求する理由は？ 昔、何かしらあったんだろ。そいつを聞かせてくれ」

「理由、理由？ これはつまらぬ事を聞く」

「いいから、勿体つけずに答えろよ」

「そんなものは、あるはずもない。我は神、貴様ら人間にとっては、崇め、恐れる存在。むしろ、我は生贄を要求した覚えなどない。昔、人間共が勝手に捧げてきたから、仕方なく食ってやっている。そんなところだ」

この問いに対する答えは、彼にとって予想の範疇にあった。

やっぱり、そういうパターンかよ

人間は未知の存在に、非常に弱い存在。それが、自らと異なる力を持っていれば尚更。その相手が脅威となつて襲ってくる前に、下手に出てしまうのは、どの国でも変わらない。

「次、生贄を捧げるのをやめたら、あんたはどうする？」

「無論、勝手に食わせてもらう。貴様たち人間が、生贄として捧げているから、多少、我慢してやっているだけのこと。それがなくなれば、好き勝手にするのは当たり前のこと。むしろ、我は、他の連中と比べれば慈悲深い存在であろう。捧げられたものしか食ってはいないのだから」

「さいですか」

結果として、生贄を捧げようが、捧げまいが、かわらない。神は、身勝手な存在。それを知っていながらも、ユヅルはため息をついて

しまう。彼らは王とは違う。王とは、民がいて初めて存在できるが、神は、人がいなくても存在できる。

「ふむ、存外、抵抗するな、今回の生贄は」

「そりやそうだろ、そいつは、今までの生贄と違って、正しさの奴隷じゃない。馬鹿、だからな」

彼にはわからないが、カナミは自分の精神が食われることに対し、少なからず抵抗しているらしい。それを聞いて、ユヅルは微笑する。「そんじゃ、最後の質問。あんた、今まで人間に対して、恐怖って感じたことはあるか？」

「ないな。むしろ、なぜそのようなことを問うのか、我にはそのことが疑問だ。貴様は、道端の石ころに恐怖を感じるのか？」

その言葉を聴いて、ユヅルは嬉しくなったのか、声を上げて笑ってしまう。終いには、腹を抱えて苦しそうに。

「そうか、うん。いや、想像してた答えどおりで安心した。いや、まさか、ここまで予測の範疇から出ないと、笑うしかないだろ」

「何がおかしい、人間」

いらだってきているのか、彼女の言葉にはすぐにわかるほど、棘がある。

「なら、初体験って奴だ。相手が俺なのが、少し可哀想だが、そいつは勘弁してくれ」

「我を馬鹿にしているのか、人間」

「いや、馬鹿にはしてねえよ。ただ、哀れんでるだけだ」

その言葉と同時に、世界は一変した。

儀式が執り行われている本堂から離れ、母屋で勲は物思いに耽っていた。

「ここにいらつしゃいましたか」

そんな彼に声をかけてきたのは、風呂上り、浴衣姿のクロードル。

「隣、失礼いたします」

声をかけ、勲の隣に腰を下ろすクロードル。その姿は、妙に色っぽく、普段の彼なら、鼻の下を伸ばしているところだが、今は違う。孫娘のことで頭がいっぱいの彼は、それどころではない。

「ユヅルに、仕事を頼んだようですね」

「奴に、聞いたのか？」

「いえ、失礼とは思いましたが、立ち聞きさせていただきました」

そう、彼女は、二人が離れでしていた会話をすべて聞いて、記憶している。

「安心していただいて大丈夫ですよ。あいつには、我々も手を焼いてはいますが、実力だけは、私が保証します」

確かに、彼女の言葉は、今の勲にとっては心強い。だが、相手は神。相対できる存在を、彼の長い人生の中で、見たことはない。

「おそらく、勘のいいあいつのことです。私と同じ結論に至っていることでしょう。そうですね、あなたの心配事を消す為に、一ついいことをお教えしましょう。これは、本来、機密事項にあたるのですが、知っていていただいたほうが良さそうなので」

「聞くだけならば」

「あいつは、席次の十三。我々、異端審問局が抱え込んだ、諸刃の剣です」

そう口にし、彼女は楽しげな笑みを浮かべて去っていった。

生賢と夜3（後書き）

次回、神と決着をつけます

生賢と夜4（前書き）

神様もビックリ

生贄と夜4

「人間、貴様、何をした？」

「何をした？ おいおい、仮にも神様なんだから、それぐらいすぐに理解しろよ。ついでに言っておくと、まだ、何もしてねえよ。今からするけど」

彼女は、空気が一変したことにいち早く気づいたが、それが何を持って変化したのかは理解できていない。そんな彼女を愉快そうに見つめながら、彼は呪詛をつむぐ。

『アーカイバ
無限書庫へのアクセス開始』

第二六九幻想領域座標固定

並びに、封殺結界を固定座標に接続

執行官権限により、厳重封印指定の十三を開放』

「さあ、踊ってくれよ、神様」

それは勝利を確信したものが、敗者を嘲笑する為に放つ言葉と、同じ響き。

次の瞬間、彼女の違和感は現実のものとなる。

彼女の視界に映っているのは、先ほどと対して変わらない光景。だが、決定的に違う点が一つ。そう、カナミが映っている。先ほどまで、彼女は、カナミの目を通して世界を近くしていた。なら、カナミの姿を、己自身の姿を自分の目で見るはずなどない。

「馬鹿な、我を生贄の体内から引きずり出したというのか？」

「ご名答。まあ、厳密に言えば、完全に引きずり出したわけじゃないが、同じようなもんだろ」

驚愕の次に沸きあがってくるのは、怒り。自分の食事を邪魔した者への、自分を嘲笑する者への。

「人間、貴様、無事で済むとは思っていないだろうな？」

「上から視線はやめておいたほうがいいぞ。ここは既に、俺の領域。あんたが神様だろうが、この中じゃ、関係ない」

「ぬかせ」

そうして彼女は力を行使する。

神通力。

人間に力を貸し与えるとき、神の力は劣化してしまう為、このような言葉で度々口にされる。しかし、現在の彼女は人間に力を貸しているわけでも、体内にいるわけでもない。故に、本来の力を振るう事ができる。その力は、映画やドラマなどのフィクションではない。現実の力。人間からしてみれば、魔法という言葉が、一番しっくり来るかもしれない。

だが、彼女の力がなぜか発動しない。

「貴様、一体何をしたっ」

「少しは自分で考えろよ、神様」

相手を小馬鹿にしたように、ユヅルは笑みを浮かべる。それが、彼女には非常に気に食わない。すぐにでも、殺してしまいたい。そう思いながら、力をこめるものの、肝心の力はまったく発動の兆しすら見せない。

「どうした？ 立ってるだけじゃ、俺は殺せないぜ、神様」

「ふん、それは貴様とて同じこと。もうすぐ半刻経つ。生贄を助ける時間はもうないに等しいぞ」

「ああ、そいつはもう心配ない」

彼女は切り札をちらつかせるが、ユヅルはそれに対してほぼ無反応。それが、彼女の違和感をより大きなものへと、膨らませていく。「これだけヒント出してやってるのに、まだ気づかないのか。なら、出血大サーブスだ。俺のじゃねえけど」

いつの間にか、彼は右手に刀を握っていて、それを振るう。刃は、彼女の頬をうつすらと切り裂き、再び鞘へと戻る。

「血、だと。我が、血を流しているだと」

彼女の声は今度こそ、驚愕していた。そして、彼女が今まで抱い

ていた違和感の正体をようやく理解する。

「まさか、貴様っ」

「ようやく理解できたみたいだな。答えあわせだ。あんたが考えているとおり、俺の領域内では、俺が拒絶したものは、すべて否定される。それが、時間だろうが、神だろうが、関係ない」

「馬鹿なっ、そんな神の領域に足も踏み入れることのできない人間が。できるはずがない」

「ああ、当然、俺一人の力じゃ無理だよ」

そう、ユヅルが話していることが本当だとすれば、彼女が力を使えなかったのは当然。そして、この領域の中であれば、神であるはずの彼女を殺すこともできる。

「俺は、魂吸収者^{ソウルアブソーバー}って、呼ばれる能力を持つてる。そんで、俺が手に入れた魂の力を使って、この領域を形成してる」

魂吸収者。

それは、異端審問局でも存在を完全に肯定できなかった、異能力。この能力を有するものは、自身の魂以外に、他の魂を己の体内に取り込み、その力を自由に行使することができる。そう、彼らの力には個人差があり、能力者によって発現する力が違う。一概に、結果をはじき出すことができない。不確定要素が多い能力なのだ。「さあ、ようやく自分の愚かさに気づいたようだな、神様。なら、次は、立場って奴を理解してもらおうか」

『 嚴重封印との魂接続開始

肉体および魂の封印を開放

物理的干渉および精神的干渉に異常なし 』

「こうやって、いちいち名乗りを上げるのは、どうも慣れないが、折角だから、あんたには自己紹介をしておくよ。異端審問局所属、異端殲滅執行官、階梯^{エントラック}、第七階梯、席次は十三、与えられた称号は『死神』。これが、俺、ユヅル・ハイドマンの肩書きだ」

淡々と口にする彼だが、その表情はとても楽しげ、そして、彼は最後に決定的な一言を口にする。

『 起きろ、もう一つの俺の魂

悪魔皇イレイザー

』

それは、異端審問局に所属するものが、決して口にしてはいけない言葉。その言葉を放つのとほぼ同時、彼の体は銀色に光に包まる。光が収まると、そこに立っていたのは、変貌を遂げたユヅル。黒髪は、銀へと色を変え、獅子の鬣を連想させる長さに。黒の法衣を纏い、右と左、両方の腰にはそれぞれ三本の刀、背中には身の丈ほどの大きな刀。そして、彼の右頬には、蛇の刺青が出現していた。

「悪魔、だと」

この答えだけは、彼女も予想していなかった。信じるものは違えど、彼もまた、神を信じるものに違いないと、異端審問局に所属しているだからと、彼女は勝手に、彼のことを決め付けていた。だが、結果は違う。目の前にいるのは、紛れもなく、悪魔の力を有した、人間ではないなにか。

「ああ、俺の魂の在り方に最も近く、欲しかった力を持つてたからな。殺して、その魂を吸収した」

その言葉を、彼女は信じるわけにはいかない。悪魔、言い方は違えど、在り方は違えど、似たような存在を殺した。その言葉を、信じるわけには、決していかない。

「どうして、こんな話してる余裕があるのか、理解してるか、神様？」

右手を刀の柄へ移動させながら、歌うように彼は口にする。

「簡単な話、勝者の余裕って奴だ。おっと、卑怯とか、いまさら陳腐な言葉を使うなよ？ 俺はきちんと、あんたにも、チャンスをやったんだからさ」

「機会だと？」

「ああ、俺の長話になんて付き合わずに、俺をあの場合ですぐに殺していれば、今、あんたは、俺の死体を肴に、勝利って酒に酔っててもおかしくなかった。それをしなかった。それが、あんたの敗因だ。余裕見せ付けて、人間見下してるからそうなるんだよ」

「たかだが、力を手に入れた人間が偉そうに」

彼女は侮蔑の言葉を吐くものの、彼の心にはそよ風ほども波風が立たない。

「その力も、汚いまねをして手に入れたのだろうか」

「ああ、そうだよ。策をめぐらすことに、何の躊躇いがある」
彼女の侮蔑を賛辞として受け取り、さらに彼は続ける。

「卑怯、汚い、そんなものは戦場じゃ褒め言葉でしかない。自分よりも強い相手が敵なら尚更。殺し方に、勝ち方に美学を求めるなんて三流以下。力を誇示したいだけの馬鹿がプライドひけらかすようなもんだ。どんな手段を使おうが、誰に罵られようが、生き残った奴が勝者だ」

ゆっくりと刀を抜き放ち、その切っ先を彼女の喉元にユヅルは突きつける。

「貴様がやっていること、我と何が違う」

「違わねえよ。俺も、わがままなんですね。まあ、そうだな、一番近い言葉があるとすれば、同属嫌悪って奴だ。そんじゃ、精精、苦しんで死ぬ」

「待て、貴様は抵抗もしない我を、殺すというのか」

「ああ」

珍しくも命乞いをする彼女に対して、ユヅルは即答。

「さっき言っただろ、俺と魂の在り方が似てるって。悪魔に命乞いなんてしても、意味なんてない」

そして、彼は、氷のような冷たく鋭い瞳で、

「あんたは、今まで何人も食ってきたんだろ。それが、自分の番になっただけだ。命乞いをする前に、自分の行動を振り返るべきだったな。あんたがもし、少しでも、善行を人間に施したって、嘘

でも口にしてたら、少しぐらいためらう振りをしてやっただろうよ」

刀の切っ先を、彼女の喉に押し込んだ。想像を超える絶叫。今まで、彼女が味わったことのない痛み。刀を引き抜くと同時に、赤い血が噴出し、彼女はそれを抑えようと両手を伸ばすが、その両腕は彼の刀によって床に縫い付けられてしまう。そして、次の彼の行動によって、彼女の表情は、生まれて始めて恐怖に凍りつく。ユヅルは、自由の利かない彼女の左手を両手で取り、小指から順番に、その爪を剥いでいく。ただでさえ、喉の傷、両手の傷で致命傷。それなのに、目の前の少年はそれ以上の傷を、彼女の肉体と心に刻み付けていく。

「我が、我がいったい、貴様に対して、何をしたという」

「うん？ 何もされてないよ、俺は。ただ、あんたが食ってきた人間の肉親は、これよりも痛かったんだと思うんだよな。だからさ、少しは、その痛みも勉強してから死ね。爪の次は、皮を剥いでいく。その次は目を抉り出し、臓器を一つずつ取り出していく。ああ、途中で死ねると思うなよ。全部終わるまで、お前が死ぬことを、俺は拒絶し続けるから」

日常会話のように口にするユヅル。それが、彼女の精神をこの上ないほどに壊していく。

「おわったぞ、馬鹿女」

元の姿に戻り、力の痕跡すら消した彼は、カナミの頬を軽くたたき、彼女を起こす。

「えっ、本当に終わってたんですか？」

「ああ、終わった」

彼は床に腰を下ろし、タバコにマッチで火をつける。そんな彼に対して、カナミは、正座し、頭を下げる。

「ありがとっ、ございました」

その言葉は、震えていた。だが、それは恐怖ではなく、明日を迎えられる、日常に戻る喜びによって。

「頭上げる。それで、礼なら、ジジイに言え。俺は仕事を請けて、それをこなしたただけだ」

「でも、実際に助けてくれたのは、あなたです」

「尚も食い下がってくるカナミに対して、

「ユヅル」

「えっ？」

「俺の名前はユヅルだ、これから不本意だろうが、一緒に生活するんだ。あなたなんて、他人行儀な呼び方するんじゃないよ」

「つまらなそうに彼は口にする。それが、よほど予想外だったのか、彼女はキョトンとしている。」

「なら、私も、お前じゃなくって、カナミです。神宮寺は三人いるので、名前をきちんと覚えて、名前で呼んでください」

「面倒だな」

「今、何か言いましたか？」

「腹減ったっていったんだよ。恩義を少しでも、かすかにでも感じてるなら、上手い飯でも食わせる。それで、貸し借りなしだ」

「そう口にして立ち上がるユヅル。そんな彼に対し、

「はい」

「元気良く、カナミは返事をして立ち上がった。」

そして、その後、ユヅルにダメだしされ、彼の舌をうならせる為、学校生活で、お弁当を作り続けることを決めたカナミだった。

生賢と夜4（後書き）

ようやく、複線を少し回収。

次から、再びラブコメに戻ります。

ショッピングです1（前書き）

お買い物です。

そして、ギターがいっぱいできます。

ショッピングです1

「あれっ？ 出かけるなんて珍しいですね」

「人を引きこもり、ニートだっけ？ みたく言うんじゃないよ」

天気の良い日曜日。

玄関で靴を履いている私服のユヅルを見て、カナミは思わず声をかける。

「ほら、俺、軽音楽部に入ってたって説明したろ」

「ええ、その他にも手芸部と創作部に入ったことをきいています。

勿論、料理部にそのせいで入れなかったってことも」

恨みがましくカナミにいわれ、ユヅルはどう答えていいものか悩んでしまう。結局、三つの部活動に参加することになってしまったユヅルは、料理部に入ること拒否。さすがに四つも部活動することは、不可能に近い。そのことについては、きちんと説明したので、カナミは納得したものだ、ユヅルは思っていたのだが、どうやら違っていたらしい。

「その件については、きちんと説明しただろ」

「ええ、説明を受けましたとも」

「はあ、まいあいいや。それで、軽音楽部に入っただいいが、俺、自分のギター持ってねえんだよ。だから、今日は楽器屋に行くんだよ。なんか、この説明もしたきがするな」

靴を履き終えたユヅルは、朝からため息をつきながら、出て行くうとするが、そのとき、カナミに一枚のメモを渡される。

「なんだ、これ？」

「帰りにお買い物をお願いします。今日は、おかあさん、高校の同窓会に行つて、夜は遅いんです」

「それはわかったが、これは？」

「だから、今日は私が腕を振るうことにしました。そこに書いてあるのは、夕飯に必要な材料です」

その言葉を聴いて、彼の気分は朝から重くなる。料理部に所属しているものの、カナミの料理の腕は、素人と大差ない。むしろ、素人のほうが上手く作れるかもしれない。要するに、努力で才能の穴を埋めるには、時間が足りなすぎるのだ。それで、彼は日ごろ、強引に持たされている弁当を回避し続けている。しかし、それが家での食事となれば別。逃げ場はない。

「わかったよ」

「いつてらっしゃい、ユヅルさん」

メモをジーンズのポケットに押し込み、ユヅルは家を出る。

処刑台に上らされる死刑囚みたいな気分だ

駅前に着いたユヅルは、その、人の多さにげんなりするが、目当ての人物を見つけたので、わき目も振らずに近づいていく。

「悪い、少し待たせたか？」

「いえ、僕もいま来たところです」

頭を軽くかきながら、ユヅルが声をかけたのはアキタカ。同じ軽音楽部で、彼の予備のギターを使わせてもらっているので、選んでもらうのを手伝ってもらうことにしたのだ。

「本当に、僕なんかでよかったんですか？」

「分けわかんない奴だな、お前以外に誘うようなメンツいないだろう？」

「えっ、でも、校内新聞だと、天禅寺の女神三人と仲がいいって」

「女神ねえ」

二人は歩きながら、何気ないことを口にし、楽器屋へと向かう。

そして、楽器屋に足を踏み入れた二人だが、

「そういえば、ユヅル君は、どんなギターが欲しいんですか？」

「えっ？」

彼の不用意な発言が、アキタカの体を完全に凍らせてしまう。

「ちよっと待つてください、気持ちの整理をつけますから。確認しておきますけど、ギターを買いに着たんですよね？」

「ああ、そうだよ。って、ギターって、こんな種類あるのか？」

「まさか、テレキャスにSG、ファイヤーバードにムスタング、フ
エンダーやミュージックマンも知らないとか？」

「種類多いなあ」

「嘘でしょう？ さすがにルシールぐらいは知ってますよね？」

「知らない」

その一言を聞いて、アキタ力は絶句。チューニングも、弦の張替
えもできるのに、ギターの種類をここまで知らない人間だとは、さ
すがの彼も思っていないかった。だが、当の本人はそんなことにせ
ずに、店内を歩き回り、楽器とにらめっこを開始する。

「よさそうなのがあつたら、弾いても大丈夫ですよ」

シヨックから立ち直り、彼を見つけたアキタ力。しかし、彼の視
線の先にあるギターを見て、再び言葉を失う。そこにあるのは、俗
に言う痛ギター。アニメやゲームのキャラクターがプリントされて
いるギターである。

「さすがに、それは、勘弁して欲しいです」

「俺もさすがに、あれを人前で弾く度胸はねえよ。ただ、なんか、
見覚えのある絵だったから、気になっただけ」

「そうですよね、ハハハ」

渴いた笑いを口にしながら、胸をなでおろすアキタ力。そして、
ギターを見て回ることに、およそ三十分。

「そういえば、お前の予備のギターって」

「ああ、あれは中古で買ったムスタング。ちなみに、愛用している
のは、SGです」

「なるほどね」

そう口にしながら、彼が手に取ったのは、白のボディにピンクの
ラインが二本入っているムスタング。しばらく、ギターを見つめて
いた彼だが、決心したのか、構えて、近くにあるアンプとつないで、
いきなり弾き始めた。勿論、店内には二人以外にも客がいるわけだ
が、そんなことはお構いなし。自分の思うまま、指が動くままに弾

き続ける。

「やっぱりだ」

「そのギター、気に入ったんですか？」

「ああ、最初、不安だったんだけどな。弾いていて、確信が持てた」
「でも、そのギター、高いですよ？」

値札がギターの置いてあったところにも、ギター自体にもつけられていないところを見れば、アキタカの経験上、相当な値段がする。
「アンプはあるから、あとはエフェクターか。でもさすがに、部活の備品を使い続けるのも微妙だな。とりあえず、アンプも一台探したくか」

「いや、ユヅル君、人の話を聞きましょうよ」

しかし、ユヅルは結局そのまま、ギターと、新たに選んだエフェクターを二つ。レジへと持って向かう。

「おっちゃん、これくれ」

そう言って、無造作に、ただ、ギターだけは丁寧にレジカウンターに置くユヅル。店員は、彼と商品を交互に一度見たあと、無言でレジを打ち始める。

「アンプ一台に、エフェクター二つ、ギターを含めて、六十万飛んで、六千二百円になります」

「宅配サービスって奴を、利用したい」

「では、こちらに住所の記入をお願いします」

言われるがまま、ユヅルは現在の住所をボールペンで書いていく。

「それで、お会計ですが」

「ああ、引き落とし一回で」

財布のチェインをもって、引っぱり出した彼は、その中のカードを一枚抜き取り、レジに置く。しかし、そのカードを見て、店員は絶句する。彼が置いたのは、LEGENDのロゴが入ったカード。このカードは限度額無制限で、この会社の重役、その親類、もしくは友人のみが持てる。そして、そのせいで持てる人間が非常に限られているカードである。

「あん？ ひょっとして、カード使えなかつたりするのか。それだったら、銀行から下ろしてくるけど」

固まっている店員を不審に思い、ユヅルが声をかける。

「だっ、大丈夫です。使えます、使えますとも、はい」

その声でようやく意識を取り戻した店員がレジをたたき、署名を求めてくる。それに、慣れた手つきで、きちんと英語で記入するユヅル。

「本当に、常識が通じないんですね」

口にしたアキタカは、若干あきれていた。

ショッピングです1（後書き）

人目を気にしない彼なら、使いこなせるはず。

当然のように続きます。

ショッピングです2（前書き）

会話メイン。

中間管理職は心配事がつきません

ショッピングです2

「さてと、これからどうしたもんかな」

「じゃあ、カラオケにでも行きますか？」

「別にいいけど、お前音痴じゃなかったっけ？」

本来であれば、買い物にはもう少し時間をかけるはずだったのだが、すんなりと終わったので、ユヅルとアキタカの二人は、ハンバーガーショップで時間をつぶしていた。もっとも、ユヅルはタバコを吸っていたが、アキタカはそれを注意することをしない。

「じゃあ、神宮寺さんや雨竜さん、春日野さんを誘ってみたらどうですか？」

「別に誘ってもいいけど、連絡先、俺、知らないぞ」

「えっ？」

その言葉を聴いて、アキタカは目を丸くする。

「ユヅル君、携帯持ってますよね？」

「ああ、持ってるよ」

「何で知らないんですか？」

「うん？ それって聞いたくものか？」

「聞いておくものですよ、普通。じゃあ、携帯に誰のも入って事ですか？」

「いや、お前のと、シンゴにリュウイチ、後、ツヨシにアツヤの番号は入ってるよ」

「軽音楽部の人間だけじゃないですか？」

「まあ、そうだけど、そんなに不思議がるもんか？」

あれだけ親しげに接している三人の連絡先すら知らない。そんな彼の鈍さに頭を抱えなくなってきたアキタカだが、そんな時、ちょうど取り出していたユヅルの携帯が震える。

「はいはい、どちらさん？」

「私ですけど、そちらは変わりありませんか？」

「その堅物口調は、エカテリーナだな。でも珍しいな、あんたから電話してくるなんて。俺、なんか面倒ごと起こしたっけ？」

電話の相手は、エカテリーナ・フォルダン執行官。しかし、そんなことを知りもしないアキタカは、英語の会話に興味津々。

「あなたが面倒ごとを起こすのはいつものことです。そんなことでわざわざ、あなたに連絡したりはしませんよ、私の場合」

「それもそうだな、じゃあ、用件は？」

「今夜、そちらの時間であれば午後八時ジャストの便で、羽田に到着する予定です。それで、できれば、迎えに来て欲しいのです」

「へえ、どういう風の吹き回し？」

「もともとは、あなたに原因があるのですよ、ユヅル」

「どういうこと？」

残念ながら、普段どおりと彼女が言うのだから、ユヅルに思い当たる節は一つもない。ましてや、多忙な秘書官が動くような事件など、起こりようもない。

「報告書を提出しましたよね？」

「ああ、だって、あれを提出しないと、きちんと報酬が口座に振り込まれないだろ」

「ええ。そこに問題はないのですよ。あなたが何を考えて仕事を請けたのか、私は知りません。ですが、自発的に仕事をしましたよね？」

「確かにしたな」

思い当たるのは、平目組を壊滅させた際に提出した報告書。しかし、それほど珍しいことなのだろうか。そんな疑問を持っていると、「それで、局長が、何かしらの心境があつたのではないかと。そうであれば、一度顔を見に行きたいとおっしゃいまして」

「止めたんだよね？」

彼女の行動が予測できたユヅルは、結論付けて言葉を口にする。

「ええ。それで、局長の代わりに、私が行くことになりました」

「なるほどね、大体の事情は理解した。でも、それってメールで済

むよな？ 何でわざわざ電話？」

「そうですね、時間もありませんし、本題に入ります。実は先日、空席だった席次の十二が、急遽決定しました」

その言葉を聴いて、一瞬、彼は体をこわばらせる。

「まさか、正気か？」

「そのまさかです。察しがよくて助かります。席次の十二は、あなたのところへ向かっています」

「勘弁してくれよ。ここ、そっちほど無茶できないんだぞ？」

「わかっています。ですから、なるべく早く、私もそちらに向かいます」

そう口にして、エカテリーナは通話を一方的に切る。

「はあゝ」

携帯を上着のポケットにしまったユヅルは、その場で大きなため息をつく。

「どうかしたの？」

「ちよいと面倒ごと。悪いけど、カラオケは今度にしてくれ。これから、面倒ごとをかたしてくる」

そう言って、自分のトレイを持って立ち上がるユヅル。

「ああ、うん、じゃあ、また明日」

「ああ、じゃあな」

そういえば、ああいうのを友達と呼ぶのか？

これから行動を起こす割りに、他愛もないことを考えながら、彼はタバコの火を消した。

ショッピングです2（後書き）

次回、新キャラ登場。

ちなみに、彼の携帯には、神宮寺家の電話番号すら入っていません

魔弾の後継者1（前書き）

執行官VS執行官

はじまります。

魔弾の後継者1

「本当に、あれが席次の十三？　いつでも殺せるぐらい、平和ボケしてる、一般人にしか見えないんだけど？」

建物の屋上、スナイパーライフルのゴーグル越しに、ユヅルを見つめながら、少女はつまらなそうに声を上げる。

「信じられなければ、信じなければいい」

「なに、あんた、生意気なこと口にしてるわけ、情報屋」

「受け取った分の料金に見合う仕事は、きちんとしたつもりだよ。それでも気に食わないというなら、彼を殺した後、僕も殺せばいい。なに、君なら簡単だろ？」

少女は、情報屋と名乗っている通話相手を、耳のイヤホンを外すことで無視することにする。

情報屋。

素性はまったく知らないが、金さえ払えば、迷い猫の情報から、国家機密すら手に入れる凄腕。そう聞いていたから、少女は、依頼したのだ。これが、間違いであれば、すぐさま殺しにいくと思いつながら、再び、少女はゴーグル越しに獲物を睨みつけ、

「お手並み拝見といきましょうか、席次の十三。せめて、逃げて、逃げて、命乞いさせるまで、生きて、お会いしましょう」

「しつつかし、どうしたもんか」

ガードレールに腰を下ろし、タバコの煙を吐き出しながら、ユヅルは空を仰ぐ。今回、席次の十二、この椅子に座った人間が、誰なのか、彼には皆目検討も着かない。ただ、以前、この椅子に座っていた人物は、非常に温厚だったことだけは覚えている。

「面倒なことになってきたな、まったく」

愚痴をこぼしながら、ユヅルはタバコを投げ捨て歩き始めるが、次の瞬間、彼の目の前にあった建物が、爆音と共に火と煙を吐き出した。火の手が上がっていることから見て、爆発が起きたのは、建物の二階。周囲の混乱が起きるのは必然。あたりには火災報知機の音が鳴り響き、視界も悪い。

そんな中、彼は頭に衝撃を受けて、体制を軽く崩す。その場所に手を伸ばしてみれば、又メリとした血の感触が伝わってくる。

えげつないことするね、まったく

おそらく、この、建物を爆破したことも、周囲の混乱も、彼を襲撃する作戦の一部なのだろう。日本だから、世界一治安のいい国だから、そんな常識の通じる人間が、異端審問局に所属しているわけがない。彼らはエゴイスト。自分の目的を達成する為には、己のエゴを貫く為なら、周囲の被害など気にしない。究極にはた迷惑な連中。それを、この、暖かい場所での生活で、ユヅルは失念していたらしい。

「間抜けは俺のほうか」

自重しながら、新しいタバコに火をつけ、傷の手当をすることなく、歩き出した。

「馬鹿げてるなんてもんじゃない、殺しづらさ（ダイハード）。まさか、ライフルの一撃で死なないって、あいつ、本当に人間？」

自身の甘さを反省したユヅルとは対照的に、引き金を引いた側であるはずの少女は、狼狽している。少女自身、すぐに殺せるとは思っていないかった。ただ、ライフルの一撃を頭に受け、生きている相手に対して、どう対処すべきか。問題となってしまうたのは事実。

「情報屋、きこえてる？」

「うん、聞こえてるよ。それにしても、さっきの爆発は君の仕業かな。ここは君のいた国とは違うんだから」

「うるさい、それよりも、あいつがあんな化け物だなんて聞いてないわよ」

相手のたしなめる言葉を、強引に打ち切り、ライフル片手に少女は立ち上がる。

「おや？ それぐらいのことを知っていて、君は動いたんじゃないのかい？」

馬鹿にしてる。そんなことは、私だって知ってる

しかし、人づての話を聞いただけの少女は、動揺を抑えられない。ユヅルのことは、彼が日本に渡ってから、度々、異端審問局で話題に上がっている。だが、その中で、彼の武勇伝が上げられるたび、少女は、どうせ、そんなたいしたことじゃない。そう、心の中でさげすみ、鼻で笑っていた。だが、彼女は実際に自分の目でそれを確認してしまった。

「だいぶ苛立っているみたいだね。作戦は、冷静に実行しないと、成功率が確実に下がるよ？」

「うるさい」

「席次の十二、ああ勿論、君の前の人だけど、あの人は、いい人だったよ？」

「うるさい」

前任者のことを引き合いに出され、今度こそ少女は、通話を終了させる。そう、携帯電話を床に叩きつけて。

時刻は午後四時を回ったところ。

一度目の襲撃以降、自分の存在を餌に、相手を釣ろうと、町を目的なしに歩き回っていたユヅルだが、当てが外れたらしく、ため息をついて、公園のベンチに腰を下ろした。

簡単に諦めるような奴なら、楽だが。さすがに、そんな根性なしが執行官にはなれないしな

襲撃者の正体がわからず、釣ることもできなかったユヅルに残されている手段は、待つことだけ。ただし、リミットは残り五時間。エカテリーナが羽田に着くのが、八時。それからこの町に到着するまで、およそ一時間。それまで逃げ切ることができれば、彼の勝ちは確定する。むしろ、襲われているくせに、彼が負ける要因のほうが少ないという現状。

「でもそれじゃ、つまんねえんだよな」

リターンよりもリスクを、安穩よりも恐怖を、日常よりも、非常を。

現在、狩られる側に回っているはずの彼は、間違いなくこの状況を楽しんでいた。そして、あえて安全策を取らずに、危険地帯へ足を踏み入れる。それが、彼の欲望であり、本能であり、磨き上げられて牙。

そんな時、ふと彼の視界に入った建物が砂煙を上げながら崩れていく。しかし、先ほどと違って、別方向からの攻撃が来ない。

誘ってる、ああ、招待状代わりか

彼を襲撃した相手は、先ほどの襲撃で、彼の特性を大体掴んでいるはず。なら、他人を容赦なく見捨てる彼にとって、他者を痛めつけたところで意味がない。逆に、行動したことにより、自分の場所を、教えている。そう、彼は判断する。

「さて、お手並み拝見させてもらっぜ、席次の十二^{ルキー}」

魔弾の後継者1（後書き）

間に合うのか、エカテリーナ？

魔弾の後継者2（前書き）

トリガーハッピー

魔弾の後継者2

そこは、何の変哲もない倉庫。

ブービートラップを警戒しながらも、目の前に目的の人物が現れたことを確認し、ユヅルはタバコに火をつけた。

「はじめまして、あんたが新しい席次の十二？」

「人を、誰かに与えられた記号で呼ぶな」

気さくな挨拶を心がけたつもりユヅルだったが、どうやら彼女の気分を害してしまったらしい。

「私には、レベッカ・サウザードという、母親からもらった大切な名がある」

以外にも自分から自己紹介をしてきたレベッカに対し、口笛を吹き、

「そうか、そんじゃ、俺にもユヅル・ハイドマンっていう、名前がある」

軽口で答えた彼に対する返答は、銃声。彼女の両手に握られている拳銃。その片方、右側から紫煙が立ち上っている。

「あのさあ、それは、ガキが気軽に使っていいものじゃねえんだぞ。第一、銃声聞きつけて、警察が着たらどうするつもりだよ、お前」

「だまれ、貴様と談笑するつもりなど私には、毛頭ない」

怒りと同時に、左側の銃も彼に向け、レベッカは言い放つ。

「そっか、なら、一つだけ答える。お前、何がしたいんだ？」

「大方察しがついているのだろう」

「俺は、確信が欲しい。そんなわけで、お前の口から直接、聞いたんだよ」

「私は、お前を殺しにきた」

予想通りの答えを聞いたので、ユヅルは顔に微笑を浮かべる。

「俺をすんなりと殺せないことは、学習済みだよな。それでも、俺を殺すって言うてるんだ。何かしら、策ぐらい用意してあるんだよ

なあ？」

「それは、お前が死んで確かめろ」

「そうかい、じゃあ、最後に一つだけ、礼をいっておく。俺をぬるま湯から出してくれて、ありがとうな」

銃を構えている相手に無防備に歩み寄りながら、彼は場にそぐわぬやさしい声で、レベルカに語りかける。

「もういいから、黙れ、化け物」

彼女はそう口にして引き金を引く。狙いは、当然のように額。それを受けたユヅルは、流血し、体制を崩すものの。死んでいない。レベルカが手にしている二丁拳銃は、彼の持っているオートマグと違い、現在、世界最強と名高いデザートイーグル。その50AE弾を受け、傷だけですんでいるのだから、彼女の言葉はもっとも。

「これが、お前の用意した、策か？」

侮蔑するのではなく、嘲笑するのではなく、何気ない口調で口にするユヅル。そんな彼に対して、彼女は何度もその場で引き金を弾き続ける。撃鉄が、甲高い金属音を上げるまで。それまでに彼が受けた弾丸の数は、二十二発。一般人であれば、死ぬところではなく、跡形もなく消し飛ぶか、肉片に変わっていてもおかしくない。それでも、彼は生きている。傷は負っているものの、自らの足で、崩れることなく立っている。

「化け物がっ」

吐き捨て、彼女は弾丸の尽きたはずの拳銃を、弾層を変えることなく、引き金を引く。突如として響く轟音。そして、初めて、この場で膝を着くユヅル。

「さすがに、化け物レベルの耐久力を持っても、これは効くらしいな」

「ははっ、『魔弾』とは、あの人と能力まで同じかよ」

「あいつのことを、口にするなあ」

そして、彼女は引き金を弾き続ける。先ほどと違うのは、ユヅルが弾丸を受けるたびに、大きく体制を崩し、その場から動いていな

いこと。

魔弾。

正式な能力名は、圧縮開放なのだが、異端審問局ではこの能力は、特にこう呼ばれている。原理は非常に簡単で、ただ物質やエネルギーを任意の大きさに圧縮し、対象に接触した瞬間に開放するというもの。ただ、この能力は、シンプルであるがゆえに、非常に応用が利き、殺傷能力も高い。先ほどから、ユヅルが受けているのは、おそらく、空気を圧縮した弾丸。威力を武器でたとえるなら、この魔弾は、バズーカクラスに相当する。

「踊れ、踊れ。さっきの余裕を後悔して、踊り続ける」

彼女は狂った笑いを浮かべながら、引き金を引き、ユヅルが地面に倒れ、そのまま動かないことを確認して、唾を吐く。

「ふっ、ははっ、はーはっは。これが席次の十三。ただの馬鹿の間違いだろ。私はこんなにも強い。相手が化け物だろうが、殺してみせる。なのに、私は十二、テメエみたいな奴の下に見られる。それは、きつと前任者が間抜けすぎたからだろうな」

声を上げてひとしきり笑った後、こみ上げてきた怒りをそのまま言葉にするレベツカ。しかし、

「おまえ、なんか勘違いしてないか？ 席次の十三は、十二よりも上って意味じゃねえぞ」

荒い息で立ち上がったユヅルを見て、忌々しげに目を細める。

「お前こそ、何言ってやがる。撃たれ過ぎて、頭までイカレたか？ 執行官の席次は、一が一番上で、次が十三、その後からは普通に数えて、十二は末席だろうが」

「そこから教えないといけないのかよ、骨が折れる」

彼女はユヅルの言葉を聴いた瞬間、引き金を引く。当然、衝撃を受けたユヅルは崩れ落ちるが、今度は膝を着くだけにとどまる。

「異端執行官の席次は、一から七までが万能型、八から十三までが特化型。それで、数え方は、万能型が一から、特化型が十二から。能力の使い方、戦闘スタイルで、席次が与えられるだけだ」

「なら、十三はどこに行った」

「その数字の意味を教えてやるよ、今からな」

シニカルな笑みを浮かべ、彼は呪詛を口にする。そう、神を蹂躪したときの言葉を。

☐
アーカイバ

無限書庫へのアクセス開始

第二六九幻想領域座標固定

並びに、封殺結界を固定座標に接続

執行官権限により、嚴重封印指定の十三

を開放

嚴重封印との魂接続開始

肉体および魂の封印を開放

物理的干渉および精神的干渉に異常なし

起きろ、もう一つの俺の魂

悪魔皇イレイザー

☐

魔弾の後継者2（後書き）

第四の執行官登場

数え方は

万能型が1、2、3、4、5、6、7

特化型が12、11、10、9、8

です。

魔弾の後継者3（前書き）

熱血。

拳で語ります。

魔弾の後継者3

銀色の光が周囲を包み込み、現れたのは変貌した姿のユヅル。

「それが、本性か、化け物」

「ああ、これが、席次の十三、『死神』の称号を与えられたものの姿だ」

嘲るのでも、愉悅に浸るのでもなく、ユヅルは淡々と告げる。

「さつきも言ったように、席次の十三には、特別な意味がある」

彼の言葉を待たず、引き金を引くレベツカだが、その弾丸は、先ほどまでと違い、ユヅルの肉体に到達していない。到達する前に、その存在を『拒絶』され、存在を保てずに消滅してしまっている。

「考えたことはないか？ キリスト教で、十三は忌むべき数字。異端審問局でも、それは同じ。だが、そんな数字を、第七階梯^{エンタク}のやつに与える理由を」

十三という数字は、キリスト教だけでなく、神を信奉する国にしてみれば、忌むべき数字。それは、かの救世主に集った、十三人の使徒、その中に一人だけ存在した、裏切り者を意味する数字に他ならない。

「わからないか、それとも考えてる余裕がないのか、どっちでもいい」

レベツカは、自身の力が、今まで磨き上げてきた牙が、彼の力に及ばないことを認められず、何度も引き金を弾き続ける。その銃声は、まるで、子どもが泣きじゃくるように、空しく、悲しく響き続ける。

「席次の十三は、執行官の中で特別えらいわけでも、優遇されているわけでもない。ただ、この数字が意味するのは、肅清。そして、味方殺し。席次の十三は、異端審問局に敵対する、外部勢力、内部勢力問わず、殺す。嫌われ者に与えられる数字だ」

ただ、淡々と事実だけを口にするユヅル。しかし、彼女の頭は、

その言葉を受け入れながらも、否定していた。もし、彼が口にしたことが本当だとすれば、彼は、執行官を単独で殺すことができるほどの戦闘能力を有していることになる。それを認めるということは、自分が、彼に勝てないという事実を認めることになってしまうから。「お前の前の、席次の十二、カイゼル・アルスラーンを粛清したのも、俺だ。ただ、あの人はお前とは違っていた。あの人は、自分の力を誇示することもしなかったし、席次に対して、そこまで強い執着を持っていなかった」

「あの男の名を、私と母を捨てた男の名を、口にするなっ」
その行為が、無駄だとわかっていながらも、彼女は引き金を弾き続ける。そんな彼女を、近寄ることもせず、ただ、ユヅルは見つめる。

「仇討ちでもなく、そこまで俺に執着を持つ理由は何だ？」

「私は、証明しなくちゃいけない。お前なんかには殺された弱い奴の代わりなんかじゃなく、席次の十三すら超える存在であることを」

「おまえ、そんな薄っぺらな理由で、俺を襲いに着たのか」

タバコに火をつけ、煙を吐き出したユヅルはつまらなそうに口にするが、その表情からは、はつきりとした怒りが伝わってくる。

「なら、あの人の、テメエの父親に代わって、俺が、ぶん殴ってやるよ」

「あいつのことを、お前が口にするなっ」

怒りと共にレベル力が引き金を引いた瞬間、彼女の顔にユヅルの右こぶしが突き刺さる。容赦も、手加減もまったくなく、力任せにたたきつけられたこぶしを受け、彼女の体は宙に浮き、次の瞬間、地面にたたきつけられる。

「あの人と比べてるのは、他の誰でもないおまえ自身だろうが」

「ちがう、私は、既にあいつを超えたっ」

「超えたわけ、ねえだろうが」

立ち上がったレベル力の顎は、強烈な衝撃を受けて、再び体を宙に浮かせる。衝撃の正体は、死角から繰り出されたユヅルの左こぶ

し。

「守られてただけの奴が、命賭けて守ろうと立ち上がり続けた奴を、超えられるわけねえあろうが」

タバコの煙を吐き出し、追撃しようとはせずに、レベッカが立ち上がることを待つ。

「あんなやつが、守り続けただと。私と母を捨てた、あんな奴が」

「不幸自慢なんて、こっちは聞く気がねえんだよ。それに、その行動に理由があったことにすら、お前は、考えようもしない」

「理由だと、そんなもの、何の言い訳にも」

次に彼女を襲ったのは、壁にたたきつけられる衝撃。神速のスピードで繰り出されたユヅルの、右足。受身を取ることもできなかった彼女は、背中を壁に預けながら、それでも立ち上がる。

「そうだろうな、テメエはそうなんだろうな。自分の不幸を理由に、今まで、自分を守ってきた、信じてきたものすら、すぐにゴミ箱行き。そんなんで、あの人を超えたなんて、軽々しく、口にするんじゃない」

ユヅルは、ゆっくりと彼女に近づき、彼女の服を右手で掴み、ねじり上げ、彼女の体を持ち上げる。

「確かに、お前の能力は、あの人を超えたかもしれない。だが、ただ、それだけだ。それ以外、お前は、あの人の方、言葉、意思、どれをとっても、足元にすらおよばねえよ」

そして、言葉と共に、力を込め、レベッカの首を締め上げる。

「お前に、一つ、大嫌いな事実を教えてやる。俺が、あの人を殺したのは去年。あの人が、異端審問局を裏切った理由は、家族を守るためだ」

そう口にして、彼女を力任せに投げつけるユヅル。コンテナにぶつかりながら、血を吐きながら、それでも、レベッカは立ち上がる。しかし、その表情からは、明らかに動揺していることが読み取れる。「嘘だつ、お前は嘘を口に出している。あいつが、捨てた家族を省みることなど」

「去年、お前は、母親と共にテロ組織に人質にされているな」

「なぜ、そのことを知っている」

「情報屋から、お前の情報を買った。おかげで高くついたが、それで、俺の中で絡んでた糸が、解けた」

レベツカの動揺は、彼の言葉でさらに大きくなっていく。それでも、ユヅルは、言葉を続ける。

「執行官としては、信じられない失態だ。あの人は、家族を人質にとられ、異端審問局の内部情報を外部組織に渡す為に、持ち出した。その外部組織は、予想がつくだろう、お前と母親を人質にした組織。そして、俺はあの人と対峙した」

気持ちが揺れているレベツカは言葉を口に出せない。

「俺は、あの人に聞いた。他に選択肢はないのかと。それに対して、あの人は、俺にこう、口にした。父親って奴は、いつになっても、嫌われても、悪役になっても、家族を守りたいんだと。その時、生まれて俺は初めて、敵対する人間に敬意を持ったことを、今でも覚えてる」

「うそだつ。あいつが、あいつが、そんなことをするはずが」

かんしゃくを起こした子どものように、両手で頭を抱えながら、彼女はその言葉を否定する。

「まだわかんねえのか、テメエは。あのひとは、最後の最後で、執行官である自分よりも、父親であることを取った。あの人にとって、sonだけ、お前らは大切な存在だったんだよ。それまで、苦楽を共にした戦友や、仲間と家族を天秤にかけて、迷わずにお前たちのことを選ぶぐらい、守りたい家族だったんだよ」

「黙れっ」

「異端審問局は、社会の嫌われ者。執行官ともなれば、恨みだけでも相当な数を買ってる。その恨みの矛先が、自分から家族へ行くことを、あの人は恐れた。そして、遠ざけた」

「だまれっ」

「テメエだって、本当はわかってるんだろ？ あの人は何の考えも

なく、自分のそばを離れるはずがないって」

「だまれっ、だまれっ」

「そうして、事実を、受け入れることを拒んで、弱い自分を守り続けてるんだろ。そうしないと、自分の心がつぶされてしまうから」

「黙れと、言っている」

「テメエは、あの人の背中に、父親の背中に何を見た。あの人は、後悔していなかった。自分の選択に、絶対の自信を持っていた。だから、俺も、それに答えた。もう一度聞くぞ、お前は、本当にあの人を超えたのか？」

「犬死した奴なんて、私は超えたに決まっている」

武器もなしに、怒り任せに突っ込んでくるレベツカ。それは正に、赤い布に興奮して突っ込んでいく闘牛そのもの。何の技術もなく、回避することなど、ユヅルには容易い。

「これだけ言って、まだわかんねえのか」

ため息を一つついて、その場を動かない。

「今まで築いてきた、立場も、仲間も、プライドも捨てて、一人の人間として、戦う覚悟がお前にあるか。ねえだろうな。くだらないことに固執したお前には無理だ」

接触まで、二秒もない。

「まっすぐ、家族を守ろうとした、でっかい父親の背中から目をそらし、テメエの安っぽい心守ってる奴が。全部犠牲にして、それでも守ろうと、勝てないことを知りながら、挑み続けた人を。あつたけえ手で、自分が傷だらけになっても、家族を守り抜いた人を。最後は笑顔浮かべて、死んでいった人を。軽々しく、超えたなんて、口にするんじゃないよ、弱虫」

怒号と共に、右のこぶしを、レベツカの顔面に、カウンターでたたきつける。

「あの人の墓に、花でも供えて、手を合わせてから出直して来い」
吐き捨てるように口にして、ユヅルは能力を解除した。

魔弾の後継者3（後書き）

紅蜘蛛編に影響を受けすぎた気がする

魔弾の後継者4（前書き）

とりあえず、決着

魔弾の後継者 4

「それで、あんたはいつまで草葉の陰で見守ってるつもりだ？」

「それだと、私が死んでる扱いですね」

タバコの煙を吐き出しながら、目覚めないレベツカを一瞥し、ユヅルは口にする。そんな彼に答えたのは、金髪碧眼の美女。人によつては女神と表現するかもしれない。グラビアモデル顔負けの肢体をパンツスーツに押し込んだ美女は、サングラスをはずし、ため息を一つつく。

「彼女、死んでませんよね？」

「別に殺しても良かったんだけどな。とりあえず、あの人のことを誤解したまま、つてのはいただけなかったただけだ」

「そうですか、それは何より」

美女は、ユヅルへと歩み寄り、彼の口元からタバコを奪うと、地面へと落とし、靴底で火を踏み消す。

「タバコは止めなさいと、何回も口をすっぱくしていったはずですよ」

「本当、堅苦しいって言うか、まじめだよな、あんた」

タバコを取り上げられ、ユヅルはため息を一つ。

「それで、現在時刻は？」

「午後七時を回ったところです」

「そうかい。到着は八時って聞いてたはずなんだけど、俺の聞き間違いかな、エカテリーナ？」

「いいえ。間違つてはいませんよ。私の本体は、まだ羽田に到着していませんから」

エカテリーナ・フォルダン。

異端審問局、局長秘書官にして、席次の八を担う彼女は、いつも含みのある口調で話す。その為、ユヅルは若干彼女のことを苦手としている。

「ああ、分身か、それ」

「ええ、それにしても、ユヅル。もう少し、加減というものを覚えてください。仮にも、女の子相手なんですから、おなかと顔に打撃を加えるのは、人としてどうかと思いますよ」

「あんたは、人を殺せるやつを性別で、加減を決めたりするのか？」
「まったく、ああ言えばこう言う。本当、年相応に、年上に言いくるめられてくださいよ。そうじゃないと私、泣きますよ？」

「勘弁してくれ」

談笑するユヅルとエカテリーナ。そんな中、レベツカが意識を取り戻し、鼻血をポケットから取り出したハンカチでぬぐう。

「起きたみたいだな」

「ですね。とりあえず、私が説明しますから、あなたは少しの間、黙っていてください」

「嫌だつて言ったら？」

「別に、どうもしませんよ」

「勝手にしてくれ。俺は、これから羽田に向かうから、後よろしく」

「はい、任せました」

そんなことを口にして、ユヅルはその場を去っていく。そして、その場に残される二人。

「それで、レベツカ・サウザード執行官。彼は強かったですか？」

何気ない問いに、彼女は答えることができない。そんな彼女に対して、微笑を浮かべながら、

「では、質問を変えましょう。彼の言葉は、痛かったですか？」

エカテリーナは答えづらいであろう質問を口にする。当然、レベツカはすぐに答えることができず、言葉に詰まってしまふ。

「そうですね、無理に答えなくても結構ですよ。あなたの表情で、大体の予想はつきましたから」

「それで、処分を言い渡しに着たんですか？」

レベツカは、仕事とは関係なしにこの場所に来て、人的被害を出しただけでなく、戦闘行為にも及んでいる。秘書官として、執行官

を取り締まる立場であるエカテリーナ。彼女がこの場に現れたのは、それが理由。そう、彼女は考えていた。

「処分？ あなたはいつたい何を言っているんですか？」

本当に、何を言っているのかわからないといった様子で、エカテリーナは首をかしげる。だが、首を傾げたいのは、むしろレベツカのほう。

「私は、彼の変化を直接確認することができたので、十分ですよ。その為に、あえて体を張ってくれた人を、どうして処分できましようか」

彼女に、ユヅルのことを説明したのは、エカテリーナ。そう、暗に彼女はこういつているのだ。

『あなたを利用させてもらいました』
つと。

「そうですね、では、代わりに一つ質問をします。あなたは、嘘偽りなく答えてください」

「はい」

「あなたは、今回、自分が処罰される対象であると、自分で自覚している」

「はい」

「そうですね、なら、処罰ではなく、一つ、仕事を与えることにします。別にそんなに難しいことはありませんから、気楽に考えていいですよ」

そう言つて、エカテリーナは、レベツカの耳元でささやく。だが、それを聞いて、レベツカは、

「無理です」

「大丈夫ですよ、あなたならできます。それでは、又、後ほど」

笑顔で手を振り、その場から一瞬で消えるエカテリーナ。そこで、彼女は、先ほどのユヅルの言葉を思いだしながら、

「お墓、どこにあるんだろう」

執行官になってから初めて、父に会うことを決めたのだった。

魔弾の後継者4（後書き）

次回から、

再び舞台は学校に戻ります

水着×mizugui（前書き）

季節は、冬のはずです。

「それで、って、きちんと私の話を聞いてますか、ユヅルさん」

「ああ、とりあえず聞いてるよ」

学校の屋上、昼食をとりながら、カナミは隣で購買のパンを食べ
ているユヅルに対して不満を口にする。彼が、この天禅寺高校に転
入してきて、約二ヶ月になろうとしているが、未だに、カナミの弁
当は食べてもらえていない。

「文化祭についてだね」

「そうですね、ゆゝ君。きちんと聞いてください」

一緒に昼食をとることになったカズキとヒサノにまで言われ、彼
は閉口してしまう。そして、彼は、自分の隣で昼食を取っている女
子生徒に視線を向ける。レベッカ・サウザード。ユヅルと同じ異端
審問局所属の執行官であり、実際に殺し合いをした人間。なのだが、
なぜか、殺し合いをして一週間も経たずにこの学校に転入してきて
いる。

「先輩、私の顔に何かついていませんか？」

「別に」

納得はいつていないものの、ユヅルはそれを口に出すことなく、
食事を終了する。

「話を本筋に戻しますよ、今日は、文化祭のユヅルさんのスケジュ
ールについてです」

「スケジュールねえ」

どうして自分のスケジュールを、自分で組むことができないのか、
彼は疑問を持ちながら適当に話をあわせる。

天禅寺高校の文化祭は、若干特殊な時期に行われる。行われるの
は、十二月の二十二から二十四の三日間。終業式を二十一日に行い、
その後、三日間をお祭り騒ぎに当てるといった理事長の考えである。
「軽音楽部は、たしか、最終日のステージ参加だったはず」

「手芸部は、二日目の午前中が当番になってます」

本人の意見を無視しながら、着々と四人の女子によって、ユヅルのスケジュールが決定していく。

「そういえば、ユヅルさんは、誰か招待したんですか？」

カナミが疑問を口にした瞬間、その場にいた四人の女子の視線が、彼に固定される。天禅寺高校の文化祭は、初日が学内のみ、二日目、三日目が一般公開となっているものの、この文化祭が開催されている最中、部外者は生徒に配布されているチケットがなければ、敷地内に入ることができない。

「くるかどうかはわからないが、とりあえず二枚ほど、チケットだけは送っておいた」

「先輩、それは、男ですか、女ですか？」

食いついてくるレベッカに飽きれながら、

「そこ重要なのか？」

「……重要です」

聞いてみるが、四人同時に言われ、

「女だよ、ただ、お前は知ってると思うけど」

ため息をつきながら、レベッカを指差す。だが、当のレベッカは、首をかしげている。そんな彼女を手招きし、

「お前、自分と俺以外の執行官、何人くらい知ってる？」

「局長代理と、秘書官ぐらいです。顔を知っているのは」

彼女の回答を聞いて、肩を落とす。

本来、執行官に就任したとき、顔見せに他の執行官に挨拶に伺うのが基本なのだが、彼女はそれをしなかったらしい。もっとも、執行官が本部にすることが稀な為、合えていなかった線もあるが、二人というのは、あまりにも少なすぎる。

「俺が送ったのは、イスカリオテとマリーシャ、二人ともお前と同じ執行官だよ」

「聞いたことのない名前ですね」

「じゃあ、『軍神』と『戦乙女』の称号は？」

「それなら聞いたことがあります。確か、席次の三と六ですね」

「そう、その双子だよ」

「先輩の交友関係って」

「何か言いたげだな」

そんな風に二人で内緒話をしていると、アキタカが屋上に姿を現し、

「ユヅル君、ナンパしに行こう」

意味不明な言葉を口にしたので、その瞬間、ユヅルは固まってしまっ

「ちよつとこつち着て」

手招きされたので、仕方なく四人から離れて彼に近寄るユヅル。

「それで、何？」

「だから、ナンパしに行こう。二人で」

「はつきり言おう。おまえの言っていることの意味がわからん。結果だけでなく、その考えに至った過程も話せ」

いきなりの誘いを断ったりはせずに、説明を求めると、

「いやね、ちよつと懸賞サイトでこんなものを手に入れたんですよ」

そう口にして、アキタカは制服の内ポケットから二枚のチケットを取り出す。良く見ると、そこには新しくできたスパリゾートの名前が記載されている。

「よかったな、他をあたれ」

「いや、まだ過程をすべて話し終えてないですって」

「俺じゃなくて、他のやつを誘えよ」

「バンドのメンバーのことを言ってるなら、みんな補習です」

「あいつら、馬鹿だったのか」

「面目ないです」

天禅寺高校は、期末試験終了後、テスト休みが設けられ、授業はなく、部活動の為の自主登校という形を取っている。もっとも、そこで赤点を取ったものは補習という名目で、毎日授業参加を義務付けられているが。

「そんなわけで、一緒にナンパに行きましょう」

「一人で行け」

過程と結論を聞き、面倒だと判断したユヅルはすぐに断るのだが、
「一人でナンパなんてできるわけないでしょうが」

いきなり逆ギレされてしまい、言葉を失う。

「そりゃ、毎日美少女に囲まれたハーレム生活を送ってる、各ファンクラブのぶっ殺すランキングトップの人にはわからないでしょう。でもね、僕だって、モテインデスヨ？」

血の涙さえ流しそうな勢いでまくし立てるアキタカを見て、ユヅルはため息をつく。これは、後で知ったことなのだが、ヒサノだけでなく、カナミにカズキ、おまけにレベッカにまでファンクラブができており、いつも彼女たちと一緒にいるユヅルは、男子生徒たちにとって見れば、不倶戴天の敵らしい。

「わかったよ。ナンパはともかく、付き合ってやるよ」

「ユヅル君なら、そう言ってくれると思ってましたよ。それじゃ、後で連絡入れるんで」

表情をコロコロと変えながら去っていったアキタカ。

「平穩って、どんな状況をさして使う言葉だったっけな」

タバコに火をつけながら、傍観者になりたいと感じていたユヅルだった。

水着×mizugui(後書き)

さあ、

次から修羅場に突入です

水着×mizug12(前書き)

ナンパの成功率は、いかほど？

「すこし、遅れたか？」

「いえいえ、来てくれただけで御の字です」

二日後、学校へ登校はせず、ユヅルとアキタカは隣町の駅前で待ち合わせをしていた。勿論、このことを四人には二人とも知らせていない。

「それにしても、季節柄、こんなところにくるような奴は、馬鹿としか思えないんだが？」

「それは、僕を含めてですか？」

「勿論」

私服姿のユヅルは、パーカーのポケットからタバコを取り出して、火をつけて吸い始める。

「つゝか、ナンパしたいなら、別にこんな場所に来なくても」

「わかってない、ユヅル君は何もわかってない」

近くの柱に背中を預けたユヅルに対して、アキタカは彼の言葉を完全に否定する。

「いいですか、スパリゾート。この言葉に込められているのは、開放という名の水着。水着ですよ、水着。夏にしか本来拝めない、女性の至高の姿といってもいい。それを、夏ではなく、冬に拝める。

しかも、開放的な空間に水着。これほど、ナンパに向いているシチュエーションはありません」

アキタカに力説され、あきれながらも文句を口にできないユヅル。それだけ、彼の言葉には迫力があつた。

「まあ、いいけど。おまえ、確か彼女いたよな？」

「それとこれとは、別問題。問題ありません」

問題が山積みだろ

そんなことを考えながらも、ユヅルは決して口には出さない。最近になって、彼自身気づいたことなのだが、軽音楽部のメンバーは、

ユヅル以外全員彼女がいる。モテていないわけではない。だが、女性に対してはがつく肉食系。

本当、二ヶ月前の俺からは想像できないな

自分が今までおかれていた状況を振り返り、つつい自嘲してしまふユヅル。

「さて、いきますよ」

「あいあいさー」

適当に返事をしてチケットを受け取ったユヅルは、アキタカと共にスパリゾートへと歩き出した。

「これがスパリゾートねえ」

「すっげえ、水着天国です」

二人して、見ているものは同じはずなのに、口に出した感想はまったくの別物。建物内には、温泉の他、サウナに温水プール、ウォータースライダーに絶叫系のアトラクションまで完備され、これは一種のテーマパークといったほうが正しいかもしれない。

「それで、これからどうするんだ？俺、ナンパなんてしたことないぞ」

「大丈夫、問題なしです。俺が女の子に声をかけるんで、ユヅル君は何も言わなくて大丈夫です」

疑問を口にしたユヅルだが、アキタカはそれを一蹴。完全に、自信に満ち溢れている。

どこからその自信がくるのか、教えて欲しいもんだ

思っではいても、彼から受け取ったチケットで遊びに来ている為文句は口にしない。そんなユヅルを気にせず、アキタカは一人の女性に目をつける。

「ユヅル君、早速行きましょう」

「ああ」

生返事をしながら、アキタカに続くユヅル。

アキタカが目をつけたのは、黒のビキニを着た長身の女性。職業

はモデルなのだろうか、スレンダーなボディは、腰でくびれており、健康的な色気が漂っている。しかし、そこでユヅルは気づいてしまった。

「アキタカ、あれは止めとけ」

「なんでですか。ここまで来て怖気づかないでくださいよ」

ユヅルの忠告を無視して女性に声をかけるアキタカ。その瞬間、ユヅルは頭を軽く右手で抑えてしまう。

「あ、う、良ければ一緒にお食事でも」

「へえ、僕に声をかけるとは、ね。いいよ、ユヅル様も一緒なんだろう？」

そう、アキタカが声をかけた女性は、雨竜カズキその人。途中で、ユヅルは気づき、彼を止めたのだが、とめられなかったことをその場で若干、後悔している。

「うっ、雨竜さん？」

「そうだよ、君の知っている雨竜カズキ。なにか、問題でも？」

気づかなかったアキタカを、嘲笑するように淡々と口にするカズキ。そして、気づいていたユヅルはといえば、

「まさか、ゆく君がここにいるなんて。偶然ってすごいね」

カズキと一緒に来たのだろう、オレンジ色のかわいらしい水着を着たヒサノにつかまっていた。

「アキタカが懸賞でチケット当てて、誘える人間がいらないから一緒に着たんだが。そっちは？」

「この社長さんとお父さんが知り合いで、偶然チケットを頂けたんです」

本当のところ、父親にお願いしてチケットを入手したヒサノだが、それは決して口にしない。

「そっか、それで、お前ら二人だけか？」

「はい、何か問題でも？」

「いや、偶然が重なりすぎるのは、いかななものかと考えていただけだ」

ヒサノとしては、カズキにも秘密でくるつもりだったのだが、二人がこの場所に来る日時を彼女に調べてもらった為、断りきれなかったのだ。それゆえ、これ以上ライバルは増やしたくない。それが彼女の本音。対してユヅルは、芋づる式に後二人着たら、どうしようかと悩んだが、そこまで深く考えなくてもよかったらしい。

「うう、僕の今日の希望が」

「いや、まあ、がんばれ」

ナンパ失敗だけでなく、本日の行動予定が決定してしまったアキタ力は、その場で膝を着いて落ち込んでしまっている。とりあえず、慰めの言葉をかけては見るものの、彼の反応はない。

「それで、これからどうするつもりだい、ユヅル様？」

「どうするもなにも、一緒にいたほうがいいんじゃないか？」

「本当ですか？」

カズキの提案で、いい方向に転んだ二人は心の中でガッツポーズをとり、左側からカズキが、右側からヒサノが、それぞれユヅルの腕を取る。

「ふふつ、両手に花だね」

「あれ、一緒に乗りましようよ」

二人のテンションはかなり高くなってきたが、当の本人は歩きづらだけ。それぐらいいしか考えていない。

「はあ、勝手にしてくれ」

志半ばにして、失敗してしまった友を尻目に、彼は羨ましい状況で休日が始まった。

水着×mizugit2(後書き)

しかし、残りの二人も黙ってはいません

水着×mizugis（前書き）

華やかだけど、冷たい空気

「それで、これからどうするよ？」

食堂でカレーライスを口にしながら、ユヅルは意見を求める。

「遊べれば何でもいいんじゃないかな？」

「そうですね、息抜きみたいなものですから」

カズキ、ヒサノに共に言われ、ユヅルは余計に悩んでしまう。元々、アキタカに誘われてきた為、彼にはこの場所で何かをしようという、明確な目的がない。さらに言えば、こういったテーマパークに来るのは、カナミと一緒に行った遊園地を含めて二回目。遊ぶ、そのことに対して、彼はまったくといっていいほど経験がないのだ。「あいつはあいつで、どっかいつちまうし」
彼を誘った本人、アキタカはうなだれるだけうなだれて、一人でどこかに行ってしまった。そう、誘ったはずのユヅルを置き去りにして。

「気を利かせてくれたんじゃないかな？」

「何気に、空気の読める人みたいですね」

そんなことを口にしながら、二人の間は視線で火花が散っている。後は、一人、排除できれば、彼と二人きりで休日を謳歌できる。その考えは、二人にとって友情よりも、とても魅力的。

「そうは言っても、俺、こういうところ慣れてないしな」

「それじゃ、ゆる君、あれに乗りましょう」

食事を終え、適当にぶらつくことにした三人だったが、ヒサノが指差したウォーターライダーに乗ることに決定。しかし、その提案を受けたわりにカズキの顔色はあまりよくない。どうやら、彼女もカナミと同じように絶叫系のアトラクションが余り得意ではないらしい。

「別にいいけど、お前、大丈夫なのか？」

「安心したまえ、大得意だ」

絶対、嘘だな

視線を合わすことなく口にするカズキ。そんな彼女の様子を気にしながらも、三人で列に並ぼうとして、そこでユヅルの動きが止まる。

「これ、二人乗り？」

彼の視線の先にあるのは、カップル限定とかかれた文字。つまり、三人でも一人でも乗ることができないアトラクションらしい。

「なっ、なら仕方ない。僕が少し待っていることにしよう」

早々に戦線を離脱するカズキ。その時、ヒサノの瞳が光ったのは言うまでもない。

「じゃあ、行きましょう」

カズキを尻目に、ユヅルの腕を取って列へと並ぶヒサノ。その、実に嬉しそうな姿をみて、卑屈な気分になってしまふカズキ。

「じゃあ、少し待っていてくれ」

そう口にして、ユヅルとヒサノは列へと並んでしまう。

そして、二人に順番が回ってきたとき、係員の男性になぜか、殺意交じりの視線を向けられるユヅル。この男性、どうやら先ほどの三人のやり取りを見ていたらしい。

「この、ハーレム野郎」

「なんか言ったか？」

「いえいえ、それでは、きつちりと持ってくださいね」

バナナボートに似たものに跨り、取っ手に手をやるユヅル。しかし、その後ろに座ったヒサノは、なぜか取っ手を持たず、彼に抱きついている。

「これ、大丈夫なのか？」

「ええ、カップル限定ですし」

そう口にはしているものの、男性スタッフの顔は引きつっている。

「それでは、逝ってこい」

「おい、絶対演技でもないこと口にしただろ、今」

係員に突っ込みを入れるものの、ウォーターライダーはスター

ト。正直に言つて、ものすごいスピードで落下している。取っ手でバランスを取らなければ、コースアウトしてしまつてもおかしくはない。

やり辛い

後ろからヒサノに抱きつかれ、羨ましい状態のユヅル。しかし、本人には、その意識がなく、操作がやりづらいことに対する感想しかない。そして、そんな状態の彼は、当然のごとく、最後のほうで操作を誤り、二人してコースをはずれ、プールへと投げ出されてしまふ。

「おい、無事か？」

「はっはい、大丈夫です」

咄嗟の判断で、ヒサノを右手で抱きしめる形でプールに着水したユヅル。濡れた髪をかき上げながら、彼女に声をかけるものの、二人の顔の距離は十センチもない。

「とりあえず、あがるぞ」

「はい」

声をかけられながらも、ヒサノの顔はうつとりとしている。咄嗟の行動とはいえ、ユヅルは彼女をかばい、抱きしめてくれたのだから。

「おや、二人ともずぶ濡れだね」

「ああ、アレのせいだ。お前は乗らなくて正解だったかもしれない」カズキの元へ戻ってきたユヅルとヒサノの二人。ヒサノの顔が赤いことを確認し、何かあったのだとカズキは判断するものの、超がつくほどこの手のことに鈍感な彼が、そのことに気づく可能性が、非常に低いので、ため息を一つだけつく。

「そうそう、ヒサノ君、一つ君にお願いがあるんだ」

「私ですか？」

ユヅルではなく、自分にカズキが声をかけてきたのが不思議でしようがなく、首をかしげるヒサノ。

「あれに、一緒に参加してくれないかな？」

そう口にして、カズキが指差したのは、ビーチバレー大会ののぼり。

「二人がウォーターライダーに乗っている間に調べただけだね。アレ、どうやら女性限定で参加できるみたいなんだ。おまけに優勝商品は、ペアの一日二日温泉宿泊券、二回分。どうだい、ここは共闘してみるっていうのは？」

「やりましょう」

瞳に炎を燃やし、二人は互いに手を取り合う。優勝以外に興味はないといわんばかりに。

「あいつら、いつの間にか仲良くなったんだろう」

彼の目は、こういったことに関しては、節穴以外の何者でもなかった。

水着×mizugis(後書き)

イベント盛りだくさん

水着×mizugui4（前書き）

今回は短め。

つなぎの部分に近いかも

水着×mizugui4

「お前ら、本当にこれに出るのか？」

「勿論だよ」

「はい」

異口同音に答えられ、それ以上ユヅルは何もいえなくなってしまう。なぜか、開催されているビーチバレー大会。これに二人とも突然参加するというのだから。

「まあ、がんばってくれ」

そして、このビーチバレー大会が終わるまで、どうやって時間をつぶそうか考え始めるユヅルだった。

ビーチバレー大会。

大会と銘打たれているだけあって、参加者にはプロも名を連ねている。そんな中、優勝しようというのだから、彼女たちのやる気は相当なものなのだろう。

「それにしても、これ」

そう、彼が今見ているのは組み合わせ表。先ほどエントリーしたヒサノとカズキペアの初戦の対戦相手は、カナミとレベツカペア。

「あいつら、やっぱり着てやがったのか」

ため息をつきながら、どっちが勝つてもろくなことにはならない。そう考えているユヅルの前に、まるで、海を割るように男性陣を二つに分けながら、大会のコートに向かう女性二人組が。

「なんで、この場所に、このタイミングで」

今日は、厄日か？

ユヅルの視線の先にいる、女性二人組み。それに彼は見覚えがあった。っと、言うよりも完全に知り合いである。

ブロンドの髪を風になびかせ、青のビキニを着たグラマラスな女性、そして、同じブロンドの髪に、ピンク色の、これまたビキニを

着たスレンダーな女性。

この二人に見つかからないように、移動しようとしたユヅルだが、残念ながら、神様はサディスト。

「そこにいるのは、ダーリンね？」

「姉様、訂正してください。あの人は、私の旦那様です」
「どっちも違う」

即座に否定したかったユヅルだが、その場の男性陣の殺意と嫉妬が入り混じった視線を一身に受け、ため息をつくだけ。

「イジーにマリー、文化祭は二週間後だ」

そう、この二人が、彼が文化祭に招待した人物。イジーことイスカリオテと、マリーことマリーシャの双子。共に異端殲滅執行官であり、『軍神』と『戦乙女』の称号をもつ、異例尽くめの二人。ただ、彼の言葉を借りるなら、招待したのは、二週間後の文化祭であり、この時期にこの国にいるはずがない人物でもある。

「ええ、ちよつと急用があつてね」

「なら、こんな場所で遊んでる余裕なんてないだろ」

タバコに火をつけながら、ため息を一つつくユヅル。だが、その時、自分がどうしようもないほど油断していたことに気づく。先ほど、そう、一瞬前までいたはずのマリーの姿が、彼の視界から消えている。

まさか、嘘だろ？

執行官は、執行官同士での戦闘を基本的には、禁止されている。

これは、ユヅルという特例の『席次の十三』以外、すべての執行官が守らされているルール。だからこそ、彼は油断していたのかもしれない。戦闘とは、何も武器を用いて命を奪い合うことだけを呼ぶ言葉ではないことに。

少し遅れて、彼の首に小さな痛みが走り、瞳だけ動かし確認。ユヅルの首には小さな注射器の針が刺さっており、それをマリーが持っている。

「すみません、旦那様、『アンブレラ』からの緊急要請です。お許

してください」

落ちていく意識の中、ユヅルは嫌な言葉を聞いた。そして、
あいつらに、どう言い訳したものの
場違いなことを考えていた。

水着×mizugui4（後書き）

果たして、

彼は文化祭までに戻ってくることができるのか？

無貌の君臨者1（前書き）

彼にしてみれば、
初めての経験です。

無貌の君臨者1

ドイツ、ベルリン上空二万メートル。

突如として拉致されたユヅルは、ステルスヘリの中、仏頂面でタバコの煙を燻らせていた。

「だから、悪かったよ。謝るから、機嫌を直してくれないかな？」

彼の目の前に座る茶色の髪に、黒の法衣を着た青年が申し訳なさそうに頭を下げてくるが、その様子を彼は見ていない。

「拙者からも非礼を詫びさせて欲しいでござるよ、ユヅル」

青年の隣に座っている、これまた黒の法衣を着た黒髪に盲目の女性、青年に習うように彼に頭を下げる。

「ごめんなさい、兄様」

「ほんまに勘弁してほしいどす、ユヅルはん」

ユヅルの隣、銀髪に赤い瞳の少女とその隣に座る着物を着崩した黒髪の妖艶な美女がそろって頭を下げる。

「別に、怒ってねえよ」

つまらなそうに、タバコの煙を吐き出し、四人の謝罪を一蹴するユヅル。

確実に怒ってる

その時、四人の脳裏には同じ言葉が浮かんでいた。

「拉致されたのは俺自身の油断だ。まさか、『アンブレラ』の奴らが、そこまでなりふりかまわない連中だと、予想できなかった俺自身の失態だよ」

タバコの煙を吐き出しながら、彼は、四人と目をあわせようともしない。

アンブレラ。

異端審問局にあり、外部勢力を殲滅する為の武力行使部隊で、席次の一、二、五、七の四名で構成される。最強にして最凶の戦闘能力者集団。

席次の一、称号『斬術師』、鳳センザ。

席次の二、称号『詐欺師』、ケイオス・グリユーナク。

席次の五、称号『舞姫』、陣内フジノ。

席次の七、称号『殺戮者』、ハイドレンジア・フォルダン。

この四名によって構成された部隊は、未だに無敗にして戦死者ゼロ。歴台最強とまで言われている。しかし、そんな四人は、一人の少年、ユヅルに対して全員が頭を下げている。それだけ、席次の十三には、特別な意味がある。そう、彼は、最強ではない。だが、最弱でもない。しかし、执行官全員が束になってかかったとしても、返り討ちにあうことが確定している。执行官を単独で処分することができる唯一の执行官なのである。

「それで、わざわざ、俺をドイツまで引っ張ってきた理由は何だ？」
未だ、誰とも視線を合わせることなく、彼は問いかける。

「ユヅル、君は、無限書庫^{アーカイバ}について、どれほど知ってる？」

「およそ、七割つてとこだな」

青年、ケイオスの言葉に対して、少し悩みながらユヅルは答える。
無限書庫。

ありとあらゆる魂が行き着き、封じられているといわれている場所。別称では、アカシックレコードとも呼ばれ、この世のすべての知識がある場所とも。

「それがどうかしたのか」

「もし、無限書庫の知識を一人の人間が独占できるようになったら、世界はどうなるだろうか」

「戦争が起きるな」

至極当然のように口にする。

人間は欲深く、そして臆病な生き物。もし、隣にいる人間が、莫大な財産を抱えていたとしたら。もし、目の前の人間が、自身を傷つけるものを持っていたとしたら。欲望は欲望を、不安は不安を呼び、それを手に入れるため、それを取り除く為、人は力行使する。
「僕らが今から向かうのは、今現在、もっとも、無限書庫の入り口

に近いとされている人物の居城だよ」

「城ねえ。馬鹿と煙は高いところがすきって言うけど、そいつもその類か」

「それだけなら、拙者たちがくる必要もなかったのでござるよ」

盲目の女性、センザが思わせぶりなことを口にするので、彼は顔をしかめる。

「どういうことだ？」

「席次の九と十が、調査に向かい、殺されているでござる」

「へえ」

情報だけで知っていて、彼自身あつたことはないが、センザの口から出てきた二人は、ユヅルと同じ魂吸収者ソウルアブソーバーだったはず。それが、二人も殺されたとなれば、確かにアンブレラが動くには十分すぎる理由かもしれない。

「異端審問局最強部隊も、随分と臆病なもんだな」

「敵が、敵です」

侮蔑を口にした彼に対し、少女、ハイドレンジアは否定せずに答える。

「だから、ユヅルはん、あんさんの力も貸して欲しいんです」

フジノの言葉と共に再び四人が、彼に対して頭を下げる。そんな彼らを見て、ため息と共に煙を吐き出し、

「今日、日本だと何日だ？」

「十二月十三日です」

「そうか、なら、とつとといくぞ。どうせ、この下にその馬鹿は、いるんだろ？」

そう口にして、唐突に立ち上がったユヅルはドアを開け、

「俺はな、いろいろと仕事以外のスケジュールが詰まってるんだ。仕事してたほうが気楽だつて思えるくらい。だから、今回だけだ」

そのまま、パラシュートもつけずにヘリから身を投げ出した。

「秘書官の言うとおり、変わったね、彼」

「拙者もそう思うでござる」

「ますますいい男になってきましたなあ」

「兄様は、渡さない」

そして、それに続くように四人もへりから飛び降りるのだった。

無貌の君臨者1（後書き）

次回から、
攻略戦の開始です。

無貌の君臨者2（前書き）

この章、若干長くなりそうです

無貌の君臨者2

「ふむ、まあ、予想通りの展開だな」

銀色の髪に、右頬には蛇の刺青を入れた状態のユヅルは、とても楽しげにタバコに火をつけて煙を吸い込む。

先ほど、ヘリコプターから飛び降りたのは、彼を含めて五人。時間差が多少あったとしても、全員がバラバラの場所、他者を視認できない場所に下りることはほとんどないはず。

攻城戦は、あまり得意じゃないんだけどな

攻めることよりも、守ることのほうが容易い。

それは、武術の本質が守りに偏っていることだけでなく、人間の本能によるところが大きい。人間の反射的な行動は、訓練を受けたもの以外、そのすべてが自身を守るために機能している。故に、攻めるという動作をするためには、その反射を訓練で極力抑えなければならぬ。ましてや、この場所は相手の領域。侵入者に対するの対策はいくらでも講じることができる。

「はあ、面倒なことに付き合う羽目になったな」

愚痴をこぼしながら、彼は目の前にあるドアを蹴破り、中へと進入する。

「君には、礼儀と言うものが欠如しているのだろうか。ドアはノックしてから開けると、習わなかったかい？」

「お生憎様、礼儀を教えてくださいました人間は、それを適用すべき環境も教えてくれたんでな」

室内にいたのは、ピエロの仮面をつけたスーツ姿の人物。声は機械で変換しているのか、無機質であり、しぐさからも性別はうかがい知れない。そんな怪しげな人物の目の前、ちょうど彼のために用意されたかのように配置されたソファ。それに彼は、警戒することせず腰掛け、

「一つ聞かせろ、俺をこの場所に招いた理由は？」

タバコの煙を吐き出し、腕組みしながら問いかける。彼が落下した場所は、本来であれば、落下の衝撃で破壊されている箇所が多々あるはず。それにもかかわらず、彼に怪我もなければ、室内に破壊された痕跡もなかった。そうすると、相手が招き入れた可能性が非常に高い。

「君が、他の四人と比べて、格段に面白そうだったからだよ。ユヅル・ハイドマン君」

「人に言われると、不愉快だな」

ソファに背中を預け、タバコの煙を吐き出し、それと同時に言葉も吐き捨てる。

「他の四人は？」

「おや、お仲間のことが気になるのかな？」
機械的な声の為、その言葉に込められた意思は理解できないものの、

「そりやな、全員死亡してたら、俺の仕事量が増える」

彼は自分の考えを隠すことなく、正直に伝える。

「ほう、なら、君自身に負荷がかからなければ、死亡していても生存していても大差ないと。そう捕らえていいのだろうか？」

「そのとおり」

目の前の人物は、思案しているのか、左手をこめかみあたりに当て、口をつぐんでいる。

「あんた、何か勘違いしてないか？ 異端審問局は仲良し組織ってわけじゃない。エゴイストの集まりで、共通の目的があるから協力しているだけ。誰が死のうが、関係ない。まあ、あの四人がそう簡単に死んで、俺に仕事を押し付けるような連中でないことだけは確かだけだな」

説明するように言葉を続け、ユヅルは意地悪な笑みを浮かべる。

「さて、それでは楽しいおしゃべりの時間は終わりだ」

そう口にして、ユヅルは火のついたタバコの先を向け、左手の指でフィルターを挟む。

「ここからは、お互いの手札を交互に、オープンしていこう。いつでもおくが、これは提案じゃない」

「それは、私自身には、大変メリットのある話だが、君にそこまでのメリットはあるまい」

「だろうな、俺には基本的にリスクが大きい」

「ならば、なぜ？」

「そのほうが面白いからに決まっている」

目の前の少年、ユヅルは揺らぐことのない言葉で断言する。それが、どれほど愚かしく、恐ろしい行為であるか。ユヅルは、自分の命をまるで紙切れのようにしか扱っていない。慎重であれば慎重であるほど、目の前の人物が壊れていることを理解できるはず。

「そうだな、ルールは単純。制限時間は、四人がここに来るか、もしくは来ないで一時間が経過した場合。手札の公開は、相手の質問に対することのみで、交互に行われる。これについて、虚偽の申告は許されない。ただし、完全に知らない場合、あいまいな表現ではなく首を横に振って否定すること、以上だ。何か質問は？」

ユヅルの真意がどこにあるのか、それを曖昧にしたまま、目の前の人物は首を縦に振る。

「そんじゃ、先行はあんたでいいよ」

「それでは、君の提案に乗った上で聞きたい。なぜ、このようなことをする？」

「このようなことって、情報の開示しあいをするとか？」

「それ以外になにがある」

相手の第一手。

それは、デメリットしかない現状で、あえて自分を死地へと追いやる愚考。その考えの根底を知りたいと考えたがゆえ。対するユヅルは、

「スリルが欲しいからだよ」

「そんなことのために、あえて自分を窮地に追い込むと？」

「ああ」

簡潔に答えが目の前の人物は、信じられないといった感じで首を横に振る。

「馬鹿げている。君の真意はどこにある」

「続けて質問って、ルール聞いてたのかよ」

ユヅルは一つため息を一つつき、

「まあ、サービスしとくか。俺の真意、そんなものどこにもない。ただ、スリルを味わいたただけだ。それとも何か、あんた、自分にこれだけ有利な状況作って、勝利への方程式を磐石にした上で、自分の勝利に疑問を持つてるのか。おかしな奴だな」

本当に信じられないといった様子で首を鳴らす。

「これでいいか？」

「ああ」

納得はいつていないものの、会話でユヅルの真意を、あり方の根底を見極める為、話を進めることにする。

「そんじゃ、俺の番。あんたが二つ質問したから、こっちも二つ質問させてもらう。一つ目は、あんたの呼称。二つ目が、あいつらの置かれている状況」

目を細め、相手を観察するようにユヅルは探りを入れていく。

「私の呼称。それがさほど重要とは思えないが、好きに呼ぶといい」

「じゃあ、ピエロで」

ピエロ、なんのひねりもないネーミングセンスだが、二人は特に疑問を持っていないようだ。

「次に、君のお仲間の状況だが、四人バラバラにこの場所に向かって進んできている」

「バラバラにねえ」

あいつらもそこまで馬鹿じゃないはずだから、分かれて進まなければならぬ理由があったと考えるべきだな

攻城戦だけにあらず、攻める側の戦力の分散は意味を持っていないければ、即座に死を意味する。それを身をもって知っているユヅルは、現状の分析を開始し、楽しみに笑みを浮かべる。それはまるで、

新しいおもちゃを見つけた子どものように。

「これでいいかね？」

「ああ、十分」

「それでは、私から。四人、アンブレラの能力を教えてください」

ピエロが戦力分析に質問をしてくるのは織り込み済み。もつともここで、彼は仲間の安全を考え、首を横に振るべきなのだが、

「四人とも、俺と同じ魂吸収者で、能力名は忘れたが、切断、爆発、流動、操作の力を持つてる。ちなみに、切断が盲目の女で、爆発が男、流動が売女で、ちびが操作。こんなもんでいいか？」

特に悩むことなく、彼は自身の知っている知識を口に出す。

「ああ、十分だ」

何か、考えがあつてのことか？

ピエロは、おそらく偽ることなく仲間の力を告げた彼に対し、警戒のレベルを上げる。

「そんじゃ、これはお願いなんだが、あいつらの戦いを観戦したい。音声は別に拾えなくていいから、映像だけ拾えないか？」

「いいだろう」

そう口にして、ピエロが指を軽く鳴らすと、それぞれの前にディスプレイが現れ、四人のそれぞれの位置が表示される。

「操作方法は、画面の光点に触れれば、その人物の映像を見ることが出来る」

「至れり尽くせりだな」

軽口をたたきながら、ユヅルはそれぞれ動いている四つの点のうち、一つに触れる。すると、ディスプレイには、盲目の女性、鳳センザの姿が映った。

「第一の犠牲者は彼女だな」

その言葉にはゆるぎない自信が含まれている。しかし、

「どうしてそう思える？」

「君こそ、ルールを無視だな。まあ、先ほどの提案として扱うことにしよう。簡単な話、私は、四人それぞれがこの場所にくるに当

たり、確実に私の部下、魂吸収者と戦うようにルートをセッティングしてある」

なるほどね、面白い

口に出すことなく、ユヅルはタバコの煙だけを吐き出す。

「ほら、もう始まるよ」

それが、戦いの始まりを告げる言葉だった。

無貌の君臨者2（後書き）

次から個別戦闘開始

無貌の君臨者3（前書き）

ようやく更新

無貌の君臨者3

「そんな馬鹿なっ」

その声は機械音声でありながら、確実に狼狽していた。そして、ピエロはあわただしくディスプレイを操作していく。

「何をいまさら慌ててるんだか」

ため息混じりに煙を吐き出し、イスに背中を預け、ディスプレイへと視線を固定した彼だが、その瞬間、自身の目を疑う。

新手のパフォーマンスか？

ディスプレイに映っているセンザが室内に入ると、その室内には一人の男がうつぶせに倒れている。しかも、ただ倒れているわけではない。血の海に沈んでいる。

「貴様、いったい何をしたっ」

「いや、俺に言われても。何もしてないし」

「なら、なぜ私の部下が全員殺されている」

その言葉を聴いて、ユヅルはすべての光点に触れてみる。すると、どの場所でも、アンブレラの面々が死体に出くわしている。

「集団自殺でも流行ってるのか、ここは？」

場違いな言葉を吐き出しながら、彼は思考を開始する。

敵対する存在が死んでいる。

この事実だけならば、喜ぶべき事態なのだが、それをやったのは味方ではない。ならば、敵のうち誰かが裏切った。しかし、先ほど、映し出された光点の位置はすべて距離が離れていた。空間を自由に行き来できる能力者でもいれば可能かもしれない。だが、それならなぜこのタイミングで裏切る必要があった。

思考するものの答えの出ない問いに、彼はさじを投げ出したくなつたのだが、その時、不意にマナーモードにしていた携帯電話が振動した。

電波とどいてんのかよ、ここ。杜撰だな

とりあえず、目の前にいるピエロに視線を一度だけ移動させ、彼は携帯の通話ボタンを押す。

「はいもしもし？」

「ハイドマン執行官、手短に聞きます。現状は？」

電話の相手はエカテリーナ。その声は、彼女にしては珍しく硬い。「現状という？」

「作戦の進行具合についてです」

簡潔に言われ、とりあえず彼は、事実だけを説明することにする。「俺とアンブレラの四名は敵内部へと進入成功。途中で四人とははぐれた。加えて、四人とも敵に遭遇することなく進んできてるみたいだ。どうにも、敵さんの用意した手駒が、第三者によって除外されたらしい」

「なるほど、それはいいことです。私も体を張った甲斐がありました」

「ちよつとまで、会話の流れから察するに、第三者を招き入れたのはあんたなのか？」

「はい」

その言葉を聴いて、彼は絶句する。

この女狐、いったいどこまでの展開を読んでいやがった

「敵勢力の排除に成功したというのであれば、おそらく、もうすぐ姿を現すことでしょう」

「そんなに、自分の愛弟子たちが心配なら、自分が着いてこいよ。俺なんかに任せずに」

「保険というものは、常に二重三重にかけておくものです」

「ああ、そうかよ」

元アンブレラの隊長であったエカテリーナ。彼女は、彼に気づかせることなく、策を用いていたということになる。

「誰かを騙すなら、味方からだっけか？」

「違いますよ。誰かを騙すなら、自分以外のすべてを欺いてこそです」

「そいつは勉強になったよ」

若干苛立ちながら、ユヅルは通話をきる。

「話はあらかた聞こえてたと思うが、一応、本筋だけ伝えておく。非常に残念ながら、こちら側は、誰一人としてかけることなく、むしろ一人増えてこちらに向かっている」

「なら、この殺人を犯したのは、貴様の側の人間だと」

「そうらしいな。俺も電話で聞いてはじめて知った」

本当につまらなそうに吐き捨てると、ユヅルはその瞬間、驚愕でタバコを口から落としてしまう。

室内に突然現れていた男。

ぼさぼさの黒髪にサングラス、無精ひげを生やし、一応スーツを着ているものの、清潔感は無に等しい。しかし、そんなことは彼にとっては些細な問題。重要なのは、視線の先にいる人物が、彼の記憶に刻まれているということ。

「ウインド隊長？」

それは、亡霊でも見つけたように間の抜けた声。

「なるほど、若干変わっているがどうやらあの女の言っていたとおり、バリスタで間違いなさそうだ」

男は、髪をかきながらつまらなそうに彼の昔の名前を口にする。間違いはない。

ユヅルの目の前にいるのは、彼を戦場で拾い、戦闘スキル、戦術的思考を叩き込んだ人物。

「そちらの奴にも名乗っておこう。本日付で異端審問局所属、異端殲滅執行官、席次の九に任命された。名は、ウインド、以上だ」

無貌の君臨者3（後書き）

そして、合流

無貌の君臨者4（前書き）

まだまだ本題にたどり着かない

無貌の君臨者 4

「それにしても情けない。俺様は、こんな間抜けを育てた覚えなどないのだがな」

吐き捨てられるのは、再会の喜びを完全に打ち砕く侮蔑の言葉。

「背後への警戒が疎かだと、そういいたいのか？」

「ご名答、クスッ」

ユヅルの言葉に答えるように、背後から彼に突きつけられる刃と言葉。それも、彼は忘れることなく覚えていて。だから、振り返ることなく、

「そうだよな、元隊長がいるんだ、元服隊長のあんたもいて、当然といえば当然だ。久しぶりだな、レイブン副隊長」

新しいタバコに火をつけ、つまらなそうに、落ちたタバコの火を靴のそこで踏み消す。

「あらっ、可愛くない。そういうところは相変わらずみたいね。でも、いいのかしら、自分の命を相手に握らせたままで」

「ウインドが九つてことは、あんたが十でいいのか？」

レイブンの問いに答えることなく質問を投げかけるユヅル。その表情に焦りはなく、先ほど浮かんだ驚愕すら姿を消していた。

「ああ、ぴつたりだろ？」

「そうだな。他人の背後取ることしかできない暗殺者には、相応しい場所だな」

レイブンの代わりに問いに答えたウインドへ視線を一瞥、彼はタバコの煙を吐き出し、背後へと視線を送る。

その場にいたのは、黒髪に黒い瞳、顔に小悪魔のような表情を浮かべたスーツ姿の女性。年は、彼より少し上程度。

「なあ、何でナイフを動かさない？ 相手の命を握ったから？ 元仲間だから躊躇った？ 違うだろ。俺は目の前の男に標的は殺せるときに殺せと教わった。鰯るのは、拷問のとき以外する必要はない

とも」

「何が言いたいのかしら？」

「折角再会できたって言うのに、落胆させるなってことだ」

その言葉と同時に、彼女は地面へとたたきつけられる。ユヅルは立ち上がっただけ。それ以外の動作が彼女には見えていない。

「それで、わざわざ執行官になってまで俺に会いたかったのか？」

子離れしない親は嫌われるぞ、ウインド」

「本当にそう思っているのだとしたら、自信過剰もいいところだ」

真っ向からユヅルの視線を受け止め、ウインドは答える。

「今回、俺様たちがこの件にかかわったのは、別にお前に関係していたからじゃない。エカテリーナとか言う女が、あまりにも必死こいて説得してくるものだから、交渉に乗ってやっただけのことだ」

「そうかよ」

そう口にして、懷から銃を引き抜いたユヅルは、ピエロに向かって引き金を引く。銃弾は、五発着弾し、ピエロはそのまま地面へと転がる羽目に。

「良かったのか？」

「本当なら、もう少し情報を手に入れてからにしたかった。だがまあ、ここで俺のプランを変更しておかないと、どうにも手遅れになりかねないからな」

床に転がったピエロはピクリとも動かない。そして、血液の一滴すら出さず、何かがはじける音が小さく響いている。

「あの女が何を考えているのか、俺の理解の範疇にはない。だが、あんたがここにいるのは、いろいろと都合がいい」

吐き捨てて、

「レイブン、これから四人の馬鹿がこの部屋に来る。そいつらと一緒に、この城の主を消しとけ。つゝか、いつまでも寝てないで働け」

乱雑に命令し、ユヅルはゆっくりと息を吐き出す。

「ウインド、あんたには付き合ってもらうぞ」

「ほづ、俺様をご指名とは、嬉しいねえ」

「すぐにそんな戯言は口にできなくなる。行くぞ」
その瞬間、二人の姿が彼女の視界から消失した。

無貌の君臨者4（後書き）

合流できなかった

無貌の君臨者5（前書き）

移動先は？

無貌の君臨者5

「それで、お前は俺様をどこに連れてきたんだ？」

開口一番、ウインドはユヅルにたずねるが、その答えはひどくつまらないものでしかない。

「ここは、王立図書館だ」

「王立図書館？」

「表向きは大英図書館って、仰々しい呼び方があるな」

つまらなそうにタバコの煙を吐き出すユヅル。しかし、本来立ち入り禁止のこの場所にいることが誰かに知られてしまえば、国際問題にも発展しかねない。

「何をしに？」

「荷物持ちに決まってる。とりあえず、このリストに載ってる本をすべてかき集めて来い。話はそれからだ」

紙切れを一枚放り投げ、ユヅル自身も本棚へと向かい目当ての書籍を探していく。そんな彼を見て、

「つまらん」

吐き捨てるように口にしながらも、彼はリストの書籍を探している。

「これでいいのか？」

「ああ、次に行くぞ」

短く答え、二人はその場所から移動する。

「クロードル、エカテリーナ、並びに解析班と技術班、準備はできているな？」

次に二人が現れたのは、異端審問局本部。そこでは、執行官二人が、各々人員に指示を飛ばしているところ。そんな中、ユヅルがい

きなりウインドを伴って現れた。

「まったく、貴様はいつもいきなり現れるな」

「黙れ、お前の軽口に付き合ってる暇はない」

話しかけてきたクロードルを一蹴し、自身の持っている書籍とウインドの持っている書籍を机に置き、

「大英図書館で集めてきた資料だ。勝敗はあんたらにかかっている。頼むぞ」

短く彼は告げる。しかし、その言葉を聴いた白衣の人員たちはそろって雄たけびを上げ、右こぶしを振り上げる。

「エカテリーナ、とりあえず俺は指示通り動いた。後はあいつら次第だ」

彼女へと視線を送り、煙と共に言葉を吐き捨てるユヅル。一人、この場で話のないように着いていけないウインドは、ようやく言葉を搾り出す。

「それで、いい加減俺様を連れまわした理由を話してくれないもんかね」

「説明は、この悪女に頼め。間違っても、あっちのジャパニメーションマニアには頼むな。時間の無駄だ。そして、俺にはまだやるべきことがある。だから、そいつに話を聞き終わったら送ってもらえ」
彼はそれだけ口にして、そのままその場から消え去ってしまう。

「なんなんだ、一体？」

「事情が事情ですから、仕方ありません」

「そうそう、説明を頼む」

ウインドは、今度こそ事態の説明を求める。ようやく話の通じる人物がいるので。

「そうですね、どこから説明したらいいものでしょう。ちなみに、数秘術や天使に関する知識はどれほどお持ちですか？」

「ほとんどない」

断言する彼を見て、エカテリーナはため息一つつくこともなく、
「それでは、一番重要なことだけ説明しておきます。天使に関して

です」

「随分とメルヘンだな」

「茶化さないでください。いいですか、天使とは、天の使いという意味。それぐらいは理解できていますよね？」

「あまり人を馬鹿にしないことだ」

「獰猛に犬歯をむき出しにして、笑みを浮かべるウインド。しかし、その顔を見てもエカテリーナの表情は涼やかなまま。

「それでは、天使がその肉体に内包する力に關しては？」

「さあな」

「そうですね。話を先に進めます。天使一体がその肉体に内包できる力は、おおよその値で、数百万メルス。百メルスが魂吸収者^{ソウルアブソーバー}一人の許容量だと計算した場合、一個師団導入してようやく五分の戦力です」

彼女の言葉を聴いて、ウインドの顔から血の気が引く。魂吸収者は、その能力によって個体差はあるものの、人間が到達できる限界を軽く凌駕している戦闘兵器。それを上回る戦力を持つている存在があるとすれば、勝てる確率がいかほどのものか。

「ちなみに、無限書庫^{アーカイバ}に天使が存在しない理由がこれに該当します。加えて、悪魔が存在しない理由も」

エカテリーナの言葉を聴いて、彼は首をかしげる。彼の元部下であり、現在この異端審問局に所属している彼は、

「なら、どうしてあのガキは」

「それについては、残念ながらお答えすることはできません」

「なんでだ？」

「第一級秘匿事項となっていてしますので、情報を開示できるのは、大司教以上の階梯を持つ方のみとなっていますからです」

それ以上、彼女は答えようとはしなかった。

「はあ、この場所に足を踏み入れんのは、一体何年ぶりになるんだろっな」

つまらなそうに、それでいて誰に問いかけることなく言葉をつむいだユヅル。

「およそ、二年と十一ヶ月だ。人間の時間経過で計算するならだが」暗闇の中、銀色の髪に、白い仮面をつけた人物がつまらなそうに彼の質問に答える。しかし、質問に答えてもらったはずのユヅルは、不機嫌そうにタバコのフィルターを噛み千切る。

「お前が案内役かよ、イレイザー」

「不服かな、我が主」

そう、悪魔たちの王は不適に答えた。

無貌の君臨者5（後書き）

彼はどこに向かったのでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7901v/>

学校へ行こう

2011年10月10日03時15分発行